

# 大日寺遺跡

2001年3月

河内長野市教育委員会  
河内長野市遺跡調査会

## 序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう街道の要衝として発展してきた街です。このため市内には数多くの文化財が残されています。

このような河内長野市は、大阪市内への通勤圏に位置しているため、住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした文化財や自然に対する影響も大きいものがあります。とくに、地下に眠る埋蔵文化財は開発と直接に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、さらには未来の市民へ伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市に於いては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達の残したメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用していただければ幸いです。

これらの発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成13年3月

河内長野市教育委員会  
教育長 福田弘行

## 例　　言

1. 本報告書は平成11年度に河内長野市遺跡調査会が河内長野市教育委員会の指導の下に大阪府南部流域下水道事務所から委託を受けて実施した大日寺遺跡(D N T 99-1)の発掘調査報告書である。調査にかかる費用は、大阪府南部流域下水道事務所が負担した。
2. 発掘調査は河内長野市教育委員会教育部社会教育課主幹兼文化財保護係長尾谷雅彦、同係鳥羽正剛・太田宏明の指導のもとに、実施した。内業調査は河内長野市立ふれあい考古館館長中西和子が指導した。
3. 本書の執筆、編集は太田が行い、編集は中西がこれを補佐した。第3章 第2節はふれあい考古館館員藤田徹也が執筆した。
4. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。(敬称略)  
大塚美幸・大西京子・喜多順子・杉本祐子・中村幸子・橋本裕子・松尾和代・牟田口京子
5. 発掘調査については下記の方々の協力を得た。記して感謝する。(敬称略、順不同)  
株式会社島田組・写測エンジニアリング株式会社・株式会社ワールド・永井正浩・森岡秀人・渡辺邦雄・竹村忠洋・辻康男・森村健一・橋本久和・橋田正徳・樋口吉文・鶴柄俊夫・山田幸一・河内一浩・伊藤聖浩・上田睦・庵之前智博・小野信一・片山須香子・菊井佳弥・喜多貞裕・木村友晃・斎田菜穂子・酒井祐介・進藤智美・曾和睦雄・田川富子・辻宏子・恒石建志・永尾衣利・中里伸明・西川正彦(千早赤阪村教育委員会)・華井京子・花房香・藤原哲(現、(財)松江市教育文化振興事業団)・山野智史・松山功・箕造加奈子・三好清超(現、岐阜県神岡町教育委員会)・渡辺京子
6. 写真撮影は、遺構については太田、遺物については中西が行った。
7. 本調査の記録はスライドフィルムなどでも保管されており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

## 凡 例

1. 本報告書に記載されている標高はT Pを基準としている。

2. 土色は『新版標準土色帖』による。

3. 平面測量は国土座標第VI系による5mメッシュを基準に実施した。

4. 図中の北は座標北である。

5. 本書の遺構名は下記の略記号を用いた。

S A…構 S D…溝 S E…井戸 S K…土坑 S O…土釜埋納遺構

P…柱穴 S R…墓 S T…古墳 S W…石垣

6. 遺物名は土師質土器を土師質、瓦質土器を瓦質、須恵質土器を須恵質と略称し、器種名を付した。

7. 遺構実測図の縮尺は1/20、1/30、1/40、1/50、1/60、1/80、1/100、1/200、1/300である。

8. 遺物実測図の縮尺は、土器1/4、瓦1/4、金属製品1/3・2/3、石器2/3とした。

9. 須恵器、瓦器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器の断面は黒塗り、弥生土器、土師器、黒色土器、土師質土器の断面は白抜き、金属製品、瓦の断面は斜線である。

10. 遺物番号と写真図版の番号は一致する。

11. 文中の編年、分類等については章末に註として明記した。なお器種名については本調査会の標記によるものとする。

# 目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表目次

付図目次

図版目次

第1章 はじめに	(太田)	1
第1節 調査の経過		1
第2節 位置と環境		2
第3節 既往の調査		7
第4節 調査方法		8
第2章 調査の成果	(太田)	11
第1節 基本層序		11
第2節 上層遺構面		11
第3節 下層遺構面		43
第3章 考 察		89
第1節 横穴式石室について	(太田)	89
第2節 中世土壙墓について	(藤田)	102
第3節 考古地磁気年代推定		111

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 河内長野市遺跡分布図(1/4000)	4
第3図 調査区位置図(1/2500)	7
第4図 調査区杭削図(1/500)	9~10
第5図 S A 1 遺構実測図(1/80)	12
第6図 上層遺構面調査区全体図及び溝遺構配置図(約1/1000)	12
第7図 S D 1・2 遺構配置図(1/200)	12
第8図 調査区土層断面実測図①(1/60)	13~14

第9図	調査区土層断面実測図②(1/60)	15~16
第10図	S D 3 ~ 7 遺構配置図(1/200)	17
第11図	S D 3 出土遺物実測図	17
第12図	S D 4 出土遺物実測図	18
第13図	S E 1 遺構実測図(1/50)	19
第14図	調査区上層遺構面全体図(約1/1000)	20
第15図	S K 2 ~ 7 遺構配置図(1/200)	20
第16図	S K 8 ~ 10 遺構配置図(1/200)	21
第17図	S K 10 出土遺物実測図	21
第18図	S K 11 ~ 12 遺構配置図(1/200)	22
第19図	S K 13 ~ 21 遺構配置図(1/200)	22
第20図	S K 13 遺構実測図(1/20)	23
第21図	S K 13 ~ 15 ~ 18 ~ 21 出土遺物実測図	23
第22図	S K 18 遺構実測図(1/20)	25
第23図	S O 1 遺構実測図(1/20)	26
第24図	S O 1 出土遺物実測図	27
第25図	S R 1 出土遺物実測図	28
第26図	S R 1 遺構実測図(1/20)	28
第27図	S W 8 ~ 9 出土遺物実測図	30
第28図	S W 1 ~ 5 遺構平面及び立面実測図(1/100)	31~32
第29図	調査区土層断面実測図(1/60)	33~34
第30図	S W 6 ~ 9 ~ 11 ~ 14 遺構平面及び立面実測図(1/100)	35~36
第31図	S W 10 ~ 12 遺構平面及び立面実測図(1/100)	37
第32図	S W 11 出土遺物実測図	37
第33図	S W 13 遺構平面及び立面実測図(1/100)	37
第34図	上層包含層出土遺物実測図①	38
第35図	上層包含層出土遺物実測図②	39
第36図	上層包含層出土遺物実測図③	39
第37図	上層包含層出土遺物実測図④	40
第38図	上層包含層出土遺物実測図⑤	41
第39図	上層包含層出土遺物実測図⑥	42
第40図	下層遺構面調査区全体図(約1/1000)	43
第41図	S D 9 ~ 10 出土遺物実測図	43
第42図	S D 8 ~ 10 遺構配置図(1/200)	43
第43図	S K 23 ~ 29 遺構配置図(1/200)	44

第44図	S K 23遺構実測図(1/60)	45
第45図	S K 30～44遺構配置図(1/200)	46
第46図	S K 39遺構実測図(1/40)	48
第47図	S K 39出土遺物実測図	49
第48図	S R 2 遺構実測図(1/20)	52
第49図	S R 2 出土遺物実測図	52
第50図	S R 3～6 遺構配置図(1/200)	53
第51図	S R 3～5 遺構配置図(1/20)	54
第52図	S R 3 遺構配置図(1/20)及び出土遺物実測図	55
第53図	S R 4 遺構実測図(1/20) 及び出土遺物実測図	56
第54図	S R 5 遺構実測図(1/20)	57
第55図	S R 6 遺構実測図(1/20)	58
第56図	S R 6 出土遺物実測図	59
第57図	S T 1 遺構配置図(1/100)	60
第58図	S T 1 検出状況図(1/40)	61
第59図	S T 1 全体図(1/40)	62
第60図	S T 1 石室展開図(1/40)	64
第61図	S T 1 墓道実測図(1/40)	65
第62図	S T 1・1次面遺物出土状況実測図(1/30)	66
第63図	S T 1・2次面遺物出土状況実測図(1/30)	67
第64図	S T 1・3次面遺物出土状況実測図(1/30)	68
第65図	S T 1 配石状況実測図(1/40)	69
第66図	S T 1 基底石配石状況実測図(1/40)	70
第67図	S T 1 墓壙実測図(1/40)	71
第68図	S T 1 土層断面実測図(1/30)	73～74
第69図	S T 1・1次面出土遺物実測図	75
第70図	S T 1・2次面出土遺物実測図	76
第71図	S T 1・3次面出土遺物実測図	77
第72図	S T 1 前庭部及び攪乱坑出土遺物実測図	78
第73図	下層包含層出土遺物実測図①	79
第74図	下層包含層出土遺物実測図②	80
第75図	下層包含層出土遺物実測図③	81
第76図	下層包含層出土遺物実測図④	82
第77図	尾谷雅彦による瓦質皿の分類と編年(1/4)	84
第78図	南河内地区における古墳分布密度(1/100)	90

第79図	一須賀古墳群の玄室幅指數の分布	91
第80図	寛弘寺古墳群の玄室幅指數の分布	91
第81図	MT15-TK10型式の玄室規模の分布	92
第82図	TK43型式の玄室規模の分布	92
第83図	TK20型式の玄室規模の分布	92
第84図	TK217a-b型式の玄室規模の分布	92
第85図	各部位の変異一覧	94
第86図	大日寺遺跡の土壙墓とその周辺	102
第87図	集落及び地形境界に位置する土壙墓の例	103
第88図	總持寺遺跡の土壙墓	104
第89図	西ノ辻遺跡第9次の木棺墓	105
第90図	4類の土壙墓	106
第91図	河内長野市域の土壙墓	107
第92図	パイロットサンプルKA-42の直交ベクトル図	114
第93図	消磁前(NRM)と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図	115
第94図	広岡により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた過去2000年間の地磁気水年変化曲線と測定結果 (黒丸は平均磁化方向、楕円は誤差角 $\alpha_{95}$ の範囲を示す。)	116

## 表 目 次

第1表	河内長野市遺跡地名表	5
第2表	各部位の用石法一覧	94
第3表	奥壁と須恵器型式の対応	95
第4表	玄室側壁と須恵器型式の対応	95
第5表	羨道と須恵器型式の対応	95
第6表	袖部と須恵器型式の対応	95
第7表	南河内地域の横穴式石室一覧	97
第8表	熱残留地磁気測定結果	115
第9表	考古地磁気測定結果(平均磁化方向)	116

## 付 図 目 次

付図1	DNT99-1遺構全体図(上層遺構面)(1/200)
付図2	DNT99-1遺構全体図(下層遺構面)(1/200)

## 図版目次

- 図版1 調査地遠景(東から)、(西から)
- 図版2 b～g・3～8区上層遺構全景(上から)
- 図版3 c 7～j 7区上層遺構全景(東から)、f 7～n 7区上層遺構全景(西から)
- 図版4 b～g・3～8区上層遺構全景(西から)、b～e・5～8上層遺構全景(西から)
- 図版5 o 7～g 7区上層遺構全景(東から)、n 7区上層遺構全景(東から)
- 図版6 S D 2(西から)、S D 3、S K 15～18(東から)
- 図版7 S D 3(西から)、S D 4～6(東から)
- 図版8 S K 13(東から)、S K 15(東から)
- 図版9 S K 17(東から)、S O 1 遺物出土状況
- 図版10 S R 1(南から)、S R 1 完掘状況(南から)
- 図版11 S W 1～5(南から)、S W 1～5(西から)
- 図版12 S W 1～5(北から)
- 図版13 S W 1～5(北から)
- 図版14 b～g・3～8区下層遺構全景(上から)
- 図版15 f 7～n 7区下層遺構全景(東から)、(西から)
- 図版16 S D 9(西から)、S D 10(東から)
- 図版17 S K 35(南から)、S K 39(南から)
- 図版18 b～g・3～8区下層遺構全景(西から)、柱穴群(西から)
- 図版19 S R 2 炭化物、骨出土状況、S R 2 遺物出土状況、S R 2(東から)
- 図版20 S R 3～5(南から)、(北から)
- 図版21 S R 6(東から)、(北から)
- 図版22 S T 1 検出状況(東から)、S T 1 石室検出状況(南から)
- 図版23 S T 1 石室及び堀形(西から)、(南から)
- 図版24 S T 1 基底石及び石室堀形(西から)、(南から)
- 図版25 S T 1 石室堀形(西から)、(南から)
- 図版26 S T 1 奥壁(南から)、S T 1 石室と羨道部(北から)
- 図版27 S T 1 西側壁(東から)、S T 1 東側壁(西から)
- 図版28 S T 1・1次面遺物出土状況北半部(西から)、南半部(西から)
- 図版29 S T 1・2次面遺物出土状況(南から)、S T 1・3次面遺物出土状況(西から)
- 図版30 遺物 S D 3(1～12)、S D 4(14～22)

- 图版31 遗物 S K 10(23)、S K 13(24·32·33)、S K 15(28)、S K 16(27·29),  
S K 17(26·30)、S K 18(31)、S K 21(34·35)、S O 1(42·43·46·48~53)
- 图版32 遗物 S O 1 (36·37·39~41·44·45·47)、S W 8 (62)、S W 9 (63~66),  
S W 11(67~75)、上層包含層(77~98)
- 图版33 遺物 上層包含層(99~106·110~149)
- 图版34 遗物 上層包含層(107~109·150~175)、S D 9 (176·177)、S D 10(178),  
S K 39(179·182·184)
- 图版35 遗物 S K 39(180·181·183·185~191·193~206)
- 图版36 遗物 S R 2 (207~209)、S R 3 (210~214)、S R 4 (216~218·220·221)
- 图版37 遗物 S R 4 (215)、S R 6 (222~232)
- 图版38 遗物 S T 1 · 1 次面(233~242)
- 图版39 遗物 S T 1 · 1 次面(243~251)、S T 1 · 2 次面(252~259·261·262)
- 图版40 遗物 S T 1 · 2 次面(260·263·264)、S T 1 · 3 次面(266~268),  
S T 1 · 扰乱抗(269~272·274)、下層包含層(279·281·288)
- 图版41 遗物 下層包含層(289~293·297·300·305~315·318~321)
- 图版42 遗物 下層包含層(322~331·333~352·354~362)

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経過

当該発掘調査は、大阪府南部流域下水道事務所(以下、「南部下水」という。)を事業主とする大和川下流域下水道長野中継ポンプ場(以下、「ポンプ場」という。)築造工事に先立つ事前調査である。

平成8年度に南部下水からポンプ場築造工事の建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地内にあるかどうか照会があり、文化財の取り扱いについて南部下水、大阪府教育委員会(以下、「府教委」という。)、河内長野市教育委員会(以下、「市教委」という。)の3者で協議を行った。市教委はポンプ場建設予定地が周知の埋蔵文化財、大日寺遺跡の範囲に該当することを確認し、埋蔵文化財の状況を確認するために確認調査を行い、調査の結果によっては全面調査の必要が生じることを伝えた。また、文化財保護法第57条の3の発掘通知、発掘調査依頼書を提出し、発掘調査にかかる覚書を締結するように求めた。

平成8年12月10日に南部下水から発掘通知が提出され、府教委を経由して文化庁に進達した結果、文化庁から工事施工前に発掘調査を実施するようにとの指導があった。この指導に基づき、再度、南部下水と市教委が協議を行った結果、平成10年度に確認調査を行い、これに基づき、平成11年度に発掘調査を行うこととなった。また、この協議内容に従って、市教委は南部下水と覚書を締結した。

平成10年6月4日に南部下水から市教委へ確認調査のための発掘調査依頼書の提出があり、市教委は河内長野市遺跡調査会(以下、「調査会」という。)へ発掘調査を依頼するようとに回答した。その後、南部下水から調査会へ発掘調査依頼書の提出があり、市教委の指導の下、南部下水は調査会と協定書の締結を行った。

平成10年11月16日から平成11年1月14日にかけて確認調査を行なった。確認調査では、ポンプ場築造予定地全体に2面の造構面を確認した。市教委はこの結果を受けて、工事施工前に全面調査の必要があると判断した。

平成11年6月17日に発掘調査(全面調査)について、南部下水から調査会へ発掘調査依頼書の提出があり、市教委の指導の下、南部下水は調査会と協定書の締結を行った。契約にかかる外業調査は平成11年8月6日から平成12年3月15日にかけて行った。

平成12年4月28日に発掘調査報告書作成のための内業整理の依頼が南部下水から調査会にあり、調査会は内業整理を平成12年8月29日から平成13年3月15日にかけて行い、すべての委託業務を完了した。

## 第2節 位置と環境

### 1 位置

当該遺跡は河内長野市の北部に位置する喜多町に所在する。地理的環境については、標高182mの烏帽子形山から北東に向かって派生する尾根状地形に立地している点があげられる。巨視的に見ると、烏帽子形山は河岸段丘及び沖積地に開まれた独立丘陵となっている。これらの沖積地及び河岸段丘は北側を除く三方が、丘陵や山地に開まれており、東に金剛山系、西に小山田丘陵、南に和泉山脈が位置する。

烏帽子形山は大阪層群によって構成され、基盤層には粘土層、砂礫層が交互に認められ、当該遺跡が立地する地山も粘土層、砂礫層が交互に繰り返される。烏帽子形山の西方約2kmの小山田丘陵もまた、大阪層群によって構成されている。一方で、烏帽子形山の東方2kmに広がる金剛山系東斜面は、領家層群の花崗岩岩盤よりなる。南には和泉山脈が連なり、これらは砂岩によって構成される。この小山田丘陵、金剛山系と烏帽子形山の間にはそれぞれ河川と、河川によって形成された河岸段丘、及び沖積地が広がっている。当該遺跡の東側を貫流するのが天見川であり、天見川の支流に加賀田川、石見川がある。西側を貫流するのが石川である。これら2つの河川は当該遺跡の東で合流する。市内の遺跡の多くはこれらの河川及びこれらの支流によって形成された低・中位段丘および沖積地の上に立地している。以下には、合流した後の石川流域を市内北部とし、市内南部と区別して記述を行いたい。

### 2 歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、石川流域に高向遺跡、上原遺跡が、天見川流域に三日市遺跡が所在しており、小山田丘陵には寺ヶ池遺跡が所在している。三日市遺跡では181点にのぼる剣片、石核、石器が出土している。石器はナイフ形石器、尖頭器、削器、楔形石器が出土している。高向遺跡ではナイフ形石器、有舌尖頭器が出土しており、寺ヶ池遺跡では有舌尖頭器が表採されている。

縄文時代になると遺跡の数は増加する。縄文時代早期・前期の遺跡は旧石器時代の遺跡と重なる例が多い。三日市遺跡では早期の楕円押型文が施文された高山寺式土器が、高向



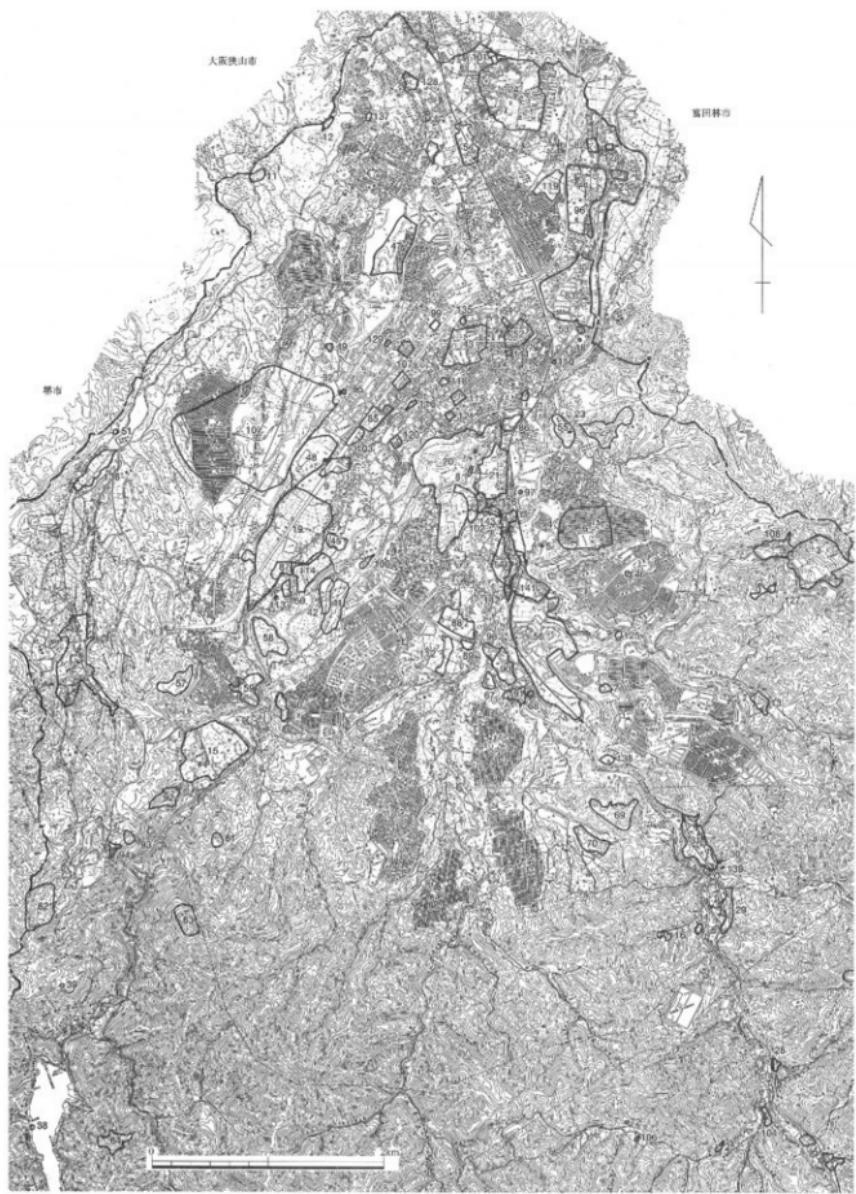
第1図 遺跡位置図

遺跡からはC字形やD字型の爪形文が施文された前期の北白川下層式土器が出土している。また、三日市遺跡からみて天見川の対岸に位置する、小塙遺跡では楕円押型文が施文された早期の土器が出土しており、市内北部に位置する塩谷遺跡では縄文時代早期の石器が出土している。縄文時代中期の遺跡では先述の三日市遺跡や石川流域に位置する宮山遺跡があり、北白川C式土器が出土している。遺構の検出例としては、三日市遺跡では2基の土坑が、宮山遺跡で竪穴住居跡が検出されている。縄文時代後期・晩期には三日市遺跡で中津式土器、滋賀里Ⅲ式土器、船橋式土器が出土しており、石川流域の向野遺跡、喜多町遺跡でも後期とみられる縄文土器が出土している。この他にも、菱子尻遺跡で縄文時代の石器が出土しており、寺ヶ池遺跡では縄文時代の石器が表採されている。

弥生時代は、拠点集落と呼ばれる大規模な環濠集落を中心に土地開発が進む時代であるが、本市ではまだこのような拠点集落は発見されていない。市内の弥生時代の遺跡は三日市遺跡で竪穴住居2棟をはじめとする遺構、遺物を検出しており、市内北部では石川流域の低・中位段丘上に錦町北遺跡、栄町遺跡、汐の宮町南遺跡、市町東遺跡、市町西遺跡、塩谷遺跡が立地している。これらの遺跡では、いずれも弥生時代中期の土器が出土しているが、長期間にわたって存続した形跡はない。短期間に廃絶する中小規模の集落であると考えられる。弥生時代後期は西日本を中心に高地性集落が出現するが、当該遺跡の南東約1kmに大師山遺跡が所在している。大師山遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡、溝、土坑が検出されている。また当該遺跡からも平成8年度の調査において弥生時代中期の溝が検出されている。

古墳時代前期には、全長50mの前方後円墳である大師山古墳が出現する。大師山古墳は天見川と石見川が合流する地点の東側の丘陵上に位置し、当該地域の地域首長墓と考えられる。大師山古墳は戦前と戦後の2度にわたって発掘調査が行われており、内行花文鏡1面、管玉8~9個、鍬形石1個、車輪石15~16個、石釧16~17個、紡錘車4個、刀子1口、鉄劍三口以上、埴輪が出土している。主体部は粘土壠であったと推定されている。石川流域には、大師山古墳と同時期に、ほぼ同規模の前方後円墳が複数所在しており、下流から羽曳野市御旅山古墳、富田林市真名井古墳などが見られる。なお、市内では、これに続く首長墓の系譜は見いだせない。古墳時代前期の集落遺跡としては三日市遺跡があり、竪穴住居6棟、土壙墓2基が検出されている。

古墳時代中期にはいとも市内には首長墳と考えられるような大型の古墳は確認されていない。市内で確認されている中期古墳は方形低壙丘墳であり、先述の三日市遺跡から4基の古墳が検出されている。このような状況は古市古墳群をのぞく石川流域全体にみられる現象であり、他市域においても中期の前方後円墳はほとんど例が見られず、河南町の寛弘寺古墳群などでも、初期群集墳中に小型の古墳がみられるのみである。古墳時代中期の集落は三日市遺跡で先述の古墳群に近接して、竪穴住居8棟と掘立柱建物2棟が検出されている。



第2図 河内長野市遺跡分布図(1/4000)

番号	文化財名稱	種類	時代	番号	文化財名稱	種類	時代
1	長野 神社 墓	跡	寺社	空町紅葉	古墳	跡	平安以降
2	河合 寺 墓	跡	寺社	平安紅葉	古墳	跡	平安以降
3	御心寺 遺跡	跡	寺社	平安以降	聖	跡	城館
4	大佛山古墳	古墳		吉備(南朝)	古墳	跡	中世
5	大佛山古墳	古墳		吉備(後期)	古墳	跡	中世
6	大佛山古墳	古墳		生田(後期)	古墳	跡	平安以降
7	興福寺 墓	跡	寺社	中世以前	元氣寺	道場	寺社
8	鷦鷯子形埴輪	埴輪	寺社	室町以降	井川寺	道場	中世以前
9	穴六塗	塗	古墳	古墳(後期)	上神社	道場	寺社
10	風神 布施	跡	寺社	平安~近世	向野道	跡	集落・生産
11	牛山田1号古墳	埴輪		吉備(後期)	古墳	跡	國文、平安~近世
12	牛山田2号古墳	埴輪		吉備(後期)	古墳	跡	中世
13	鹿島寺 遺跡	跡	寺社	平安以降	上草北邊	跡	集落
14	天野山全所遺跡	跡	寺社	平安以降	大日寺	道場	社寺・古墳・精舍
15	日野町高須遺跡	跡	寺社	平安~中世	白向南邊	跡	散布地
16	地藏寺 遺跡	跡	寺社	中世以前	小塙遺跡	跡	國文~奈良
17	羽瀬寺 遺跡	跡	寺社	平安紅葉	無塙遺跡	跡	古墳(後期)
18	五ノ木古墳	古墳		尾崎遺跡	跡	集落	古墳~中世
19	高向山遺跡	集落		吉備(後期)	尾崎遺跡	跡	城館?
20	鳥越尼寺 遺跡	集落		吉備(後期)	吉備(後期)	跡	中世
21	香多形古墳	古墳		吉備(後期)	吉備(後期)	跡	中世
22	鳥越子形古墳	古墳		吉備(後期)	吉備(後期)	跡	中世
23	末広堂	跡	生産	吉備(後期)	吉備(後期)	跡	中世
24	塙谷	跡	敷地	吉備(後期)	上原近世墓	墓	近世
25	流谷八幡神社	寺社		吉備(後期)	東池遺跡	跡	散布地
26	屋井音當遺跡	跡	寺社	中世以前	上田町熊野	跡	生産
27	風井音當遺跡	跡	寺社	中世以前	尾崎北邊	跡	國文
28	大見原北方遺跡	跡	寺社	中世以前	西二山山頂遺跡	跡	散布地
29	手口門古墳	古墳		近世	町開闢跡	跡	平成
30	別瀬奥跡子古墳	古墳		寺社	上田町通路	跡	中世
31	鹿木遺跡	跡	寺社	中世以前	上原中通路	跡	散布地
32	「仲良廻」古墳	古墳		吉備(後期)	小時塙遺跡	跡	中世
33	生村塙古墳	古墳		吉備(後期)	尾崎遺跡	跡	古墳~中世
34	鳴池塙古墳	古墳		吉備(後期)	尾崎遺跡	跡	中世
35	中村竹原塙古墳	古墳		吉備(後期)	尾崎遺跡	跡	中世
36	東の村綱吉堂	寺社		近世	寺元塙	跡	集落・社寺
37	西の村綱吉堂	寺社		近世	郡原古墳	跡	中世
38	清水門院跡	跡	寺社	近世	上山庚原古墳	跡	古墳
39	荒尾城跡	跡	寺社	近世	西原庚原古墳	跡	集落
40	吉の下内裏塙	塙	古墳	古墳	龜原寺	寺	古墳~中世
41	宮山古墳	古墳		古墳	龜原寺	寺	寺社
42	宮山遺跡	跡	寺社	古墳	吉の下通路	跡	集落
43	西代麻屋塙	跡	寺社	古墳	栄町通路	跡	平安~中世
44	上原町塙	跡	寺社	古墳	中野通路	跡	散布地
45	聖寺跡	跡	寺社	古墳(後期)	寺原古墳	跡	中世
46	聖山遺跡	跡	寺社	中世以前	法郎坂古墳	跡	古墳
47	カナ池塙	跡	寺社	敷地	上山庚原古墳	跡	古墳
48	上原塙	跡	寺社	近世以前	西原庚原古墳	跡	集落
49	住吉神社遺跡	跡	寺社	近世以前	寺町通路	跡	寺社
50	美向神社遺跡	跡	寺社	中世以前	寺町庚原古墳	跡	中世
51	秀が原神社遺跡	跡	寺社	中世以前	寺町庚原古墳	跡	中世
52	體所源代官所跡	跡	城館	江戸	沙の宮町通路	跡	散布地
53	足子原古墳	古墳		古墳	沙の宮町庚原古墳	跡	中世
54	愛子原古墳	古墳		古墳	神が丘云世墓	墓	近世
55	西合寺	跡	寺社	中世以前	埋	寺	寺社
56	三日市遺跡	跡	集落・古墳地	古墳	三塚城	城跡	城跡
57	日の谷城跡	跡	城館	中世	松林寺通路	跡	散布地
58	糸木遺跡	跡	寺社	中世以前	明采町庚原古墳	跡	生産
59	汐の山城跡	跡	寺社	中世以前	東高町庚原古墳	跡	街道
60	鳴山城跡	跡	城館	中世	*131 西高野原北流	街路	平安以降
61	鶴鳴山城跡	跡	城館	中世	*132 白山野御	街路	平安以降
62	御見城跡	跡	城館	中世	上原米澤跡	跡	散布地
63	深成城跡	跡	城館	中世	133 地藏寺東方遺跡	跡	寺社
64	桃原城跡	跡	城館	中世	134 本多町庚原古墳	跡	散布地
65	天神社遺跡	跡	寺社	中世以前	135 木多町庚原古墳	跡	中世
66	葛城第1.5級	跡	城館	平安以降	136 ト足町庚原古墳	跡	古墳・中世
67	加賀東神社遺跡	跡	寺社	中世以前	137 あかし町台通路	跡	近世
68	灰串城跡	跡	寺社	近世以前	138 沖縄北邊	跡	中世
69	石仏城跡	跡	城館	中世	139 香取丘古墳跡	跡	近世
70	猿一近城跡	跡	城館	中世	140 剛策第町庚原古墳	跡	國文・中世・近世
71	猿一近城跡	跡	城館	中世	141 三日市宿	宿	宿駅
72	慈城第1.6級	跡	城館	平安以降	142 三日市宿	宿	宿駅
				143 上田町宿	宿	宿駅	宿駅に伴う街並
				144			中世~近世

( ) は地図範囲外 \* は街道につき居するにプロットせず

第1表 河内長野市遺跡地名表

古墳時代後期には全国的に各地で横穴式石室を埋葬施設とする後期群集墳が出現するが、市内では三日市遺跡で検出された三日市古墳群が後期群集墳として位置づける事が可能である。また、当該遺跡から北方約800mには五ノ本古墳がかつて位置しており、双子塚古墳、法師塚古墳等の古墳伝承地がある。これらは群集の度合いが弱く後期群集墳と呼ぶには躊躇される。また、西方約500mには鳥帽子形古墳がやはり単独で存在している。当該古墳も含めて古墳が散漫に分布する状況があったのであろう。市域外では当該遺跡の北方約3.5kmに富田林市の嶽山古墳群、田中古墳群等の後期群集墳が立地している。当該時期に集落はそれまでの低位段丘上から高位段丘上にも拡大したようであり、三日市遺跡の他に、新たに小塙遺跡、加塙遺跡、尾崎遺跡、尾崎北遺跡、西浦遺跡が市内南部の加賀田川の中位・高位段丘上に出現する。また、当該遺跡の南方約0.5kmには喜多町遺跡があり、古墳時代後期の堅穴住居跡が検出されている。

古代には、小塙遺跡、尾崎遺跡、三日市遺跡、喜多町遺跡など、古墳時代後期に出現した集落が古代においても断続的に営まれる他、新たに、石川流域で高向遺跡、野間里遺跡などが成立する。向野遺跡では集落が出現している。また、このような集落遺跡の他に小山田丘陵では火葬墓が検出されており、小山田丘陵の長池窓跡群、石川流域河岸段丘上の日野觀音寺遺跡、石見川流域の寺元遺跡では炭焼窯が検出されている。

中世には、市内の遺跡は急増し、市内の大部分の遺跡で何らかの中世の遺構、遺物の検出をみている。これは高野街道の発展と金剛寺や觀心寺の中興が大きく影響していると思われる。また、高野街道沿の集落遺跡や寺院では、貿易陶磁が集中的に出土している。

集落遺跡では、三日市遺跡、高向遺跡、尾崎遺跡、上原北遺跡、向野遺跡、野作遺跡、市町西遺跡の調査で比較的広い面積からまとまった量の遺構が検出されている。この内、三日市遺跡では当時の集落城と墓域が検出されており、同様の状況は当該遺跡でも見ることができる。また、向野遺跡、野作遺跡、上原北遺跡では、集落遺跡に生業活動の一部を示す遺構、遺物がともなって検出されている。向野遺跡や野作遺跡ではフイゴの羽口、鉄滓、鋳型の破片が検出されており、鋳物・鍛冶関係の工房跡と見られている。また、上原北遺跡では、炭焼窯群と建物跡が近接した場所から検出されている。

城館では鳥帽子形城跡が発掘調査されている。主郭に相当すると考えられる郭から瓦葺建物跡が検出されており、土質質皿、瀬戸美濃の天目茶碗、瓦が出土している。

寺院関連の遺跡では、天野山金剛寺遺跡、觀心寺遺跡、岩瀬旧薬師寺跡の発掘調査でまとまった成果があげられている。觀心寺遺跡は石見川流域に位置する。現在までに窯、谷状地形、石垣、杭列等を検出しており、谷状地形からは、平安時代～鎌倉時代にかけての遺物が出土している。また、觀心寺遺跡に隣接する寺元遺跡では当該時期の建物跡や石組み遺構が多く検出されており、塔頭や寺領である寺元の村落の一部と考えられる遺構群を検出している。市内南部の天野山金剛寺遺跡では、これまでに調査の機会が多く、建物跡、中世墓群、井戸、土釜埋納遺構等が検出されており、主に13世紀以降の遺物が出土してい

る。出土遺物には、土師質土器、瓦器、瓦質土器などの日常雑器に加えて備前焼、常滑焼、瀬戸美濃焼等の遠隔地で生産された国産陶磁や国外で生産された貿易陶磁を含んでおり、中世の活発な流通活動を窺い知ることがでいる。市内南部の天見川上流域に位置する千早口駅南遺跡からは石組、建物跡、溝、土坑等が検出されている。一般集落からは出土例の乏しい、仏具や貿易陶磁、大量の中世瓦が出土している。出土した軒丸瓦には巴文軒丸瓦に加えて複弁蓮華文軒丸瓦が含まれていた。このようなことから、千早口駅南遺跡は岩瀬旧薬師寺の遺構と判断されている。

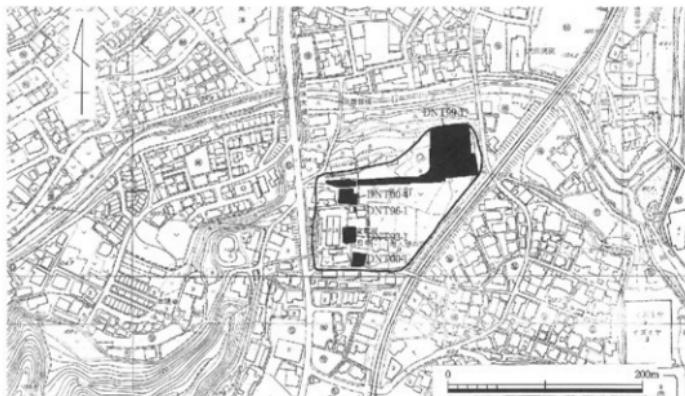
### 第3節 既往の調査

大日寺遺跡は、市教委が行った分布調査でその所在が明らかになった。この後、平成5年度・8年度に発掘調査が行われ、当該発掘調査終了後も平成12年8月と同年9月に発掘調査が行われている。

平成5年度(DNT93-1)の調査地は、遺跡の南部に位置する。関西電力の変電所の建設に伴って、240m<sup>2</sup>を発掘調査した。遺構面はGL-0.4mで検出でき、弥生時代の遺物に加えて、中世の遺構、遺物を検出した。

平成8年度(DNT96-1)の調査地は当該遺跡の南西部に位置する。個人住宅の建設に伴い、14m<sup>2</sup>を発掘調査した。遺構面はGL-0.4mで検出し、弥生時代中期から後期にかけての遺構、遺物を検出した。

平成12年8月(DNT00-4)の調査地は当該調査地の南に位置する。約350m<sup>2</sup>を発掘調査した。遺構面はGL-0.6mで検出し、弥生時代の溝、中世の柱穴・土坑等を検出した。弥生土器、



第3図 調査区位置図(1/2500)

土師質土器、瓦質土器、備前焼等が出土した。

平成12年9月(DNT00-1)の調査地は平成5年度の調査地の南に隣接する。集会所の建設に伴うもので、約150mを発掘調査した。遺構面はGL-0.6mで検出でき、中世の道路状遺構、溝、土坑、柱穴、建物基壇を検出した。古代の埠、中世の土師質土器、瓦器、瓦質土器、多量の瓦が出土した。

このように大日寺遺跡では弥生時代から近世にいたる各遺構、遺物を検出している。

#### 第4節 調査方法

発掘調査地はポンプ場本体が築造される箇所と国道からポンプ場本体に接続する進入路に分かれており、ポンプ場本体施行部分から発掘調査を開始した。

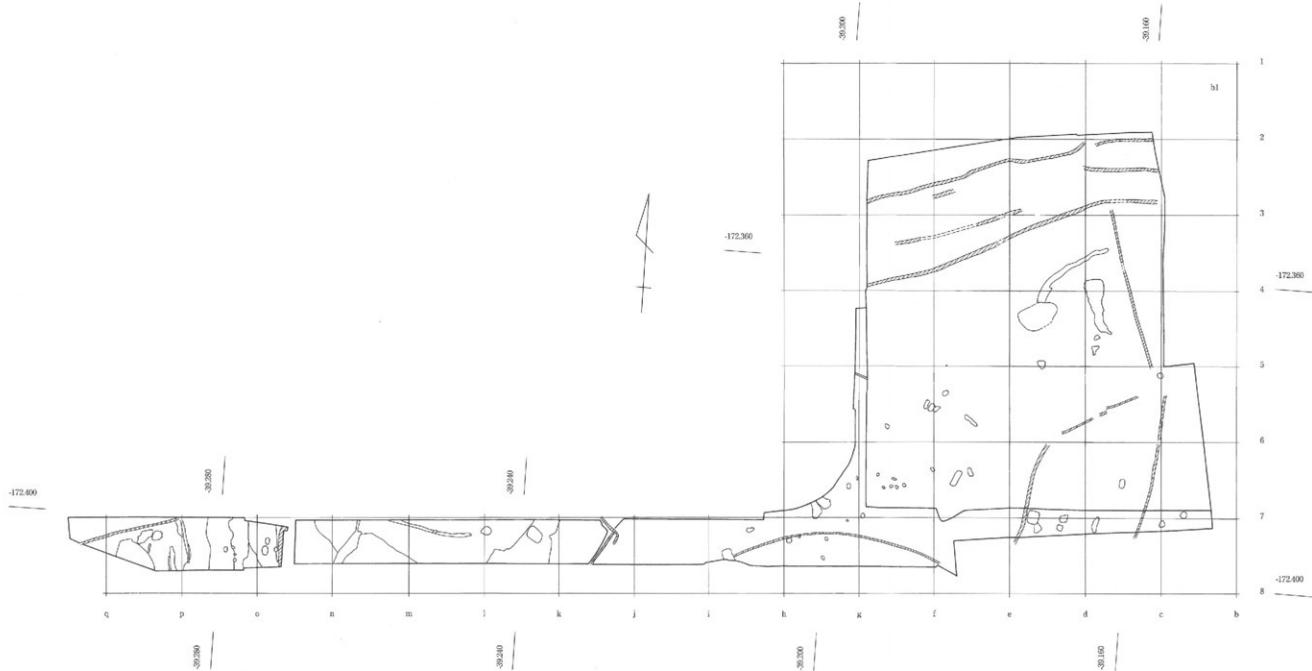
掘削は、確認調査の結果を受けて、GL-0.2までの表土を機械掘削し、GL-0.4までの床土及び上層遺構面に対応する遺物包含層を人力掘削した。この後、上層の遺構面を検出し、遺構掘削を行った後、GL-0.6までの下層遺構面に対応する遺物包含層を人力掘削し、下層の遺構面を検出した。

区割りは、遺跡全体を覆うように、進入路に平行するラインとこれに直行するラインを設け、前者に東から西へ5mおきにa～hラインを設け、同様に後者に北から南へ1～7ラインを設定した。各ラインが交わる点に杭を設置し、杭には交わった両ラインの名称を付け a1、a2・・・a7と呼称した。また、各杭によって区画される5m四方を1つの区とし、右上に位置する杭名を区名として用いた。(第4図)

遺物は、各区ごとに取りあげた。土層は7ライン及び地形に沿って設定した東西と南北の土層観察用の畦で観察し、図面、写真等の記録を行った。

遺構は、小型のものは半裁して上層の観察、記録を行い、大型のものは十字の土層観察用の畦を残して掘削し、土層の観察、記録を行った。遺物は図化の後、取り上げた。古墳の調査では、石室の主軸と中軸を設け、このラインで土層の観察、記録を行った。遺物は、床面に伴うものは出土状況を図化し番号を付けて取りあげたが、流入土もしくは攪乱坑に伴うものは、羨道と玄室に分けてとり上げ、玄室は主軸と中軸で区画される4区画ごとに取り上げを行った。

図面は、遺構面全体を4回に分けて、航空測量を行い。遺構平面図、遺物出土状況図に関する記述は、1/10で図化を行った。土層断面図は1/20で図化した。



第4図 調査区杭割図(1/500)

## 第2章 調査の成果

### 第1節 基本層序

基本層序を上層から述べると次のようになる。地表面からGL-0.2mまでは灰褐色系のシルト層で、耕土である。GL-0.2m~-0.3mまでは橙色系粘土層でこの耕土に対応する床土である。床土からは肥前系磁器が出土している。GL-0.3m~-0.4mまでは黄灰色系のシルト層で、旧耕土と考えている。GL-0.4m~-0.45mまでは黄褐色系の粘土で、旧耕土に対応する床土である。この層からは14世紀後半から17世紀にかけての遺物が主に含まれており、それ以前の遺物も若干含まれていた。これらは、この時期の擾拌により、本来、下層に包含されていた遺物が混入したものと考えられる。GL-0.45m~-0.6mまでは黒褐色系のシルト層である。この層には、弥生時代から13世紀にいたる遺物が含まれていた。地山は、黄色粘土層とレキ混じり砂層の互層となっていた。遺構は黒褐色系シルト層上面(上層遺構面)及び地山面(下層遺構面)で検出したが、灰褐色系シルト層上面及び黄灰色系シルト層上面は耕作地であることから生活面としては4面存在することになる。調査では黒褐色系シルト層上面及び地山面を対象とし、これらの遺構の上層にある2面の耕作地に関しては、これにともなう石垣のみを調査の対象とした。(第8・9図)

### 第2節 上層遺構面

#### 1 概要

上層遺構面では、14世紀後半から17世紀にいたる遺構、遺物を検出した。検出した遺構は、中世の遺構として、樋、溝、土坑、柱穴、土釜埋納遺構があり、近世の遺構として石垣がある。遺構、遺物は調査区の南西部で密に検出されている。

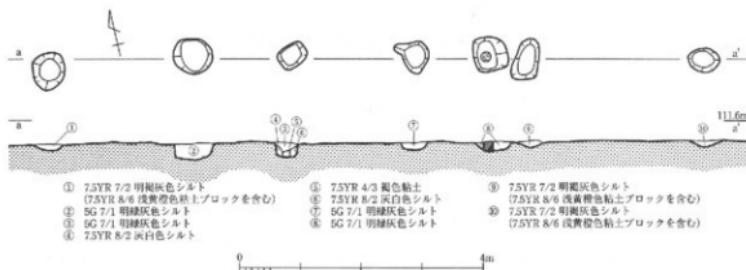
#### 2 標

##### 【S A 1】(第5図)

S A 1はf 7~g 7区に位置する。規模は長さ11mにわたり検出し、7個の柱穴により構成されている。柱穴の規模は直径0.4~0.7m、深さ0.08~0.24mであった。

遺物は土師器壺、土師質皿、瓦器塊が出土したが、小片のため図化できなかった。

S A 1は時期を決定する遺物に乏しいが、14~15世紀代のものと考えられる。



第5図 SA 1 遺構実測図(1/80)

## 2 溝

### [SD 1] (第7図)

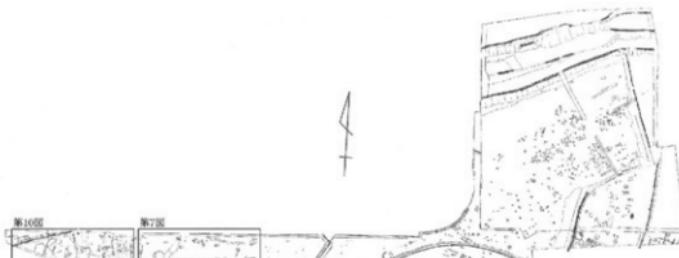
SD 1は17区に位置する。規模は幅0.6m、深さ0.11m、長さ6mにわたり検出した。埋土は2層で構成されており、下層から10YR6/6明黄褐色粗砂まじり細砂、7.5YR6/4にぶい橙色粗砂まじり細砂であった。

遺物は上師質皿、瓦質皿、須恵質練鉢が出土したが、図化できなかった。

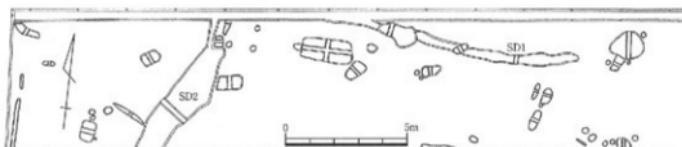
時期を決定する遺物に乏しいが、SD 1は15世紀代のものと考えられる。

### [SD 2] (第7図、図版6)

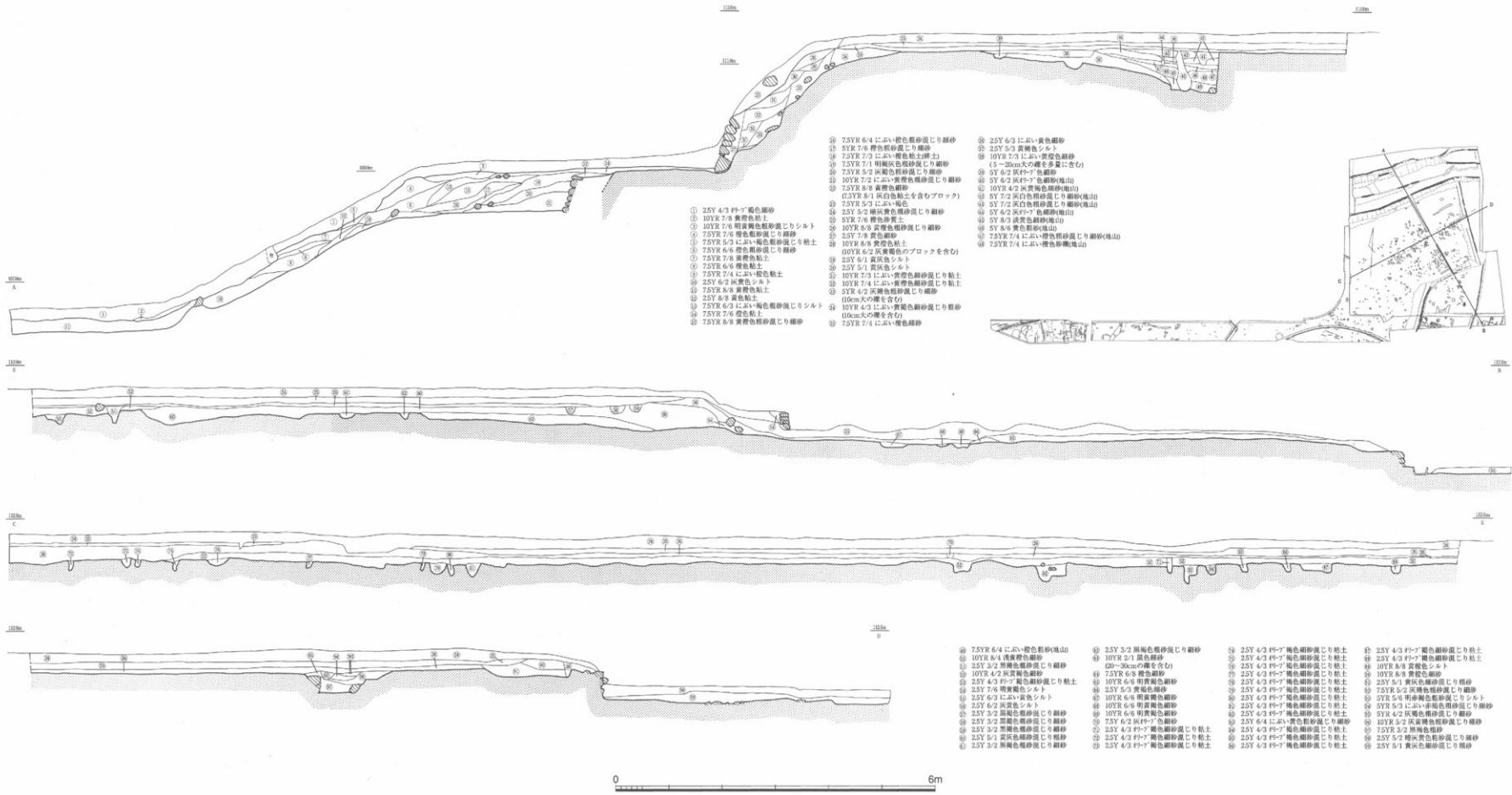
SD 2はm7区に位置し、SD 1の南西で検出した。規模は北部で幅が0.4m程度にまで縮小するが、最大幅1.68m、深さ0.13m、長さ6.08mにわたり検出した。埋土は3層で構



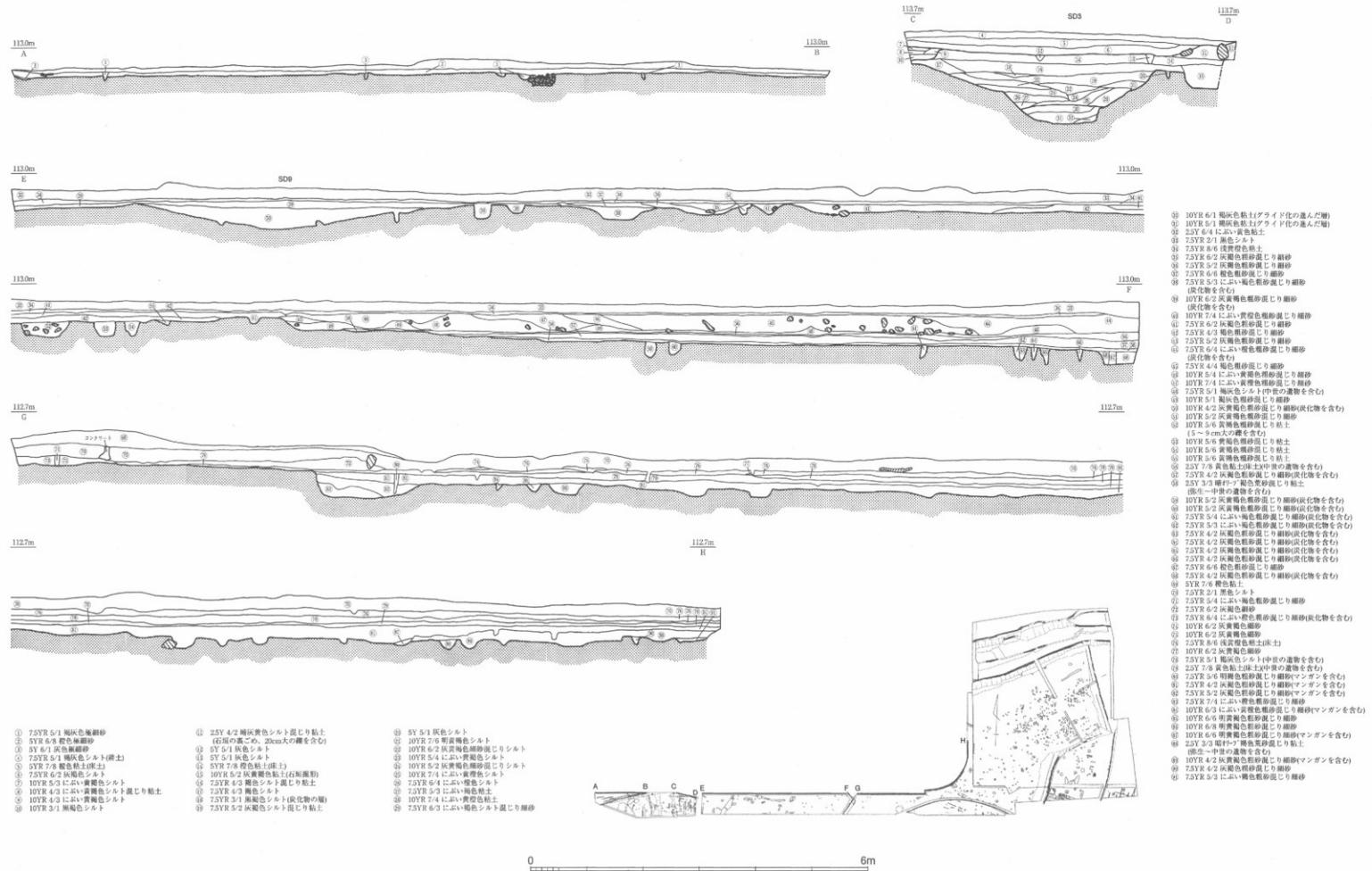
第6図 上層遺構面調査区全体図及び溝遺構配置図(約1/1000)



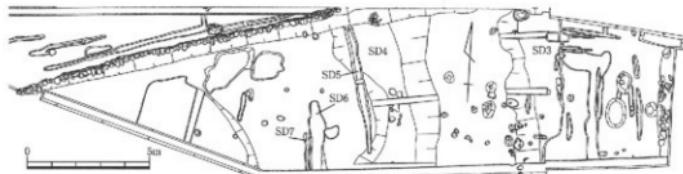
第7図 SD 1・2 遺構配置図(1/200)



第8図 調査区土層断面実測図① (1/60)



### 第9図 調査区土層断面実測図② (1 / 60)



第10図 SD 3～7造構配置図(1/200)

成されており、レンズ状の堆積が見られた。下層から7.5YR4/2灰褐色粗砂まじり粘土、10YR6/6明黄褐色粗砂まじり粘土、10YR6/4にぶい黄褐色粗砂まじり粘土であった。各層にはマンガンが多く含まれていた。

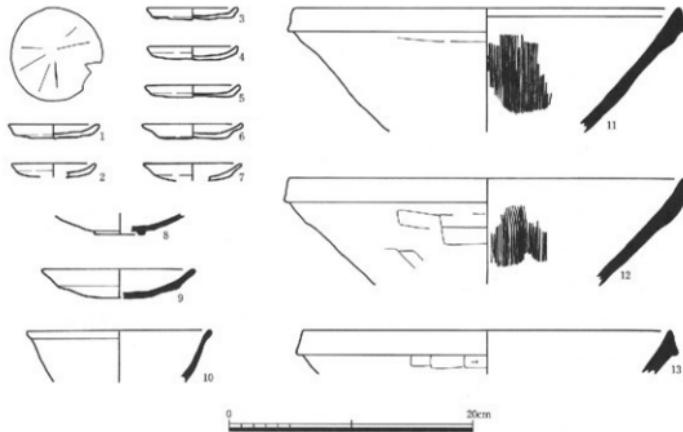
遺物は出土しなかった。

〔SD 3〕(第10・11図、図版6・7・30)

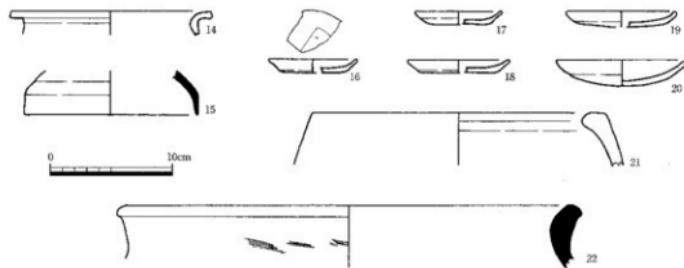
SD 3 は o 7 区に位置する。規模は幅1.68m、深さ0.13m、長さ 6.08m にわたり検出した。埋土は 3 層で構成されており、レンズ状の堆積が見られた。下層から7.5YR4/2灰褐色粗砂まじり粘土、10YR6/6明黄褐色粗砂まじり粘土、10YR6/4にぶい黄褐色粗砂まじり粘土であった。各層にはマンガンが多く含まれていた。

遺物は土師質皿(1～7)、瓦器塊(8)、瓦質皿(9)・擂鉢(11～13)、青磁碗(10)が出土した。瓦器塊は他の遺物に比べて摩滅が著しく、また小片であったことから、混入したものと考えられる。

土師質皿(1～7)は遺存状況が良いもので、口径7.2～7.5cm、器高1～1.1cmであった。平底に短く外反する口縁部を有し、口縁部には強いヨコナデを施している。底部外面にユ



第11図 SD 3 出土遺物実測図



第12図 SD 4出土遺物実測図

ビオサエの跡を顕著に残しており、(2～7)の内面には不定方向のナデが認められる。<sup>注1</sup>

瓦器塊(8)は底部の破片であり、高台径4.5cmである。

瓦質皿(9)は口径が12cm、器高2.4cmに復元できた。丸底に外反する口縁部を有する。尾谷分類の2類もしくは3類に相当する。<sup>注2</sup>

瓦質捕鉢(11～13)は口径30～32.3cmに復元できた。口縁端部を上下方向に拡張させており、体部外面には横位のヘラケズリが口縁端部直下まで及んでいる。鋤柄分類のI-1群に相当する。<sup>注3</sup>

青磁碗(10)は口径約15cmに復元できた。貿易陶磁であり、口縁部は端反している。

SD 3は14世紀後半から15世紀初頭のものと考えられる。

#### [SD 4] (第10・12図、図版7・30)

SD 4はo 7区に位置する。規模は幅2.84m、深さ0.27m、長さ6mにわたり検出した。埋土は1層で構成されており、2.5Y6/2灰黄色粗砂まじり細砂であった。埋土には炭化物が含まれていた。

遺物は弥生土器壺・甕(14)、須恵器壺蓋(15)・壺、土師質皿(16～20)・火鉢(21)、瓦質捕鉢・甕(22)、備前甕が出土した。弥生土器、須恵器は小片であり、また摩耗が進んでいることから、混入したものと考えられる。

須恵器壺蓋(15)は口径約15cmに復元できた。田辺編年のT K 43型式に相当する。<sup>注4</sup>

土師質皿は口径約7cmの平底のもの(16～18)と、口径約7.5cmの丸底のもの(19～20)が見られた。いずれも、口縁部に強いヨコナデを施し、内面に不定方向のナデが認められる。底部外面にユビオサエの跡を顕著に残している。

土師質火鉢(21)は口径24cmに復元できた。

瓦質甕(22)は口径38cmに復元できた。頸部がなくなり、口縁端部が若干外折する形態のものである。鋤柄分類のII-3群に相当する。<sup>注5</sup>

SD 4は15世紀中葉のものと考えられる。

#### [SD 5] (第10図、図版7)

SD 5はo 7区に位置し、SD 4の西側に接して検出した。SD 5はSD 4埋没後に掘

削されたもので、一部で S D 4 の西肩を破壊していた。規模は幅0.4m、深さ0.15m、長さ5.24mにわたり検出した。埋土は1層で構成されており、2.5Y6/2灰黄色粗砂まじり細砂であった。

遺物は土師質皿が出土したが、図化できなかった。

S D 5 は15世紀後半のものと考えられる。

#### 〔S D 6〕(第10図、図版7)

S D 6 は p 7 区に位置し、S D 6 の西で検出した。規模は幅0.72m、深さ0.06m、長さ2.82mにわたり検出した。埋土は1層で構成されており、10YR7/6明黄褐色細砂まじりシルトであった。

遺物は土師質皿が出土したが、図化できなかった。

S D 6 は15世紀代後半のものと考えられる。

#### 〔S D 7〕(第10図)

S D 7 は p 7 区に位置し、S D 6 の西で検出した。規模は幅0.24m、深さ0.02m、長さ1.54mにわたり検出した。埋土は1層で構成されており、2.5Y5/1黄灰色粗砂まじり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

### 4 井戸

#### 〔S E 1〕(第13図、図版3)

S E 1 は d 6 ~ 7 区に位置する。平面形態は方形を呈しており、規模は長辺2.0m、短辺1.48m、深さ0.59m、比較的浅い石組みの井戸である。埋土は4層で構成されており、下層から、10YR4/2灰黄褐色粘質土、10YR6/8明黄褐色細砂、10YR4/1褐灰色細砂まじりシルト、10YR6/4にぶい黄橙色シルトであった。

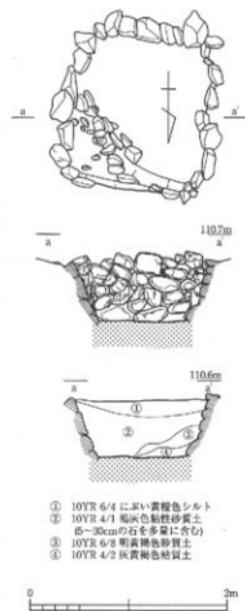
遺物は肥前系磁器、瓦の小片が出土したが、図化できなかった。

S E 1 は17世紀代のものと考えられる。

### 5 土坑

#### 〔S K 1〕

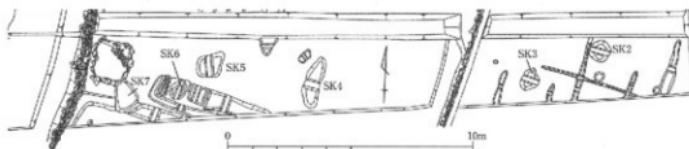
S K 1 は e 6 区に位置する。平面形態は楕円形を呈しており、規模は長径1.22m、短径0.67m、深さ0.22mであった。埋土は1層で構成されており、10YR7/2にぶい黄橙色細砂であった。



第13図 S E 1 遺構実測図(1/50)



第14図 調査区上層遺構面全体図(約1/1000)



第15図 SK 2～7 遺構配置図(1/200)

遺物は出土しなかった。

#### 〔SK 2〕(第15図、図版3)

SK 2はb 6区に位置する。平面形態は円形を呈しており、規模は直径0.86m、深さ0.11mであった。埋土は3層で構成されており、下層から、10YR6/3にぶい黄橙色細砂、7.5YR6/1褐色シルト、7.5YR6/2灰褐色粗砂まじり細砂であった。

遺物は土師質七輪、肥前系陶磁、瓦が出土したが、図化できなかった。

SK 2は17世紀代のものと考えられる。

#### 〔SK 3〕(第15図、図版3)

SK 3はb 7～c 7区に位置する。平面形態は円形を呈しており、規模は直径0.96m、深さ0.19mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、2.5YR3/1暗赤灰色細砂まじり粘土、10YR7/6明黄褐色粗砂まじり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

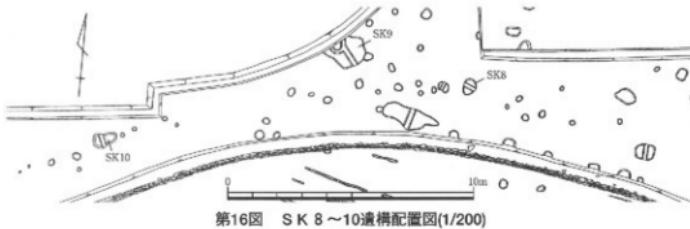
#### 〔SK 4〕(第15図、図版3)

SK 4はc 7区に位置する。平面形態は梢円形を呈しており、規模は長径2.13m、短径0.71m、深さ0.31mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR4/1灰褐色レキまじり細砂、7.5YR4/1褐色レキまじり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

#### 〔SK 5〕(第15図、図版3)

SK 5はd 6～7区に位置する。平面形態は方形を呈しており、規模は長辺1.04m、短辺0.96m、深さ0.13mであった。埋土は3層で構成されており、下層から、7.5YR4/1褐色



第16図 SK 8～10発掘配置図(1/200)

色粗砂まじり細砂、7.5YR4/6褐色粗砂まじり粘土、10YR6/4にぶい黄褐色シルトであった。  
遺物は出土しなかった。

〔SK 6〕(第15図、図版3)

SK 6はd 7区に位置する。平面形態は方形を呈しており、規模は長辺0.86m、短辺0.72m、深さ0.14mであった。埋土は4層で構成されており、下層から7.5YR4/6褐色粗砂まじり粘土、7.5YR3/1黒褐色粗砂まじり細砂、7.5YR4/1褐灰色粗砂まじり細砂、10YR6/4にぶい黄褐色シルトであった。

遺物は出土しなかった。

〔SK 7〕(第15図)

SK 7はd 7区に位置する。平面形態は歪な方形を呈しており、規模は長辺1.29m、短辺0.98m、深さ0.13mで、皿状の底面を有する。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR4/1褐灰色粗砂まじり細砂、2.5YR3/1暗赤灰色細砂まじり粘土であった。

遺物は出土しなかった。

〔SK 8〕(第16図)

SK 8はf 6区に位置する。平面形態は円形を呈しており、規模は直径0.71m、深さ0.18mであった。埋土は3層で構成されており、下層から、7.5YR7/2明褐灰色シルト、7.5YR5/3にぶい褐色シルト、7.5YR5/3にぶい褐色粗砂まじり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

〔SK 9〕(第16図)

SK 9はg 6区に位置する。平面形態は歪な円形を呈しており、規模は長径1.43m、短径1.2m、深さ0.12mであった。埋土は3層で構成されており、下層から、7.5YR5/3にぶい褐色粗砂まじり細砂、7.5YR5/2灰褐色細砂、7.5YR7/2明褐灰色シルトであった。最上層には7.5YR8/6浅黄橙色粘土のブロックが多く含まれていた。

遺物は土師器壺、土師質皿が出土したが、図化できなかった。

土師器壺は下層包含層からの混入であろう。

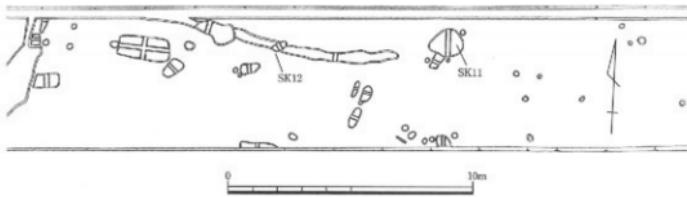
SK 9は15世紀代のものと考えられる。

〔SK 10〕(第16・17図、図版31)

SK 10はh 7区に位置する。平面形態は梢円形を呈しており、規



第17図 SK 10  
出土遺物実測図



第18図 SK11・12遺構配置図(1/200)

模は長径1.01m、短径0.63m、深さ0.25mであった。埋土は3層で構成されており、下層から7.5YR5/3にぶい褐色粗砂まじり細砂、7.5YR5/2灰褐色細砂、7.5YR7/2明褐色灰色シルトであった。

遺物は土師器甕、黒色土器A類塊、土師質皿・台付皿(23)が出土した。土師質台付皿(23)は高台の小片であり、高台径10cm、残存高2.95cmであった。遺物は摩耗が進んでいることから、下層包含層からの混入と思われる。

SK10は15世紀代のものと考えられる。

#### 〔SK11〕(第18図)

SK11はk 7～17区に位置する。平面形態は楕円形を呈しており、規模は長径1.42m、短径1.14m、深さ0.14mであった。埋土は3層で構成されており、下層から7.5YR7/4にぶい橙色粗砂まじり細砂(マンガンを含む)、10YR6/6明黄褐色粗砂まじり細砂、7.5YR6/4にぶい橙色粗砂まじり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

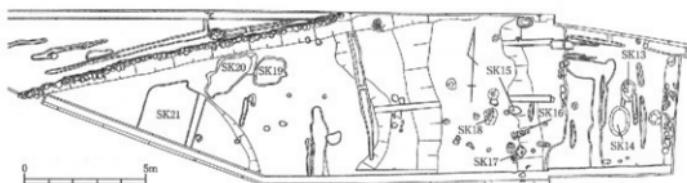
#### 〔SK12〕(第18図)

SK12はl 7区に位置する。平面形態は楕円形を呈しており、規模は長径0.66m、短径0.3m、深さ0.17mであった。埋土は3層で構成されており、下層から7.5YR6/3にぶい褐色粗砂まじり細砂、7.5YR5/4にぶい褐色粗砂まじり細砂、7.5YR5/3にぶい褐色粗砂まじり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

#### 〔SK13〕(第19～21図、図版5・8・31)

SK13はn 7区に位置する。平面形態は楕円形を呈しており、規模は長径0.89m、短径



第19図 SK13～21遺構配置図(1/200)

0.61m、深さ0.11mであった。埋土は1層で構成されており、10YR2/5灰黄褐色粘土であった。

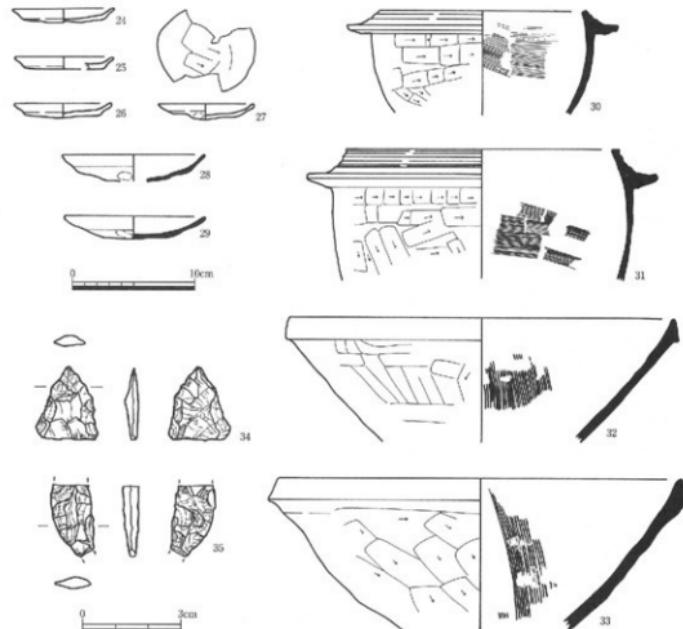
遺物は土師質皿(24)、瓦質擂鉢(32・33)が出土した。いずれも小片であり、底面上及び埋土中で検出した。

土師質皿(24)は、口径8cm、器高1.13cmである。平底に短く外反する口縁部を有し、内面にクモの巣状の板ナデが認められる。胎土は赤褐色系である。

瓦質擂鉢は(32・33)、口径31cmと33cmに復元できる。調整は口縁部直下に横筋のヘラケズリ、体部下半に継位のヘラケズリ、内面に擂目を施す。鐵柄分類の1-1群に相当する。<sup>近8</sup>

S K13は14世紀末葉のものと考えられる。

#### 〔S K14〕(第19図、図版5)



第21図 S K13・15~18・21出土遺物実測図

S K14はn 7区に位置する。平面形態は橢円形を呈しており、規模は長径1.21m、短径0.83m、深さ0.16mであった。埋土は5層で構成されており、下層から、5YR6/1褐色シルト、2.5YR4/2灰赤色シルト、5YR5/1褐色シルト、2.5YR5/4にぶい赤褐色シルト、5YR5/2灰褐色シルトであった。最下層には炭化物が多量に認められた。

遺物は土師質皿、瓦質皿が出土したが、いずれも小片のため図化できなかった。

S K14は15世紀前半のものと考えられる。

〔S K15〕(第19・21図、図版5・6・8)

S K15はo 7区に位置する。平面形態は橢円形を呈しており、規模は長径0.5m、短径0.35m、深さ0.5mであった。S K15はS D 3埋没後にS D 3の埋土を掘りこんで造られている。埋土は1層で構成されており、7.5YR4/2灰褐色粗砂まじり細砂であった。埋土には炭化物が多く含まれていた。

遺物は土師質皿(25)、瓦器塊、瓦質皿(28)が出土した。いずれも小片である。

土師質皿(25)は口径7cmに復元できる。平底で口縁部を強くなっている。

瓦質皿(28)は口径11.3cm、器高2.2cmに復元できる。器壁は薄く、口縁部にはヨコナデ、底部には、ユビオサエの跡が見られる。尾谷分類の6類に相当する。

S K15は14世紀末から15世紀前半にかけてのものと考えられる。

〔S K16〕(第19・21図、図版5・6・9・31)

S K16はo 7区に位置し、S K15の南で検出した。平面形態は歪な方形を呈しており、規模は幅0.25m、長さ0.35m、深さ0.3mであった。S K15はS D 3埋没後にS D 3の埋土と西肩を一部掘りこんで造られている。埋土は1層で構成されており、7.5YR4/2灰褐色粗砂まじり細砂であった。埋土には炭化物が多く含まれていた。

遺物は須恵器甕、土師質皿(27)、瓦質皿(29)が出土した。いずれも小片であり、底面上及び埋土中で検出した。

土師質皿(27)は口径7.7cm、器高1.3cmの小型品であり、平底を有し口縁部に強いヨコナデを加えている、全体的に歪みが大きなものである。

瓦質皿(29)は口径11cm、器高2cmに復元できる。口縁部にヨコナデを施す。底部は丸底でユビオサエの跡が認められる。尾谷分類の5類に相当する。

S K16は15世紀後半のものと考えられる。

〔S K17〕(第19・21図、図版5・6・9・31)

S K17はo 7区に位置し、S K16の南で検出した。平面形態は方形を呈しており、規模は長辺0.54m、短辺0.42m、深さ0.8mであった。S K17もS K16と同様にS D 3埋没後にS D 3の埋土と西肩を一部掘りこんで造られている。埋土は1層で構成されており、7.5YR4/2灰褐色粗砂まじり細砂であった。埋土には炭化物が多く含まれていた。

遺物は土師質皿(26)、瓦質土釜(30)が出土した。遺物はいずれも小片であり、底面上及び埋土中で検出した。

土師質皿(26)は口径7.7cm、器高1.2cmである。平底を有し、口縁部に強いヨコナデを加えている。SK 16出土遺物と接合関係が認められた。<sup>註13</sup>

瓦質土釜(30)は口縁端部、及び鍔端部が面取りされている。口縁部は内傾しており、段をなす。体部外面は鍔の直下から横方向のヘラケズリが施され、内面は横方向の丁寧なハケメを施す。鋤柄分類のⅢ群に相当する。<sup>註14</sup>

SK 17は15世紀前半のものと考えられる。

〔SK 18〕(第19・21・22図、図版5・6・31)

SK 18はo 7区に位置し、SD 3の西で検出した。

平面形態は歪な方形を呈しており、規模は長辺0.35m、短辺0.26m、深さ0.14mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR4/1褐灰色粗砂まじり細砂、7.5YR4/2灰褐色粗砂まじり細砂であった。各層には炭化物が含まれていた。

遺物は土師質皿、瓦質土釜(31)・擂鉢が出土した。

瓦質土釜(31)は口径22cmに復元できる。口縁部は内傾しており、やや凹線化した段を有する。口縁端部、及び鍔端部は面取りされており、体部外面は鍔の直下から横位のヘラケズリを施す。内面は横位のハケメが見られる。鋤柄分類のⅢ群に相当する。<sup>註15</sup>

SK 18は15世紀前半のものと考えられる。

〔SK 19〕(第19図、図版5)

SK 19はp 7区に位置する。平面形態は歪な方形を呈しており、規模は長辺1.6m、短辺1.16m、深さ0.17mであった。埋土は3層で構成されており、下層から、10YR7/6明黄褐色粗砂まじり細砂、10YR7/3にぶい黄橙色粗砂まじり細砂、7.5YR6/6橙色粗砂まじり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

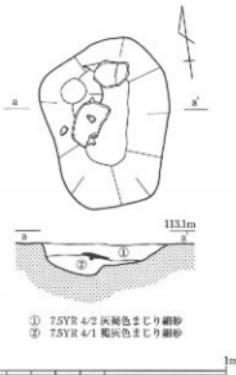
〔SK 20〕(第19図、図版5)

SK 20はp 7区に位置し、SK 19の西で検出した。平面形態は歪な梢円形を呈しており、規模は長軸2.59m、短軸1.21m、深さ0.13mであった。埋土は3層で構成されており、下層から、10YR7/4にぶい黄橙色粗砂まじり細砂、10YR7/2にぶい黄橙色レキまじり細砂、10YR7/1灰白色細砂であった。

遺物は出土しなかった。

〔SK 21〕(第19・21図、図版31)

SK 21はp 7区に位置し、SK 20の南西で検出した。平面形態は歪な梢円形を呈しており、調査区内にある北半部のみ調査を行った。規模は長軸5.6m、短軸2.34m、深さ0.19mであった。埋土は4層で構成されており、下層から、10YR7/4にぶい黄橙色粗砂まじり細



第22図 SK 18遺構実測図(1/20)

砂、10YR7/2にぶい黄橙色粗砂まじり細砂、10YR7/6明黄褐色粗砂まじり細砂、10YR7/3にぶい黄橙色粗砂まじり細砂であった。

遺物はサヌカイト製の石鎌 2 点(34・35)・剣片、弥生土器、土師質土器、瓦器塊が出土した。石鎌は周囲の包含層中に弥生土器が混入しているので、ここから混入したものであろう。(34)は平基式打製石鎌である。長さ 2 cm、幅 0.2 cm、厚さ 0.5 cm、重さ 1.6 g である。(35)は石鎌未製品と思われる。長さ 2.2 cm、幅 1.9 cm、厚さ 0.05 cm、重さ 1.3 g である。

#### [S K22]

S K22は p 7 区に位置し、S K21の南で検出した。平面形態は細長い楕円形を呈しており、規模は長軸 1.1 m、短軸 0.2 m、深さ 0.04 m であった。埋土は 2 層で構成されており、下層から、10YR6/1褐灰色細砂、10YR7/6明黄色褐細砂(ブロックを含む)であった。

遺物は出土しなかった。

#### 6 土釜埋納遺構

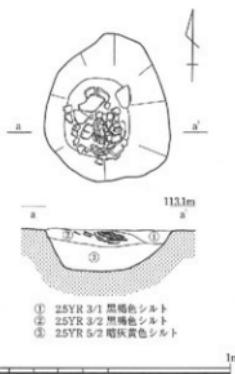
##### [S O 1] (第23・24図、図版 9・31・32)

S O 1 は n 7 区に位置し、SW13の西で検出した。平面形態は円形を呈しており、直径 0.6 m、深さ 0.15 m であった。埋土は 3 層で構成されており、下層から、③2.5Y R5/2黒灰黄色シルト、②2.5Y R3/1黒褐色シルト、①2.5Y R3/1黒褐色シルトであった。

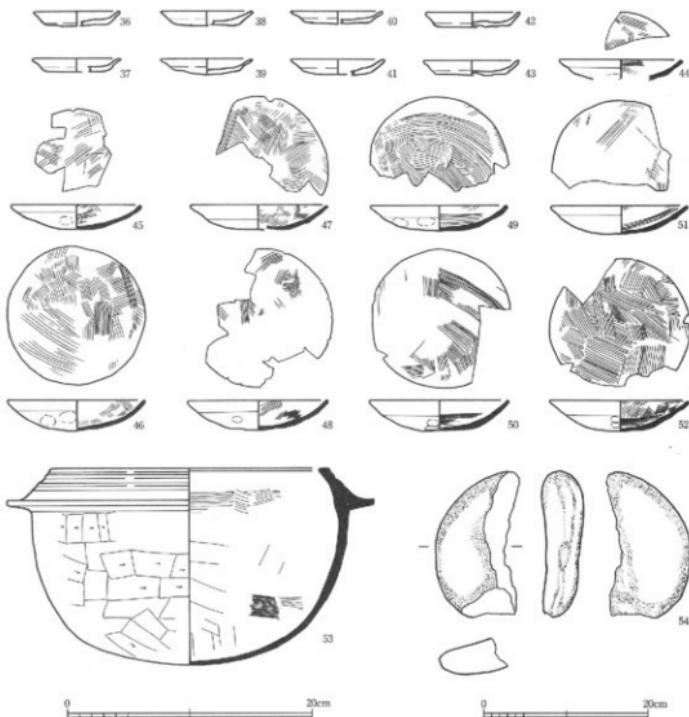
遺物は土師質皿(36~43)、瓦質皿(44~52)・土釜(53)、平滑な碟(長さ 17.6 cm、幅 9 cm、厚さ 4.7 cm)(54)が出土した。瓦質土釜は小片となった状況で、主に②から出土しており、最下層からはほとんど出土していない。瓦質土釜の上半部は多くが欠損しており、残存部のほとんどは体部下半の破片であった。破片の出土状況において、各部位のあり方に整合性がないことから、破損した土師質皿と瓦質皿・土釜が一括して廃棄されたものと考えることができる。

土師質皿(36~43)は 8 点出土した。遺存状況が良好なものは口径 7.1 cm ~ 7.6 cm、器高 1.05 cm ~ 1.3 cm であり、法量的なまとまりが見られる。平底に短く外反する口縁部を有し、口縁部には強いヨコナデを施し、底部にユビオサエのあとを顕著に残している。内面には不定方向のナデが認められる。

瓦質皿(44~52)は 9 点出土した。遺存状況が良好なものは口径 11.0 cm ~ 11.3 cm、器高 2.1 ~ 2.5 cm であり、法量的なまとまりが見られる。丸底にやや外反する口縁部を有し、口縁部外面はヨコナデされており、底部はナデによって消されて不鮮明になっているが、ユビオサエの痕跡が認められる。内面には不定方向



第23図 S O 1 遺構実測図(1/20)



第24図 S O 1出土遺物実測図

のハケメが認められる。これらの瓦質皿は尾谷分類の3類に相当する。<sup>217</sup>

瓦質土釜(53)は、口径22.2cm、器高16cmを測る。口縁部は内傾していおり、明確な段が認められる。口縁部及び鈴の端部は面取りされている。調整は、口縁部にヨコナデ、鈴の直下から底部にかけて横方向の削りが認められ、内面はハケメが認められる。鋤柄分類でⅢ群に相当する。<sup>218</sup>

出土遺物の組成は、市内で多く検出されている土釜埋納遺構と一致するものの、その出土状況は異なり、通常の土坑である可能性を残すが、土釜埋納遺構として報告した。

S O 1は15世紀前半のものと見られる。

## 7 柱穴

[P 1]

P 1はc 6～f 6区に位置する。平面形態は楕円形を呈しており、規模は長軸0.65m、短軸0.39m、深さ0.12mであった。柱痕の痕跡が残っており、埋土は掘形埋土が10YR7/2

にぶい黄褐色細砂、柱穴部分が10YR7/2にぶい黄褐色細砂であった。

遺物は出土しなかった。

## 8 墓

### 〔S R 1〕(第25・26図、図版13)

S R 1はc 6区に位置する。平面形態は楕円形を呈しており、規模は幅0.64m、長さ0.86m、深さ0.25mであった。主軸方向はN-8°-Wを示す。築造に際してまず、幅約0.6~0.7m、長さ1mの掘溝を穿ち、ここに置土を入れ、床面に石を敷き、壁面に粘土を貼って埋葬空間を構築していた。床面にみとめられた石敷きは比較的扁平な円レキが8個使用されていた。S R 1の肩部は一部被熱しており、出土した遺物にも2次焼成を受けたもの認められた。埋土は3層みとめられ、下層から、③2.5YR5/6黄褐色シルト層、②2.5YR3/1暗赤灰色細砂、①5YR5/2灰褐色細砂であった。各層には焼土のブロックと骨粉が混じっており、特に①においてそれが顕著に認められた。置き土は④7.5YR5/3にぶい褐色シルトであり、壁面に貼られた粘土には⑤7.5YR4/1灰褐色粘土が用いられており、表面は部分的に被熱している箇所が認められた。

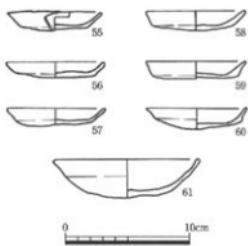
遺物は上師質皿、瓦器塊が出土した。

土師質皿は7点図化できた。(58~60)が

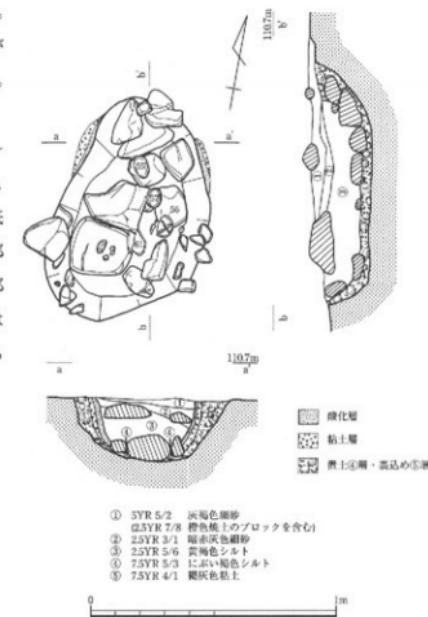
埋土中で、他が石敷き直上で出土した。

瓦器塊は小片で、混入と考えられる。

土師質皿は大型品(61)、と小型品(55~60)がみられ、大型品(61)は口径11.5cm、器高3.2cmを測る。形状は深くて丸い底を持ち、口縁部は外反している。口縁部外面及び内面にナデを施し、特に口縁部には強いヨコナデを行っている。底部はユビオサウの跡が観察でき、この上から



第25図 S R 1 出土遺物実測図



第26図 S R 1 遺構実測図(1/20)

ナデ調整を行っている。小型品(55~60)は6点出土しており、口径7.4~8cm、器高1.3~1.65cmを測る。底は浅いが、比較的丸く、短く外反する口縁部を有している。小型品の内(55·56)は2次焼成を受けており、とくに(56)は2次焼成のため変形が著しい。<sup>図19</sup>

S R 1は15世紀前半のものと考えられる。第3章第3節で後述する考古地磁気年代推定法による調査結果から、13世紀前半~14世紀中頃の年代が考えられており、土器編年が示す年代と齟齬が生じる。

## 9 石垣

〔SW 1~5〕(第28·29図、図版11~13)

SW 1~SW 5はc 2~f 3にかけての調査区北半部で検出している。遺跡が立地している尾根の北斜面に4段にわたって築かれている。検出した石垣は各段が、同時に機能していたものではなく、少なくとも、3回にわたる造成が行われたことが土層の観察から明らかとなっている。土層の観察所見から事実関係を整理すると、SW 2はSW 3の築造によって埋められており、SW 1に伴う耕作地の床土はSW 2の裏込め土の上に積まれている。SW 3はSW 4の裏込めの土の上に築造されている。SW 4の掘形はSW 2を埋め戻した造成土を切り込んで造られている。このような事からSW 1、SW 2がまず築かれ、その後SW 4、SW 3が築かれていることがわかった。

〈SW 1〉 残存高2.2m、長さ40.28mにわたり検出した。基底部には50cm程度の比較的大型の石材が用いられており、上部ほど小型の石材が使用されていた。部分的に再構築された状況があり、再構築部分では立面形が長方形を呈する石材を斜めに積んでいる状況が認められた。

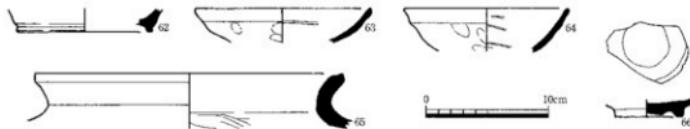
〈SW 2〉 残存高0.8m、長さ7.85mにわたり検出した。SW 2は完全に埋め戻されており、石材が遺存していた範囲は0.8mであったが裏込め土は約40mにわたり検出でき、石材が抜き取られた痕跡も観察できた。石材は基底部から小型の石材が多く用いられており、細長い石材を斜めに積む技法は認められなかった。

〈SW 3〉 残存高1.2m、長さ3.3mにわたり検出した。裏込め土を検出した長さは38mであったが、石材が遺存していた範囲は2箇所で、わずかであった。基底部に大型の石材が使われており、SW 1とよく似た積み方をしている。

〈SW 4〉 残存高0.9m、長さ39.06mにわたり検出しが、石積みは途中で崩落している箇所があった。石垣下部には0.5m程度の比較的大型の石材が認められたが、上半部は比較的小型の石材が小口積みされていた。

〈SW 5〉 残存高0.72m、長さ7.85mにわたり検出した。小型の石材が多く使用されており、長方形の立面形を呈する石材が斜めに積まっていた。

これらの石垣の機能については、石垣によって構築された平坦面に床土と見られる土が貼られており、この上に耕作土と見られる土が存在していた。これらのことから耕作地を



第27図 SW 8 · 9出土遺物実測図

確保するために築かれた石垣であるといえる。

遺物は耕作土もしくは床土から、近世の肥前系陶磁が出土した。また、SW 1～5の裏込め土から、近世の遺物に加えて、土師質皿、瓦器壇、龍泉窯系の蓮弁文碗等が出土したが、これらは石垣構築の際の切り土によって掘削された遺物包含層や遺構に含まれていた遺物が混入したものと考えられる。

SW 1～5は近世に築造されたと考えられる。

#### 〔SW 6〕(第30図)

SW 6はb 5、c 5～7区に位置する。残存高0.5m、長さ22.5mにわたり検出し、さらに調査区外へと続いている。石積みは5～6段遺存していた。

裏込め土から遺物は出土しなかった。

SW 6は近世に築造されたものと考えられる。

#### 〔SW 7〕(第30図)

SW 7はc 5、d 5区に位置する。残存高約0.5m、長さ13.9mにわたり検出し、さらに調査区外へと続いている。石積みは3段遺存していた。

裏込め土から遺物は出土しなかった。

SW 7は近世に築造されたものと考えられる。

#### 〔SW 8〕(第27・30図、図版32)

SW 8はd 5、6区に位置する。残存高1.15m、長さ13.24mにわたり検出し、さらに調査区外へと続いている。石積みは8～11段遺存していた。使用されている石材には約50cmの比較的大型の石材も使用されていた。

裏込め土から土師器壺、須恵器壺身(62)・壺、土師質皿、瓦器壇、須恵質土器が出土したが、掘形掘削時の混入と考えられる。

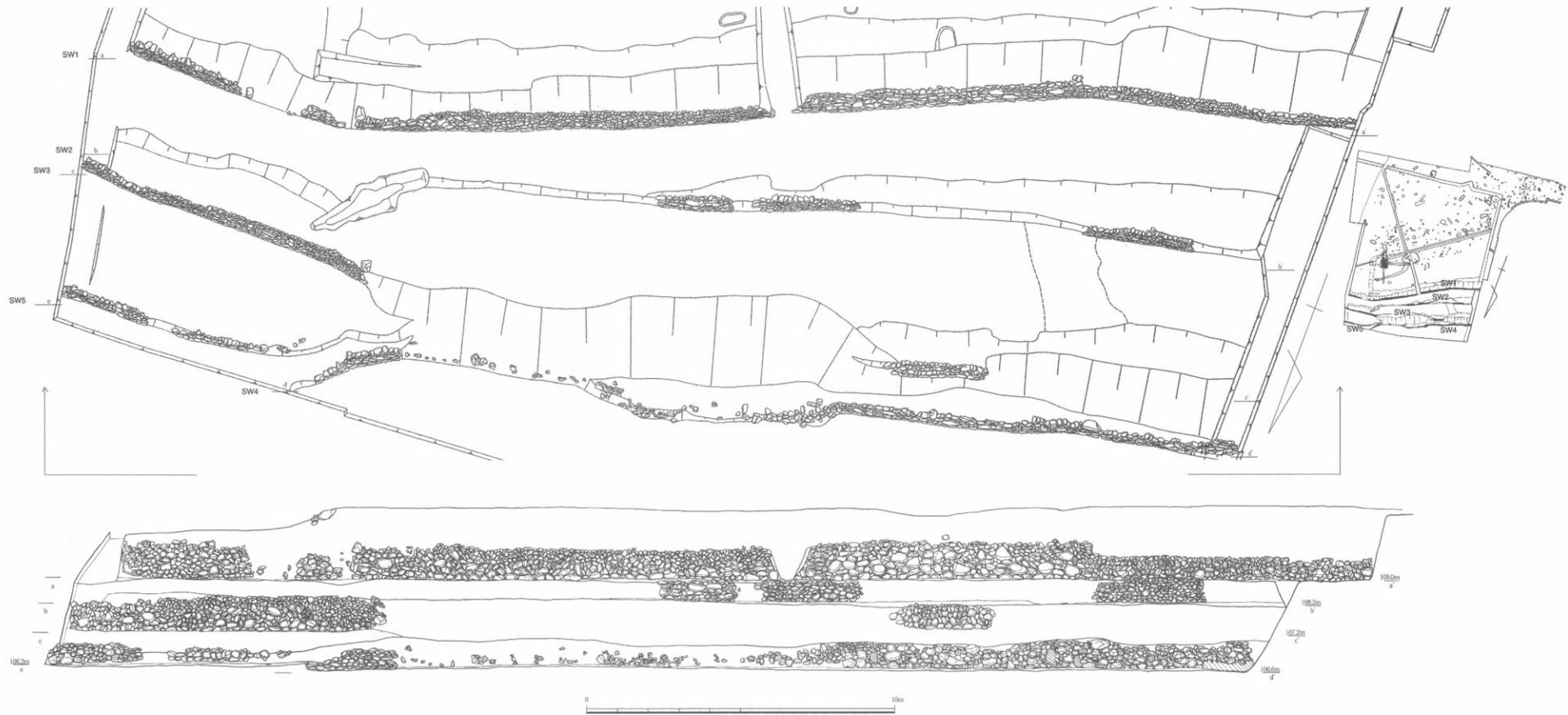
SW 8は近世に築造されたものと考えられる。

#### 〔SW 9〕(第27・30図、図版32)

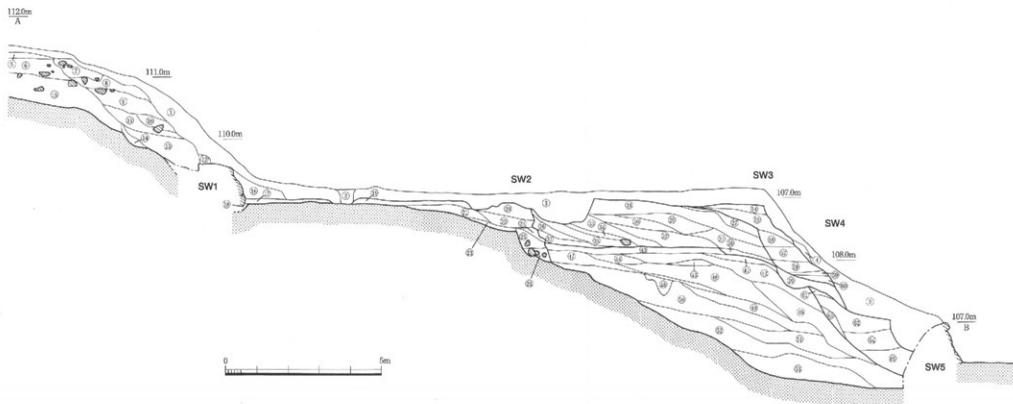
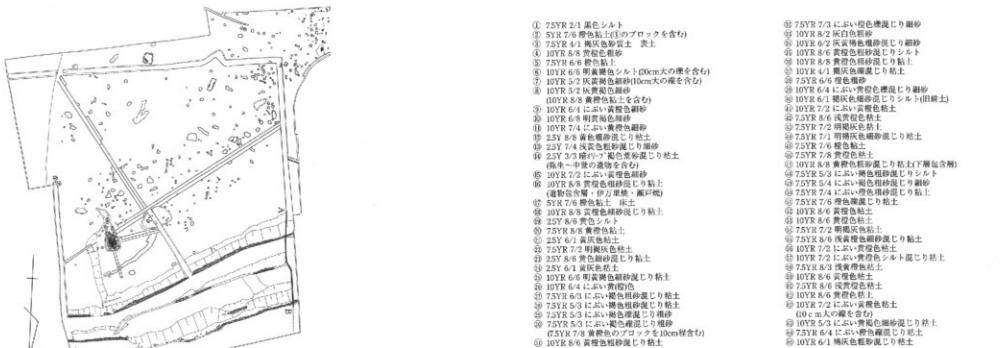
SW 9はb 5、c 5、6区に位置する。残存高0.63m、長さ19.3mにわたり検出し、さらに調査区外へと続いている。石積みは3段遺存していた。石材は比較的小型のものが多く使用されていた。

裏込め土からは、土師質皿、瓦器壇(63・64)、東播系須恵質壺(65)、陶磁器(66)が出土したが、これらは掘形掘削時の混入と考えられる。

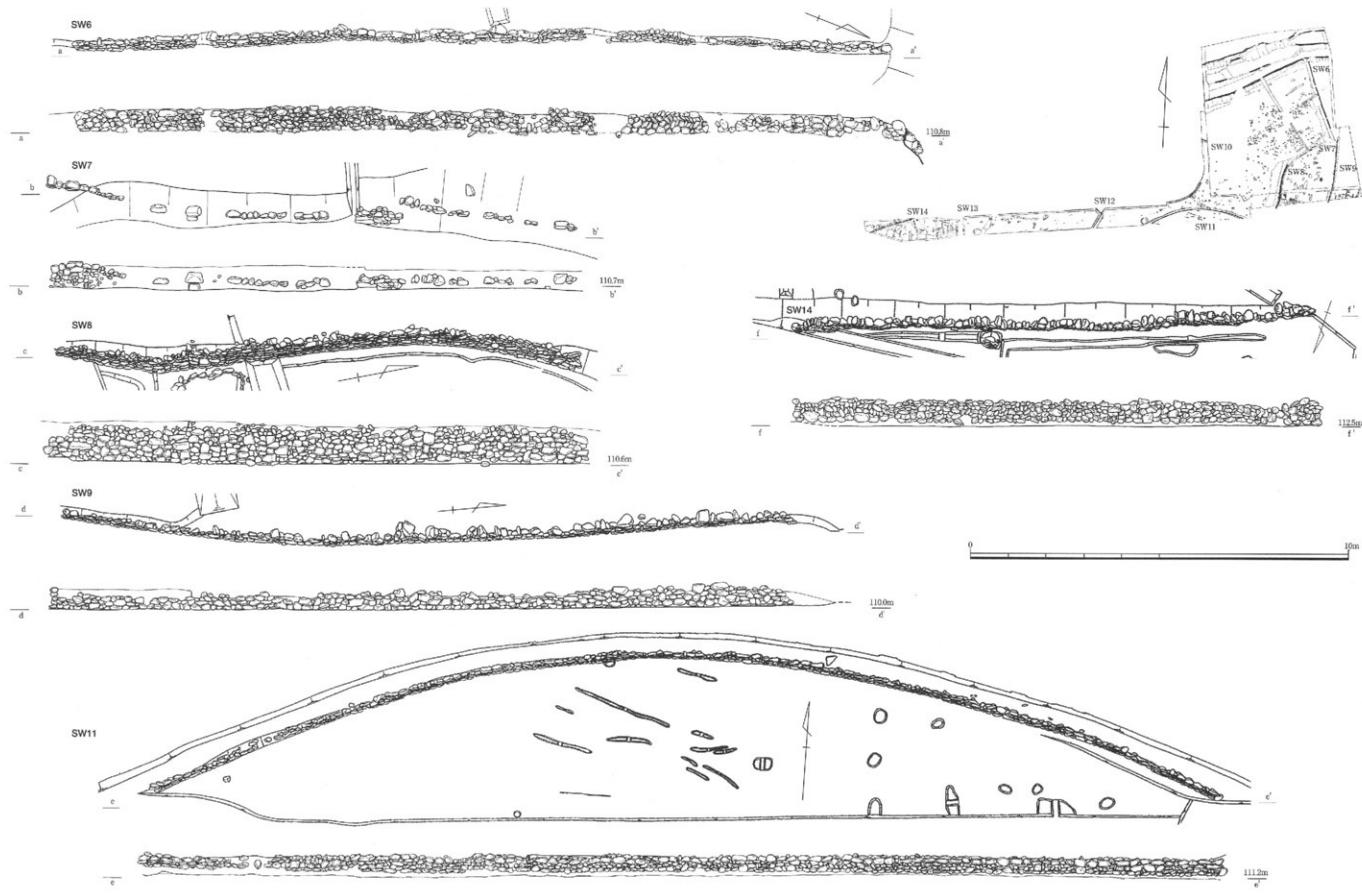
SW 9は近世に築造されたものと考えられる。



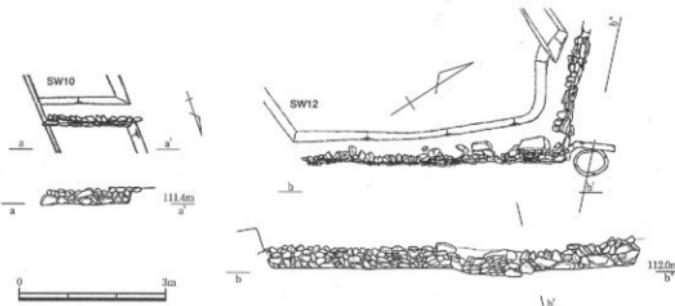
第28図 SW1～5 遺構平面及び立面実測図 (1/100)



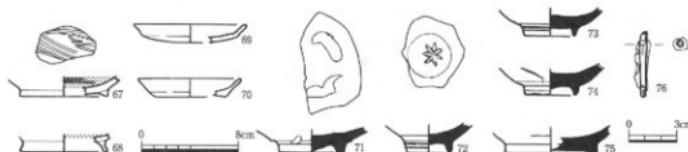
第29図 調査区土層断面実測図(1/60)



第30図 SW6~9・11・14 遺構平面及び立面実測図 (1/100)



第31図 SW10・12遺構平面及び立面実測図(1/100)



第32図 SW11出土遺物実測図

#### 〔SW10〕(第31図)

SW10はf5、g5区に位置する。残存高0.33m、長さ2.08mにわたり検出し、さらに調査区外へと続いている。石積みは3段遺存していた。

裏込め土から遺物は出土しなかった。

SW10は近世に築造されたものと考えられる。

#### 〔SW11〕(第30・33図、図版32)

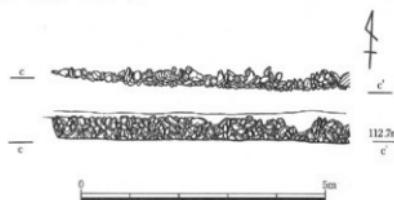
SW11はe7～h7区に位置する。残存高約0.4m、長さ28.4mにわたり検出し、さらに調査区外へと続いている。石積みは3～4段遺存していた。

裏込め土からは、土師器台付壺、須恵器杯、黒色土器A類塊(67・68)、土師質皿(69・70)、瓦器塊、瓦質皿・擂鉢、肥前系陶磁(71～75)、鉄釘(76)が出土した。古代及び中世の遺物については、石垣掘形掘削時に掘り返された遺物包含層に含まれていたものが混入したものであり、近世の遺物は石垣築造時期に近い遺物であろう。

#### 〔SW12〕(第31図)

SW12はj7区に位置する。平面形態は逆L字形を呈しており、残存高0.4m、長さ8.1mにわたり検出し、さらに調査区外へと続いている。石積みは3～5段遺存していた。

裏込め土からサスカイト剝片・



第33図 SW13遺構平面及び立面実測図(1/100)

瓦が出土したが、小片のため図化できなかった。

SW12は近世に築造されたものと考えられる。

#### 〔SW13〕(第32図)

SW13はn7区に位置する。残存高0.5m、長さ6mにわたり検出し、さらに調査区外へと続いていた。石積みは3~5段遺存していた。

裏込め土からは、土師質皿・土釜、瓦質皿が出土したが、図化できなかった。

SW13は近世に築造されたものと考えられる。

#### 〔SW14〕(第30図)

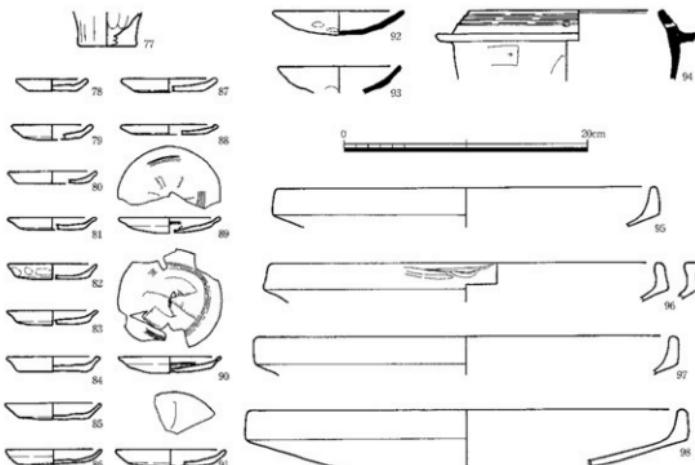
SW14はp7、q7区に位置する。残存高0.8m、長さ14mにわたり検出し、さらに調査区外へと続いていた。石積みは3~5段遺存していた。

裏込め土から遺物は出土しなかった。

SW14は近世に築造されたものと考えられる。

### 7 上層包含層

上層包含層出土の遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、貿易陶磁器、肥前系陶磁が出土した。量的には15世紀代~17世紀のものが中心であり、瓦質土器、土師質土器が最も多かった。これらに下層包含層から攪拌された遺物が混入しているため、より古い時代のものも若干見られた。これらの遺物は下層遺構が形成された時期に左右され、地区ごとに異なる状況が認められた。以下には、出土した遺物が近似した傾向を有する区をまとめ、各区から出土した遺物の特徴を述べていきたい。



第34図 上層包含層出土遺物実測図①

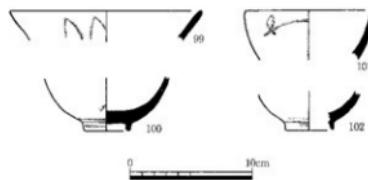
調査区南西部 q 7 区～n 7 区(第34図、図版33) 弥生土器(77)、土師質皿(78～91)、炮烙(95～98)、瓦質皿(92・93)・土釜(94)・擂鉢、肥前系陶磁等の15世紀から16世紀を中心とする遺物が多く出土した。またこれらに加えて少量の14世紀末から16世紀にかけてのものが認められた。土師質皿では口径が8cm程度、丸底で口縁部は外反し、内面にクモの巣状の板ナデ調整をした14後半代の特徴が認められるものから、口径が5.6cm程度にまで小型化した16世紀の特徴をしめているものまで含んでいる。瓦器ではIV - 3段階以降の皿が出土した。これらの他に須恵器の小片が出土した。

北東の石垣周辺 f 3・4・e 3・4 区(第35図、図版33) 青磁碗(99)、肥前系陶磁(100～102)が比較的多く、瓦器塊の小片などが若干含まれる。

S T 1 周辺 d 3～d 5・c 4 区(第36図、図版33) 土師質皿・土釜(104)、瓦器塊(103)、瓦質土器、須恵質練鉢(105)、鉄釘(106)が出土した。下層で検出した石室の埋土上層もしくは攪乱坑埋土からも同様の遺物組成が認められることから、これらは古墳から流出した遺物と考えている。

南部 e 7～k 7 区(第37・38・39図、図版33・34) 石鎌(107・108)、石刃(109)、弥生土器壺(110・111)、土師器塊(112)・甕(113～114)、須恵器坏蓋(115～117)・坏身(118)・高坏(119)・取手付き鉢(120)、土師質皿(121～132)・土釜(150～152)・擂鉢(163)・甕(165)・壠(173・174)、黒色土器 A類塊(133・134)・B類塊(135)、瓦器塊(139～141)、瓦質皿(136)・土釜(153)・擂鉢(164)・甕・火鉢(154)、肥前系陶磁(166～172)、堺擂鉢(160)、須恵質皿(137・138)・練鉢(162)、白磁IV類碗(146～149)、龍泉窯系蓮弁文青磁碗(142～144)、丹波擂鉢(161)、貳斗瓦(175)など15世紀から17世紀にかけての遺物に加えて、数点の下層包含層に本来含まれていたと考えられる遺物が出土した。

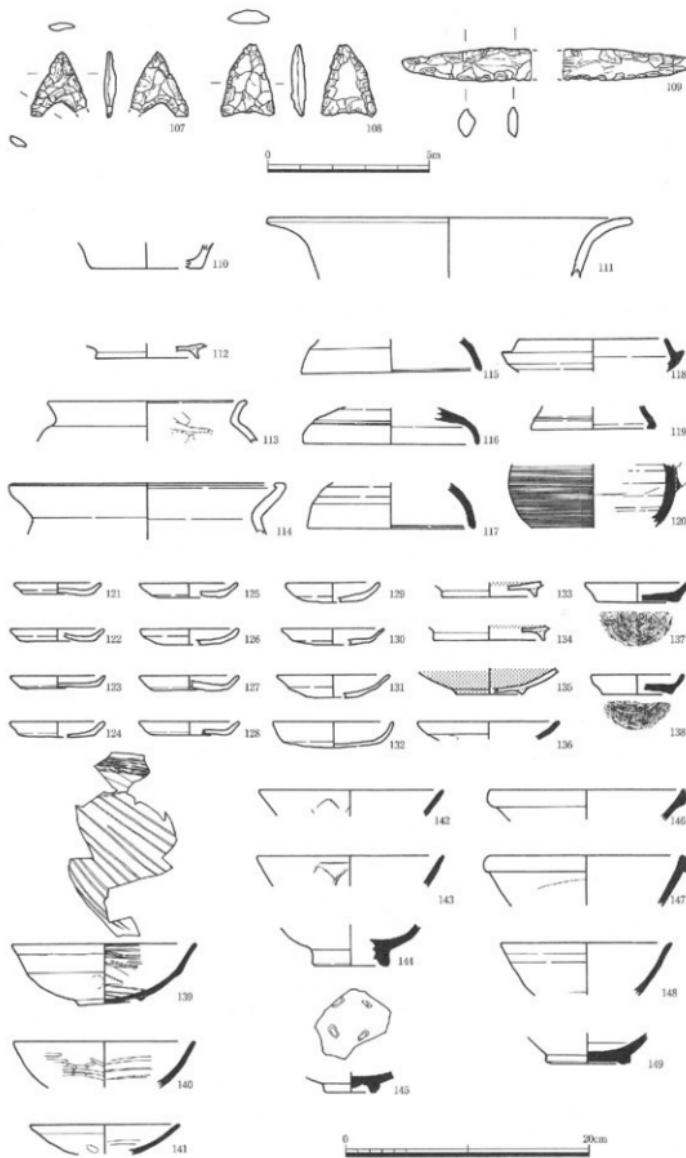
また6世紀代の須恵器が密度は薄いが比較的広範囲で検出されている。



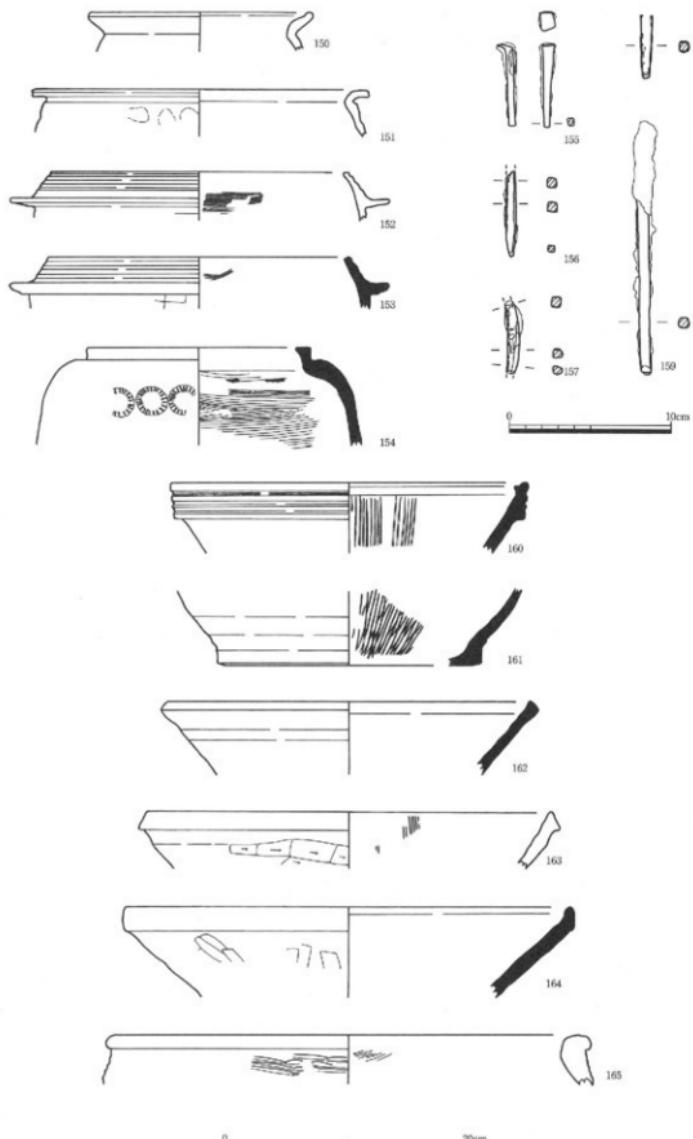
第35図 上層包含層出土遺物実測図②



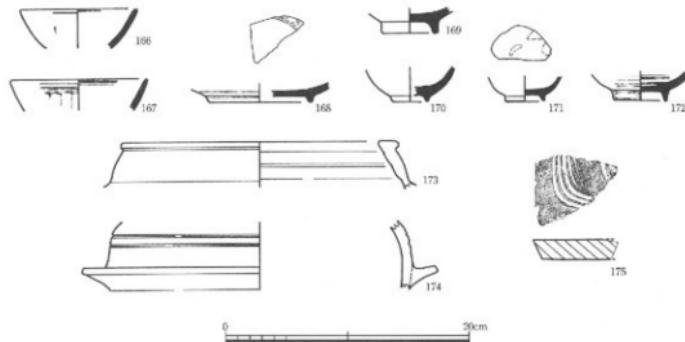
第36図 上層包含層出土遺物実測図③



第37図 上層包含層出土遺物実測図④



第38図 上層包含層出土遺物実測図⑤



第39図 上層包含層出土遺物実測図⑥

### 第3節 下層遺構面

#### 1 概要

下層の遺構面では7世紀初頭から13世紀後半にいたる遺構を検出している。主なものをあげれば、古墳時代後期の古墳、古代の土坑、中世の土廣墓、土坑などがあげられる。遺物ではこれらの時期に伴う土器器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器に加えて、弥生時代中期の土器片、古墳時代の円筒埴輪片が出土した。



第40図 下層遺構面調査区全体図(約1/1000)

#### 2 溝

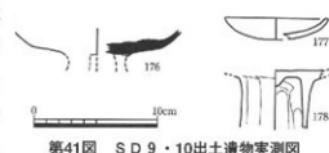
##### 〔SD 8〕(第41・42図)

SD 8はk 7区に位置する。規模は幅4.92m、深さ0.25m、長さ6.88mにわたり検出した。埋土は1層で構成されており、2.5Y5/1黄灰色粗砂まじり細砂であった。

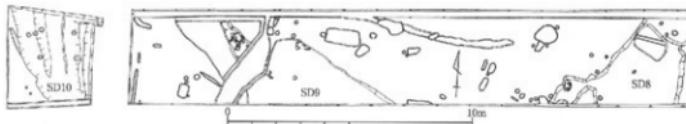
遺物は出土しなかった。

##### 〔SD 9〕(第41・42図、図版34)

SD 9はm 7区にあり、SD 8の西に位置する。上層遺構のSD 2により埋土の一部が削平されている。規模は幅5.16m、深さ0.28m、長さ8.28mにわたり検出した。埋土は3層で構成されており、レンズ状堆積が見られた。



第41図 SD 9・10出土遺物実測図



第42図 SD 8～10遺構配置図(1/200)

下層から、7.5YR4/2灰褐色粗砂まじり粘土、10YR6/6明黄褐色粗砂まじり粘土、10YR6/4にぶい黄褐色粗砂まじり粘土であった。各層にはマンガンが多く含まれていた。

遺物はサヌカイトの剝片、須恵器壺・高杯(176)・甕、土師質皿(177)・土釜、瓦器塊等が出土した。瓦器塊は尾上縦年のⅢ型式に相当するものである。<sup>経年</sup>

S D 9は13世紀代のものと考えられる。

〔S D10〕(第41・42図、図版34)

S D10はn 7区の位置にあり、S D 9の西に位置する。規模は幅3.64m、深さ0.5mであったが、南ほど浅くなり0.18m程度になる。長さは6.12mにわたり検出した。掘形は2段に掘削されていた。埋土は大きくシルト質の上層と粘土質の下層に分かれる。上層は11層で構成されており、褐色～黄褐色系のシルト質もしくはこれに粘土がまじる土質を呈していた。一方下層は5層で構成されており、にぶい褐色から灰褐色を呈しており、土質は粘土であり、グライド化が進んでいた。

遺物は上層からサヌカイト剝片、弥生土器、土師質土器、瓦器塊が出土し、下層からは奈良時代の土師器高杯(178)が出土した。

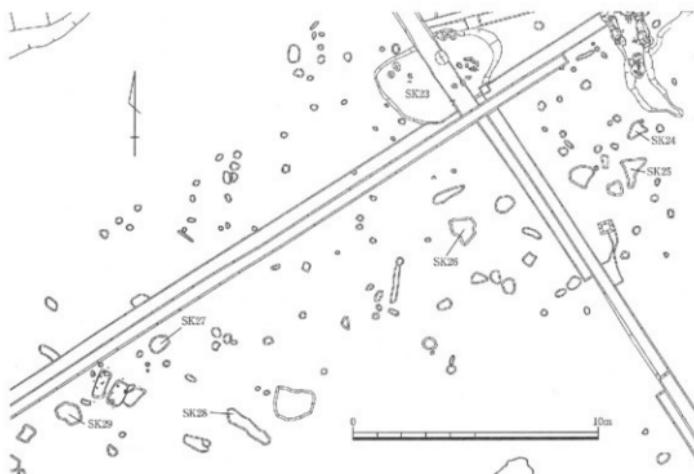
土師器高杯(178)は脚部の破片であり、器壁は面取りされており、断面8角形を呈する。

S D10は13世紀代のものと考えられる。

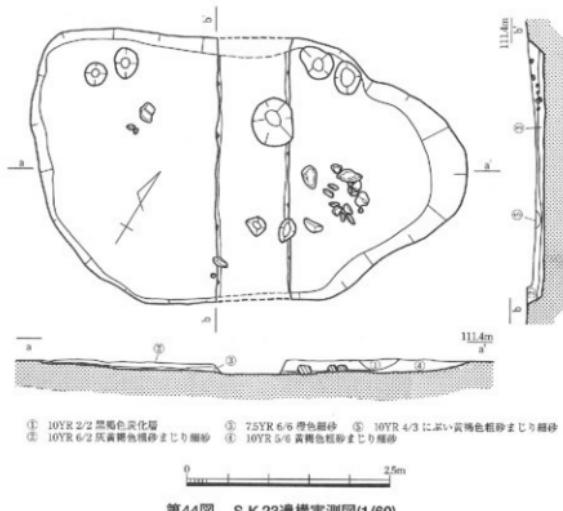
### 3 土坑

〔S K23〕(第43・44図)

S K23はd 4区に位置し、古墳の周溝を破壊して穿たれている。平面形態は楕円形を呈



第43図 S K23~29遺構配置図(1/200)



第44図 SK 23遺構実測図(1/60)

し、規模は長径5.28m、短径3.08、深さ0.18mであった。底面は比較的平坦で、底面には柱穴が数ヶ所みられた。埋土は5層で構成されており、下層から、10YR4/3にぶい黄褐色粗砂まじり細砂、10YR5/6黄褐色粗砂まじり細砂、7.5YR6/6橙色細砂、10YR6/2灰黄褐色粗砂まじり細砂、10YR2/2黒褐色炭化層であった。

遺物はサヌカイト剝片、土師質皿、瓦器塊が出土したがいずれも小片のため、図化できなかった。

SK 23は13世紀代のものと考えられる。

#### 〔SK 24〕(第43図)

SK 24はc 4区に位置する。平面形態は円形を呈しており、規模は長径0.84m、短径0.65m、深さ0.24mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR5/2灰褐色細砂まじりシルト、5YR4/3にぶい赤褐色細砂まじりシルトであった。また埋土からは本米地山に含まれていたとみられる多量のレキが出土した。SK 24はこれらのレキを投棄するための土坑であると考えられる。

遺物は出土しなかった。

#### 〔SK 25〕(第43図)

SK 25はc 4区に位置する。平面形態は不整な円形を呈しており、規模は直径1.32m、深さ0.19mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR4/3褐色シルト、5YR4/3にぶい赤褐色シルトであった。SK 24と同様に埋土には多量のレキが含まれていた。

遺物は出土しなかった。

〔SK26〕(第43図)

SK26はd4区に位置する。平面形態は楕円形を呈しており、規模は長径1.18m、短径1.07m、深さ0.31mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR5/2灰褐色細砂まじりシルト、5YR4/3にぶい赤褐色細砂まじりシルトであった。SK24・25と同様に埋土には多量のレキが含まれていた。

遺物は出土しなかった。

〔SK27〕(第43図)

SK27はe5区に位置する。平面形態は楕円形を呈しており、規模は長径0.87m、短径0.63m、深さ0.11mであった。埋土は3層で構成されており、下層から7.5YR6/4にぶい橙色細砂、7.5YR6/4にぶい橙色細砂(5Y7/1灰白粘土を含む)、7.5YR6/4にぶい橙黄色細砂であった。

遺物は出土しなかった。

〔SK28〕(第43図)

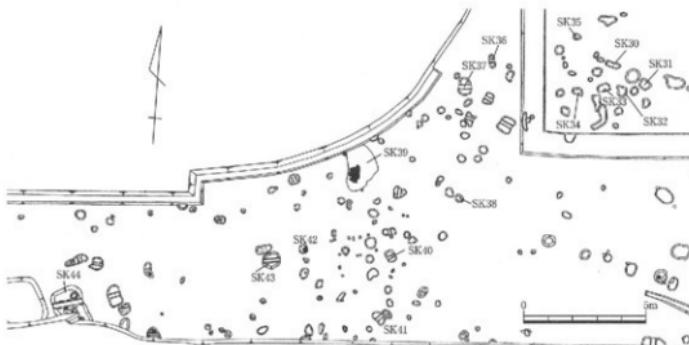
SK28はe5区に位置する。平面形態は楕円形を呈しており、規模は長径2.2m、短径0.56m、深さ0.11mであった。埋土は3層で構成されており、下層から、7.5YR4/3褐色細砂まじりシルト、5YR4/3にぶい赤褐色細砂まじりシルト、7.5YR5/2灰褐色細砂まじりシルトであった。

遺物は出土しなかった。

〔SK29〕(第43図)

SK29はf5区に位置する。平面形態は方形を呈しており、規模は長辺が0.76m、短辺0.54m、深さは0.12mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR4/3褐色細砂まじりシルト、5YR4/3にぶい赤褐色細砂まじりシルトであった。

遺物は出土しなかった。



第45図 SK30~44遺構配置図(1/200)

#### 〔S K30〕(第45図)

S K30はf 6区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.64m、短径0.25m、深さ0.24mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR5/2灰褐色細砂まじりシルト、5YR4/3にぶい赤褐色細砂まじりシルトであった。

遺物は出土しなかった。

#### 〔S K31〕(第45図)

S K31はf 6区に位置する。平面形態は歪な隅丸方形を呈し、規模は長辺0.49m、短辺0.46m、深さは0.09mであった。埋土は3層で構成されており、下層から、7.5YR4/3褐色細砂まじりシルト、7.5YR5/2灰褐色細砂まじりシルト、5YR4/3にぶい赤褐色細砂であった。

遺物は出土しなかった。

#### 〔S K32〕(第45図)

S K32はf 6区に位置する。平面形態は歪な方形を呈しており、規模は長辺0.52m、短辺0.45m、深さ0.1mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR4/3褐色細砂まじりシルト、5YR4/3にぶい赤褐色細砂まじりシルトであった。

遺物は出土しなかった。

#### 〔S K33〕(第45図)

S K33はf 6区に位置する。平面形態は長方形を呈しており、規模は長辺0.56m、短辺0.32m、深さ0.16mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR4/3褐色細砂まじりシルト、5YR4/3にぶい赤褐色シルトであった。

遺物は土師器もしくは土師質皿が出土したが、小片のため図化できなかった。

#### 〔S K34〕(第45図)

S K34はf 6区に位置する。平面形態は歪な隅丸方形を呈しており、規模は長辺0.46m、短軸0.34m、深さ0.17mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR4/3褐色細砂まじりシルト、10YR5/3にぶい黄褐色シルトであった。

遺物は土師器甕が出土したが図化できなかった。

#### 〔S K35〕(第45図)

S K35はf 6区に位置する。平面形態は歪な楕円形を呈しており、規模は長軸0.43m、短軸0.38m、深さ0.12mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR4/3褐色細砂まじりシルト、5YR4/3にぶい赤褐色細砂まじりシルトであった。

遺物は土師器甕が出土したが、小片のため図化できなかった。

#### 〔S K36〕(第45図)

S K36はg 6区に位置する。平面形態は楕円形を呈しており、規模は長軸0.53m、短軸0.23m、深さ0.21mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR4/4褐色シルトまじり砂質土、10YR5/2灰黃褐色粘土であった。

遺物は出土しなかった。

〔S K37〕(第45図)

S K37はg 6区に位置する。平面形態は歪な楕円形を呈しており、規模は長軸0.76m、短軸0.49m、深さ0.17mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、10YR6/8明黄褐色粘土、7.5YR4/6褐色細砂まじり粘土であった。

遺物は出土しなかった。

〔S K38〕(第45図)

S K38はg 7区に位置する。平面形態は歪な円形を呈しており、規模は長軸0.38m、短軸0.31m、深さ0.11mであった。断面による埋土の観察により、柱穴の痕跡がみとめられた。埋土は掘形が10YR4/4褐色シルト、柱穴埋土が7.5YR4/6褐色細砂まじり粘土(7.5YR8/8黄褐色粘土ブロック含む)であった。

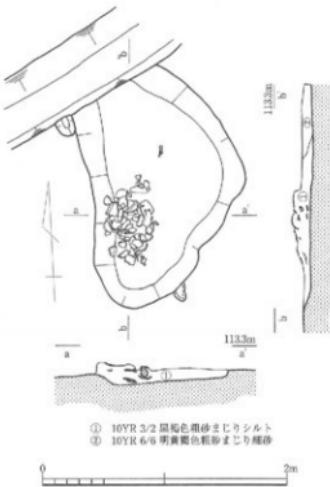
遺物は出土しなかった。

〔S K39〕(第45~47図、図版34・35)

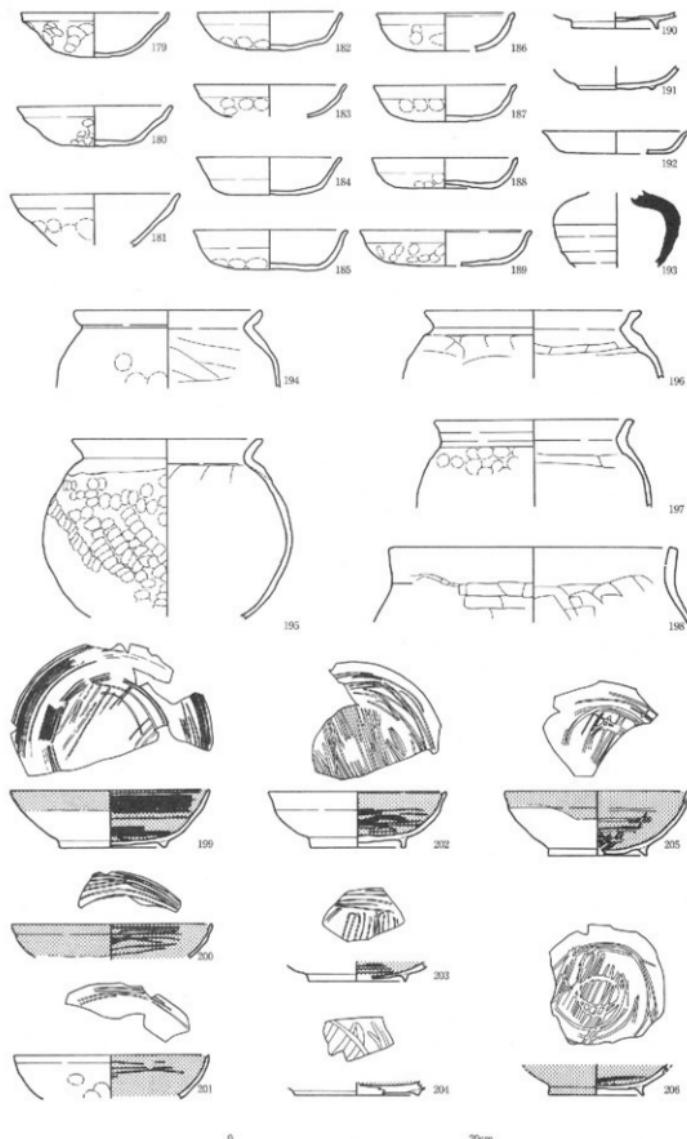
S K39はg 6区に位置する。平面形態は歪な楕円形を呈し、規模は長軸2.59m、短軸1.21m、深さ0.13mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、10YR3/2黒褐色粗砂まじりシルト、10YR6/4明黄褐色粗砂まじり細砂であった。遺構は地山面で検出したが、遺物の一部がこれより高い位置で出土したことから、本来は包含層中に掘り込み面があったと考えられる。

遺物は土師器壺A、杯B、甕、須恵器壺、黑色土器A類壺、黑色土器B類壺、土師質土釜が一括して投棄された状況で出土した。遺物は主に下層から、小片の状態で出土した。以下に出土遺物について器種ごとに特徴を述べる。

土師器壺A(179~189)は15点以上出土した。大きく分けて、b形態の口縁を有し、丸底の底部を有するもの(179~181)とc形態の口縁を有し、平底もしくは上げ底のもの(182~189)が見られる。前者(179~181)は遺存状況が良好なもので口径が11.4~12.9cmを測る。これらは、口縁端部内外面に強いヨコナデを加えることにより、b形態の口縁を作り出している。口縁下半部から底部にかけて、ユビオサエの跡を残しており、a<sub>a</sub>手法がみとめられる。また破片すべてに焼成時についたと想定される黒斑が観察できた。後者(182~189)は、遺存状況が良好なもので口径が11.9~13.5cmを測



第46図 S K39遺構実測図(1/40)



第47図 S K 39出土遺物実測図

る。口縁外面に強いヨコナデを加え、c形態の口縁を作り出している。底部を中心にユビオサエの跡が認められるが、口縁部はナデ調整が加えられており、a<sub>o</sub>手法がみとめられる。底部は多くが平底であるが、上げ底気味になっているものも認められる。<sup>註21</sup>

土師器壺B(I90・I91)は2点が出土した。いずれも小片である。(I91)は比較的厚い底に断面台形の高台を有している。高台径は6cmを測る。(I90)は比較的薄い底に細く高い高台を有する。高台径は7cmを測る。

土師器皿(I92)は1点出土した。小片であり摩滅が激しいため調整は不明である。口径は復元値で12cmを測る。口縁部は外反しており、端部が若干上方につまみ上げられている。

土師器甕(I94～I98)は5点の口縁部の小片が図化できた。遺存状況が良好なもので口径が約15cmに復元できる。口縁部は外反するA形態(I94～I97)と直立するB形態(I98)が認められる。(I94～I97)はいずれも口縁端部は面取りされており、端面は上方を向いている。体部は丸く、最大径は中部以下にくるものと考えられる。口縁部内外面はヨコナデが施されしており、体部外面にはユビオサエの跡が認められる。また、体部内面は板状工具によるナデ調整が行われている。(I98)は小片であるが、内外面ともに板状工具によるナデ調整が認められる。<sup>註22</sup>

須恵器壺(I93)は胴部の破片である。胴部最大径は約10cmになると考えられる。壺Mに相当する。体部上半が回転ナデ調整、体部下半部から底部にかけてが回転ヘラケズリが認められる。<sup>註23</sup>

黒色土器A類塊(I99～I205)は遺存状況が良好なもので口径が14.2cm～16.2cmであり、内弯する口縁部を有し、口縁端部外面には強いヨコナデが加えられる。口縁端部内面は内傾する面を有するものと段が認められるものがある。底部は平底に断面台形の高台が貼り付けられている。調整は内面に細かなヘラ磨きが行われており、暗文は認められなかった。外面の調整は摩耗のため観察できなかった。

黒色土器B類碗(I206)は底部の小片で、丸底に断面台形の高台が貼り付けられている。外面にヘラ磨きを施す。暗文は認められなかった。外面の調整は摩耗のため観察できなかつた。<sup>註24</sup>

これらの遺物はいずれも上田編年のV期に相当する遺物群であり、SK39は10世紀前半のものと判断できる。<sup>註25</sup>

#### 〔SK40〕(第45図)

SK40はg7区に位置する。平面形態は歪な橢円形を呈しており、調査区内の北半部のみ調査を行った。検出規模は長軸0.51m、短軸0.38m、深さ0.23mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、10YR5/3にぶい黄褐色砂質土、10YR5/2灰黄褐色粘土であった。

遺物は出土しなかった。

#### 〔S K 41〕(第45図)

S K 41はq 7区に位置する。平面形態は歪な楕円形を呈しており、規模は長軸0.61m、短軸0.37m、深さ0.1mであった。埋土は2層で構成されており、下層から、10YR3/3暗褐色砂質土、7.5YR4/6褐色細砂まじり粘土(7.5YR8/8黄褐色土上プロック含む)であった。

遺物は出土しなかった。

#### 〔S K 42〕(第45図)

S K 42はg 7区に位置する。平面形態は歪な円形を呈しており、規模は長軸0.39m、短軸0.34m、深さ0.22mであった。断面による埋土の観察により、柱穴の痕跡がみとめられた。埋土は掘形が7.5YR4/2灰褐色砂質土、柱穴埋土が10YR3/3暗褐色砂質土であった。

遺物は出土しなかった。

#### 〔S K 43〕(第45図)

S K 43はg 7区に位置する。平面形態は歪な楕円形を呈しており、規模は長軸0.71m、短軸0.68m、深さ0.23mであった。埋土は4層で構成されており、下層から、10YR6/4にぶい黄橙色粘質土、10YR3/2黒褐色粗砂まじりシルト、10YR5/4にぶい黄褐色砂質土、10YR4/2灰黄褐色砂質土であった。

遺物は土師質皿、黒色上器A類が出土したが、小片のため図化できなかった。

#### 〔S K 44〕(第45図)

S K 44はh 7区に位置する。平面形態は歪な長方形を呈しており、調査区内の北半部のみ調査を行った。検出規模は長軸1.43m以上、短軸1.26m、深さ0.23mであった。埋土は5層で構成されており、下層から、10YR5/4にぶい黄褐色粘質土、10YR4/3にぶい黄褐色粘質土、10YR3/4暗褐色粘性砂質、10YR3/3暗褐色粘性砂質(10YR6/6明黄褐色のプロックが混じる)、10YR3/3暗褐色砂質上であった。埋土には拳大のレキが多く含まれていた。

遺物は弥生土器が出土したが、小片のため実測できなかった。弥生土器は摩耗が著く、また小片であることから、当該土坑の時期を示すものではないと考える。

#### 〔S K 45〕

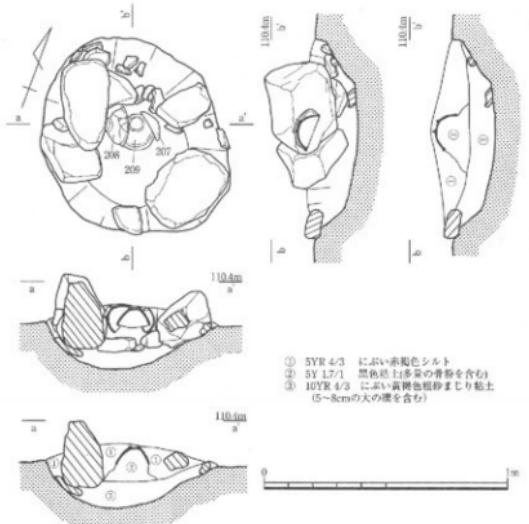
S K 45はk 7区に位置する。平面形態は歪な楕円形を呈しており、規模は長軸5.6m、短軸2.34m、深さ0.19mであった。埋土は10YR3/3黒褐色砂質土であった。

遺物は出土しなかった。

## 4 墓

#### 〔S R 2〕(第48・49図、図版19・36)

S R 2はb 5、c 5区に位置している。主軸方向はN-15°Eを示す。平面形態は歪な円形を呈しており、規模は直径約0.7m、深さ0.2mを測った。掘形内には、白磁碗(208・209)2点と瓦器塊(207)1点が伏せた状況で埋置されており、これらを囲むように6個の石材が配置されていた。埋土は3層で構成されており、下層から、③10YR4/3にぶい黄褐色



第48図 SR 2 遺構実測図(1/20)

粗砂まじり粘土、② 5 YR7/1 黒色シルトまじり粘土、① 5 YR4/3にぶい赤褐色粗砂であった。①は掘形内の 2 点の白磁碗と 1 点の瓦器塊を埋置した後、掘形を埋め戻した際に形成されたもので、②はこれら 3 点の碗に囲まれた空間に形成された土層であり、炭化物と共に、多量の碎片化した骨粉が含まれていた。③は地山の土質と近似していたが地山に見られた多量のレキが含まれず、土色もやや純い色を呈していた。骨粉や炭化物を埋地するための置土である可能性が考えられる。

出土遺物は先述したように、白磁碗(208・209)が 2 点、瓦器塊(207) 1 点が出土した。

白磁碗(208)は口径 15.5cm、器高 6.6cm であり、森田編年で V 類と分類されているものである。口縁上半部は回転ナデ調整、口縁部下半部から底部にかけては回転ヘラケズギが施されている。見込みには沈線が認められる。施釉されている範囲は内面から外面の高台上半部に及んでいる。器壁は施釉されている範囲が 5Y7/2 灰白色、露胎している範囲が 5Y8/1 灰白色を呈す。口縁端部が部分的に欠損しており打ちかかれたような状況を呈して

<sup>註28</sup>  
いる。

白磁碗(209)は口径15.2cm、器高6.6cmであり、森田分類でIV 2類と分類されているものである。口縁部下半部から底部にかけては回転ヘラケズリが施されている。見込みには沈線が認められる。施釉されている範囲は内面から外面の口縁部上半に及んでいる。器壁は施釉されている範囲が2.5Y8/3淡黄色、露胎している範囲が2.5Y8/2灰白色を呈す。<sup>註29</sup>廈門碗窯系の製品であるとされる。

瓦器塊(207)は口径が14.9cm、器高が4.4cmであり、和泉型瓦器塊である。内面には暗文が、外面には口縁部に強いヨコナデ、口縁下半部から底部にかけてはユビオサエのあとが観察できる。尾上編年のⅢ-2~Ⅲ-3期に該当する。

これらの3点の塊は細片化した骨を埋むように配置されていたことから、藏骨器として利用されていたものと考えている。なお、当該遺構は、遺物包含層を調査掘削している際に、白磁碗の一部が露出し、遺構の存在を認識した。周辺を精査したが多量のレキを含んだ包含層中で掘形を探すことができなかったので、地山面まで周囲を掘り下げ堀形を検出した。このため、本来の掘形よりも低いレベルで検出している。

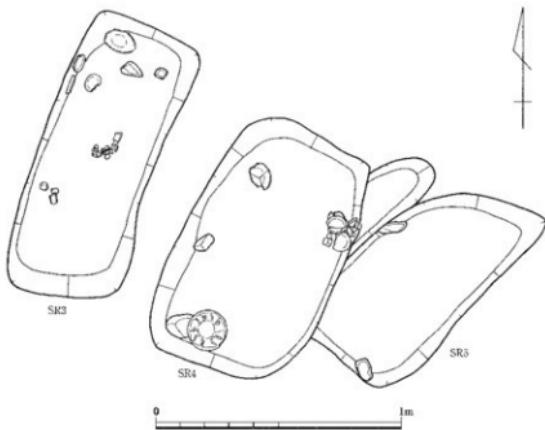
S R 2 は13世紀初頭のものと考えられる。

〔S R 3〕(第50~52図、図版20・36)

S R 3 は f 5 区に位置する。主軸方向はN-40°Eを示す。平面形態は隅丸方形を呈しており、規模は幅0.25m、長さ0.55m、深さ0.5mを測る。S R 4 と比較して掘形が深い。埋土は比較的近似した土質の3層で構成されており、下層から、③層7.5YR5/1褐色細砂、②7.5YR5/6明褐色レキ混じり粗砂、①5 YR4/3にぶい赤褐色粗砂であった。人骨は遺存していないかった。



第50図 S R 3 ~ 6 遺構配置図(1/200)



第51図 SR 3～5 遺構配置図(1/20)

遺物は刀子片(215)1点、土師質皿(210～213)4点、瓦器塊(214)が1点が出土した。これらの土器は正位置で置かれているものではなく、内面を主軸方向に向け、底部が掘形の肩部に貼り付くような状態で出土した。このような出土状況から、本来木棺が埋葬されており、土器は土壇の壁と木棺の隙間に落ち込んでいた可能性、もしくはこれらの間に鉢みこまれていた可能性が指摘できる。しかし、埋土から釘が出土しておらず、底面の精査の結果、もしくは土層観察からも木棺の痕跡は確認できなかった。掘形の規模から考えて伸展葬が行われていたとは考えられないものであり、屈葬が行われていたものと考える。

刀子(215)は幅3.4cmであり、長さ13cmが遺存していた。

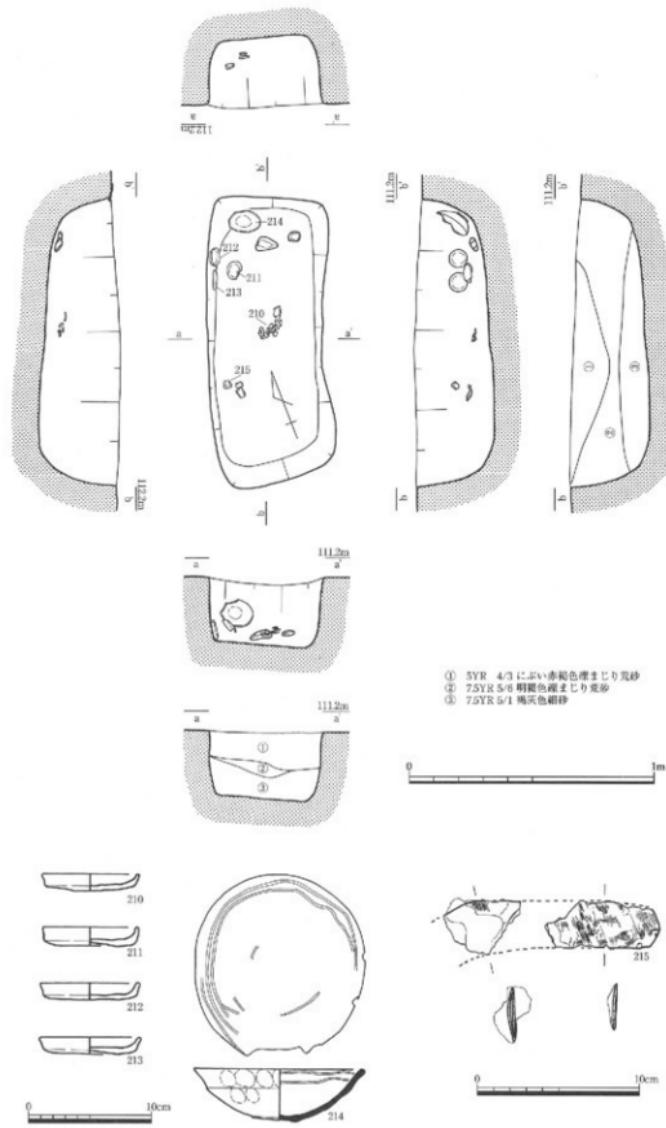
土師質皿(210～213)は法量、器形、胎土が比較的整っており、口径7.8cm～8.2cm、器高が1.4～1.6cmで、赤褐色系の胎土であった。口縁部が急な勾配で直線的に立ちあがっており、平底もしくは上げ底を有する。口縁部外面にヨコナデ<sup>ヨコナデ</sup>、底部にユビオサエのあとが観察でき、内面はナデ調整されていた。

瓦器塊(214)は口径13.75cm、器高4.3cmであり、和泉型瓦器塊である。内面には暗文が、外面には口縁部で強いヨコナデ<sup>ヨコナデ</sup>、口縁下半部から底部にかけてはユビオサエのあとが観察できた。尾上編年のIV-1期に該当する。

SR 3は13世紀中葉のものと考えられる。

〔SR 4〕(第50・51・53図、図版20・36・37)

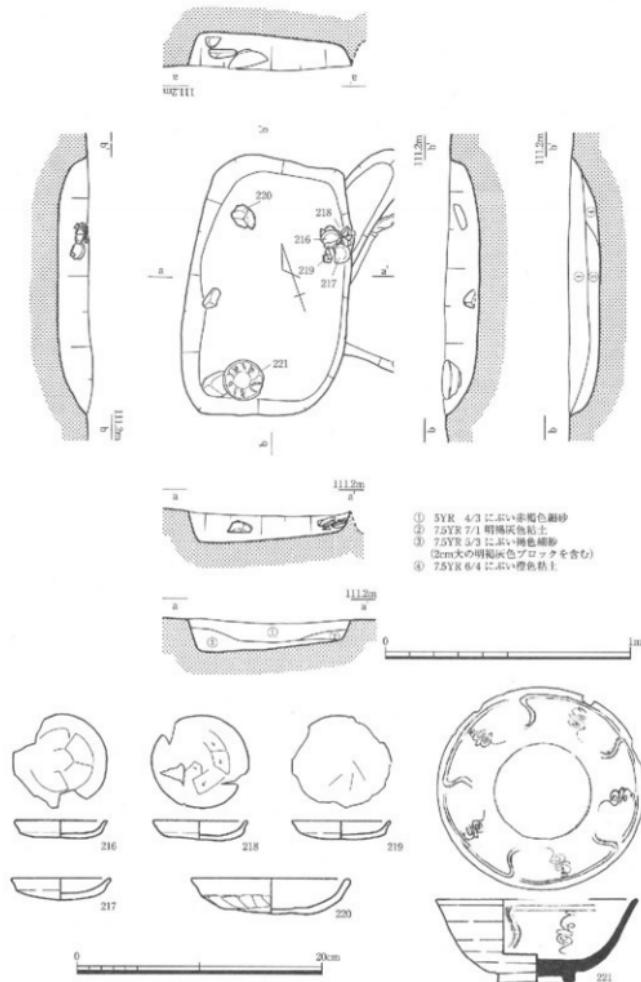
SR 4はf 5区に位置し、SR 3の東に隣接する。主軸方向はN-51°-Eを示す。平面形態は隅丸長方形を呈しており、規模は幅0.65m、長さ10.5m、深さは後世の削平により0.15mしか遺存していないかった。埋土は3層で構成されており、下層から、③7.5YR5/3にぶい褐色細砂、②7.5YR7/1明褐灰色粘土、①5 YR4/3にぶい赤褐色細砂であった各土質



第52図 SR 3 遺構配置図(1/20)及び出土遺物実測図

は非常に近似していた。人骨は遺存していなかった。

出土遺物は青磁碗(221)1点、土師質皿(216~220)5点がある。土器は種別ごとに分けて埋置されており、土師質皿(220)は北西隅に、青磁碗(221)は南端に、土師質皿(216~220)は東部にまとめて置かれていた。これらの遺物はいずれも墓壙底面に接地していない。掘形の規模から考えて伸展葬が行われていたとは考えられないものであり、人骨が遺存してい



第53図 S R 4 遺構実測図(1/20)及び出土遺物実測図

た類例から想定すれば、履歴が行われていたものと考える。

青磁碗(221)は口径16.2cm、器高7cmであり、森田分類でI 4 a類碗とされるものである。施釉されているので詳細に観察できなかったが、外面内面ともに回転ナデ調整により調整されているようである。施釉されている範囲は全面におよび、畳付のみ摩耗のため釉薬がはげ落ちている。見込みには劃花文が認められる。内面には使用痕と考えられる平行方向の細かなきずが観察できる。<sup>633</sup> 龍泉窯系の製品である。

土師質皿(216~220)は大型品と小型品が認められ、大型品(220)は口径12.6cm、器高2.9cmであり、口縁部は内湾し、丸底を有する。調整は口縁端部がヨコナデ、口縁部下半部は板状工具によるナデ調整、底部はユビオサエの跡が観察できる。小型品(216~219)は口径7.4~7.9cm、器高1.5~1.8cmである。丸底に外反する口縁部を有する。内面にはクモの巣状<sup>634</sup> の板ナデが認められる。胎土は黄褐色系である。

S R 4 は瓦器塊等の時期を決定できる遺物に乏しいため、築造時期を確定することが困難であるが、青磁碗は13世紀前半のものであり、土師質皿は14世紀後半まで残存する形態のものである。

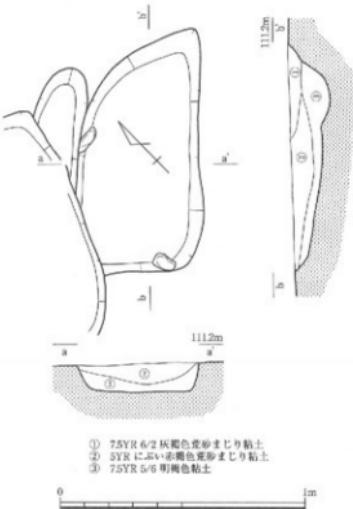
#### 〔S R 5〕(第50・51・54図)

S R 5 は S R 4 のすぐ西側に位置する。平面形は不整形な隅丸方形を呈しており、規模は幅0.5m、長0.95m、深さ約0.18mである。主軸方向はN-63°-Wを示す。埋土は、3層で構成されており、下層から、③7.5YR5/6明褐色粘土、②5 YR4/3にぶい赤褐色細砂まじり粘土、①7.5YR6/2灰褐色粗砂まじり粘土であった。

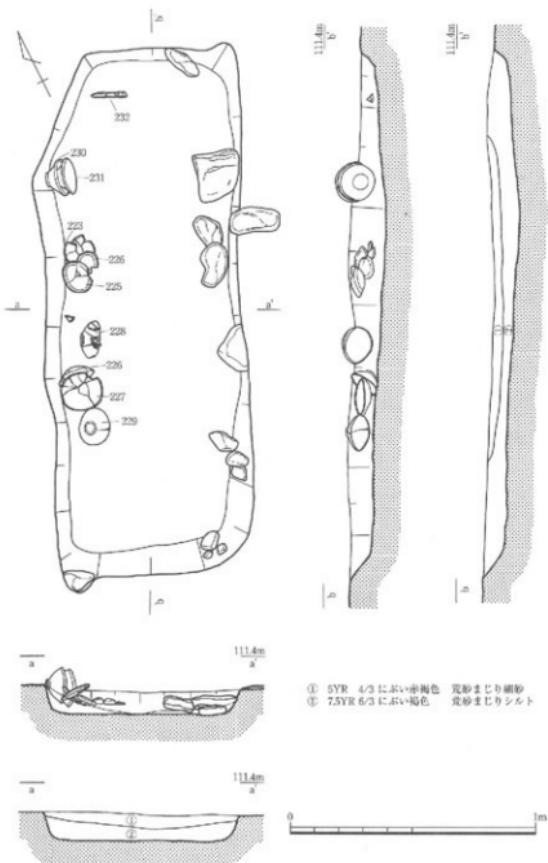
遺物は出土しなかったが、遺構の規模、位置から判断して土壤墓の可能性が考えられる。

#### 〔S R 6〕(第50・55図、図版21・37)

S R 6 はe 6 区に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈しており、規模は幅0.8m、長さ2.15mであった。深さは、後世の削平により、0.13m程度遺存するのみであった。主軸方向はN-42°-Wを示す。埋土は2層で構成されており、下層から、7.5YR6/3にぶい褐色粗砂まじりシルト、5YR4/3にぶい赤褐色粗砂まじり細砂であった。墓壙の底面は比較的平坦であったが、地山に含まれるレキが多数露出していた。底面の精査



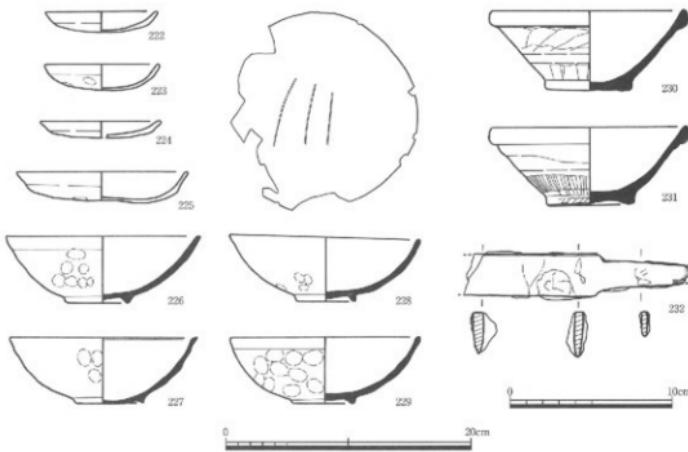
第54図 S R 5 遺構実測図(1/20)



第55図 S R 6 遺構実測図(1/20)

を行った際にも木棺の痕跡は検出できなかった。

遺物は刀子(232)1点、白磁碗(230・231)2点、土師質皿(222~225)4点、瓦器塊(226~229)4点が出土した。土器は同種のものがまとめられ、白磁碗は北部に土師器は中央に、瓦器塊は南部にそれぞれまとめられ埋置されていた。出土した土器は正位置で置かれているものが多く、白磁碗は2個体が重ねられ、碗の内面を主軸方向に向けて横置きされており、墓壙底面には接地していなかった。瓦器塊は伏せた状態で置かれているもの(227)、内面を主軸方向に向けて横置きしているもの(229)、斜めに傾けて置かれているもの(226・228)があった。土師質皿は内面を上にして斜めに置かれていた。これらの遺物は全て、墓壙の西端



第56図 SR 6出土遺物実測図

に寄せられた状態で出土した。これらのことから、釘は出土しなかったものの、東側に木棺が存在した可能性を指摘できる。掘形の規模から被葬者は伸展葬されていたと考えられる。刀子は切先を西にむけて埋置されており、位置が土器群よりやや東に位置することから本来棺内に置かれていたものであろう。

刀子(232)は幅2.9cm、13.75cm遺存していた。

白磁碗(230・231)は口径15.6cm、器高6.45・7.1cmであり、森田分類のIV 2類碗に相当する。SR 2で出土したものと基本的には同一の整形、調整が認められるが、比べた場合、粗雑化がすんでおり、器外面にはノッキングの跡が認められる。また釉薬も粘度が高い。施釉されている範囲は内面から外面の口縁部上半に及んでいる。器壁は施釉されている範囲が2.5Y8/3淡黄色であり、露胎している範囲が2.5Y8/2灰白色を呈する。廈門窯系の製品であるとされる。SR 2出土のものより製作技法の粗雑化が進んでいるため、後出するものであろう。<sup>230</sup>

瓦器塊(226～229)は口径15.1～15.5、器高5.4～5.5cmであり、いずれも和泉型瓦器塊である。外面は口縁部に強いヨコナデが認められ、口縁下部はユビオサエの跡が認められる。器表面の剥離のため内面の暗文や外面の磨きの状況が観察できなかった。高台の形態、器高、口径から、すべてⅡ期後半のものであるといえる。<sup>231</sup>

土師質皿(222～225)は大型品と小型品が認められる。大型品(225)は口径13.5cm、器高2.6cmであり、丸底に外反する口縁部を有する。小型品(222～224)は口径8.8～9.3cm、器高1.4～2.2cmであり、いずれも丸底を有し、外反する口縁部が認められる。比較的器高が高いもの(222・223)と低いもの(224)が認められる。<sup>232</sup>

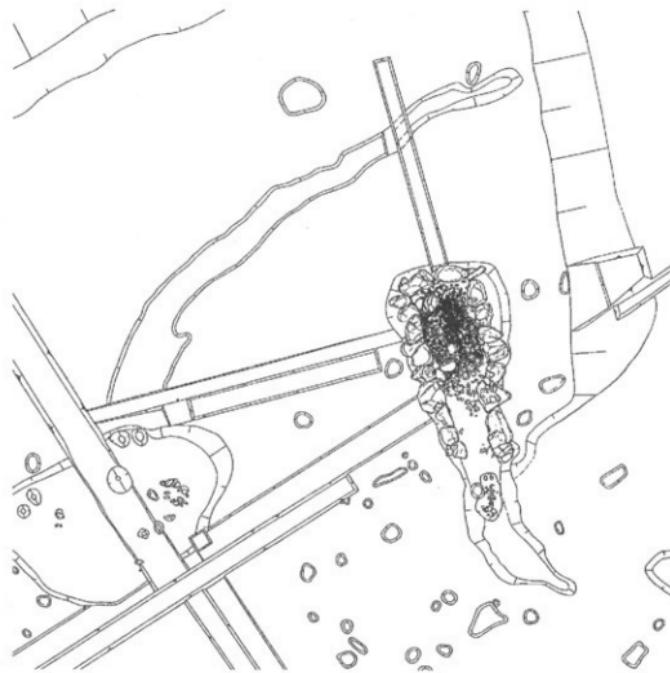
S R 6 は瓦器塊の年代からみて12世紀後半に築造されたと考えられる。これは白磁碗がしめす年代とも大きく矛盾しない。同じ廈門碗系の白磁碗IV類と瓦器が共伴している S R 2 と比較した場合、瓦器塊は古い様相が見られるのに対し、白磁碗は逆に新しい様相が認められる点は注目される。

## 5 古墳

### [S T 1]

#### A 位置(第57図)

S T 1 は c 3、4 区に位置している。S T 1 周辺は、比較的平坦な地形となっている。これは、中世から近世にかけての造成によるものであり、古墳築造段階は、なだらかな南向きの斜面地であったと考えられる。古墳の背後には、地山が比較的高いレベルで検出されており、本来、この付近に、石室主軸に直行する形で尾根状地形の稜線があったのであろう。なお、墳丘は、すべて削平されていた。石室の背後には弧状に巡る溝を検出してい



第57図 S T 1 造構配置図(1/100)

るが、これは周溝である可能性がある。

#### B 石室

S T 1 の内部施設は左片袖形の横穴式石室であり、主軸上で玄室長 2.36m、中軸上で玄室幅 1.3m、玄門部で羨道幅 0.84m、主軸上で羨道長 0.88m であった。また羨道には長さ 3.4m の墓道が接続している。主軸方位は N - 16° - W であり、南南東方向に開口する。石室は、基盤面を掘り込んで造成した石室掘形内に築かれていた。有袖形の横穴式石室としてはかなり小型である。また、床面は再利用面も含めて 3 面検出している。

#### 石室の検出状況(第58図、図版22)

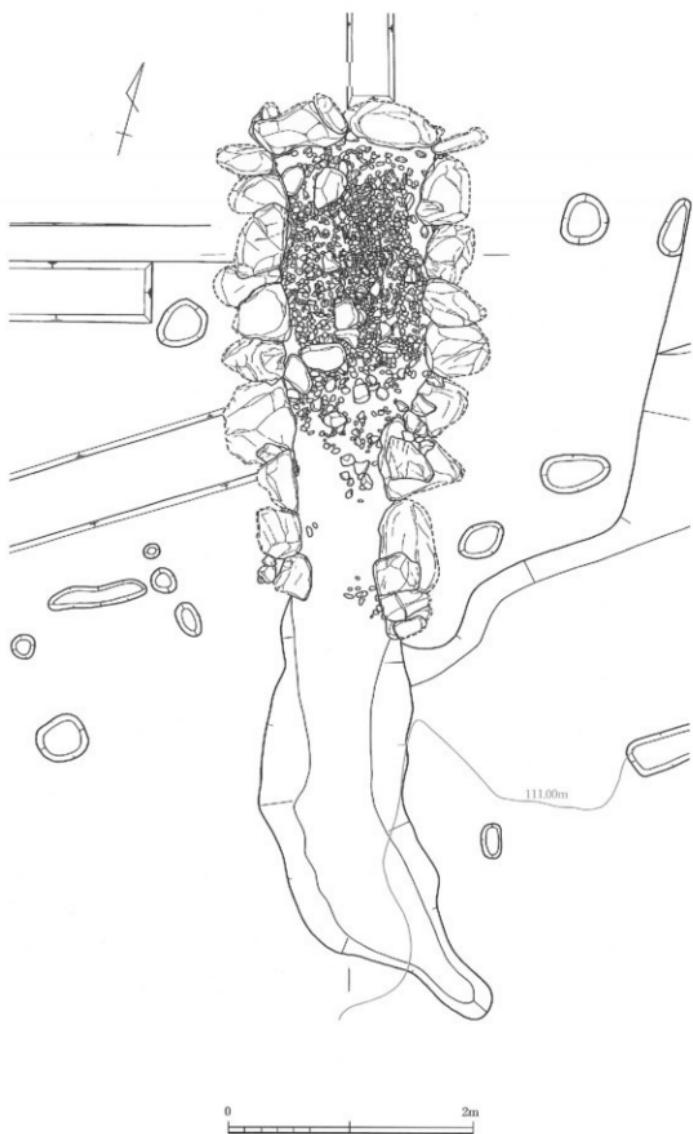
石室は耕作土及び床土を除去した段階で、奥壁および東西の両側壁の一部が露呈し、当古墳が南北方向に主軸をもち、南南東に開口する片袖形の横穴式石室であることが判明した。検出できたのは石室の下半部のみであり、天井石を含めた石室上半部は、削平を受けている。石室が検出できた面は、上層遺構面とほぼ同レベルであったことから、中世末から近世にかけて、削平が行われていたと考えられる。また、石室に充填された流入土には中世前半の遺物が含まれていた。周辺部もふくめて天井石と推定できる石材は検出されていない。

**石室の構造(第59~61図、図版26~27)** 石室の平面形は、やや胴張り傾向をしめす玄室部に短い羨道が付設する。壁体は多くが 2 段目まで遺存しており、部分的に基底石のみ遺存していた。基底石上面の標高は揃っていない。床面では初葬時に設置されたと推定できる敷石、棺台を検出しているが、排水溝などの施設はない。

**奥壁** 奥壁は幅 1.47m、残存高 0.88m であった。基底石は 2 石据えられており、その上に 2 段目の石材が 2 石積まれていた。類例から判断して、さらに 2・3 段石材を積み上げて天井を架構したものと考えられる。主要な石材は 1 段目・2 段目ともに横位に立てて使用されており、安定を欠く。壁面として使用されている面も丸みがあり、特に加工はさ



第58図 S T 1 検出状況図(1/40)



第59図 ST 1 全体図(1/40)

れていないようであった。また、背面も凸状に膨らんで原面を残していた。4石の主要石材の間にできる隙間及び東西の両側壁との隙間には小石材が挿入されていた。小石材は小口を壁面に使用しているものがあった。

西壁 玄室部分は長さ2.76m、羨道部分は長さ1.96mであった。玄室部分の基底部は計5石で構成されている。残存高は最も遺存状況が良好な箇所で、基底石底部から、高さ0.86mを測る。基底石は奥壁側の2石が横位に立てられ、玄門部側の3石は縦位に立てて据えられている。基底石上面のレベルはそろっておらず、2石目の石材はこの上に谷積みされている。2段目の石材の多くは小口面が壁面として使用されていた。羨道の基底石は2石で構成されており、底部の接地面は、玄室部分の基底石接地面より10cm程度高くなっているという特徴がある。羨道部は1段目、2段目ともに小口積みされており、基底石上面の標高もそろっており横目地が通っていた。

東壁 玄室部分は長さ2.5m、羨道部分は長さ1.83mであった。玄室部の基底部は計5石で構成されている。残存高は最も遺存状況が良好な箇所で、基底石底部から、高さ0.95mを測る。基底石は奥壁側の2石が横位に立てられ、玄門部側の3石は縦位に立てて据えられている。基底石上面のレベルは奥壁側3石と玄門側2石で異なっていた。2段目の石材は奥壁側の3石上面にのみ3石遺存していた。2段目の石材の多くは小口面が壁面として使用されていた。羨道部の基底石は3石で構成されており、西側壁と同じく、基底石の接地面は玄室部分より10cm程度高くなっていた。また羨道部の基底石は墓壙の肩にそって置かれていたので、羨門部に近いほど基底石の底部標高が高くなっていた。また2段目の石材は部分的にしか遺存していなかった。

床面 床面は再利面も含めて3面検出している。

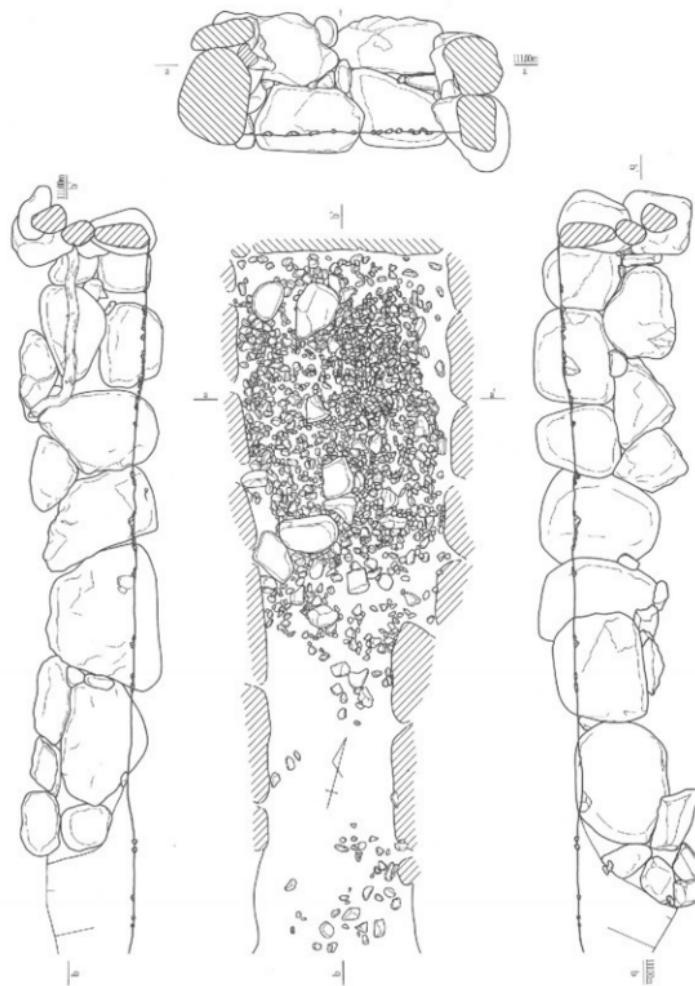
1次面には、敷石と棺台が設けられていた。敷石は3cm～10cm程度の円レキが用いられており、一部羨道にまで及んでいた。棺台は玄室西半部に認められ、長さ2.2m、幅0.7mの範囲で配置されていた。棺台は敷石の上に設置されており、花崗岩の扁平な割石が用いられていた。また、床面上にはこれらの棺台以外にも流入土に含まれている礫が多数みられたが、床面に密着しているもので、かつ上面に平滑な面をもっているものを棺台として区別した。棺台が設けられている範囲の南側には擾乱坑が一部床面にまで達していた。1次面から出土した土器に時期差があることから、1次面には追葬が行われた可能性がある。

2次面は、1次面堆積土上面がそのまま床面として使われていた。

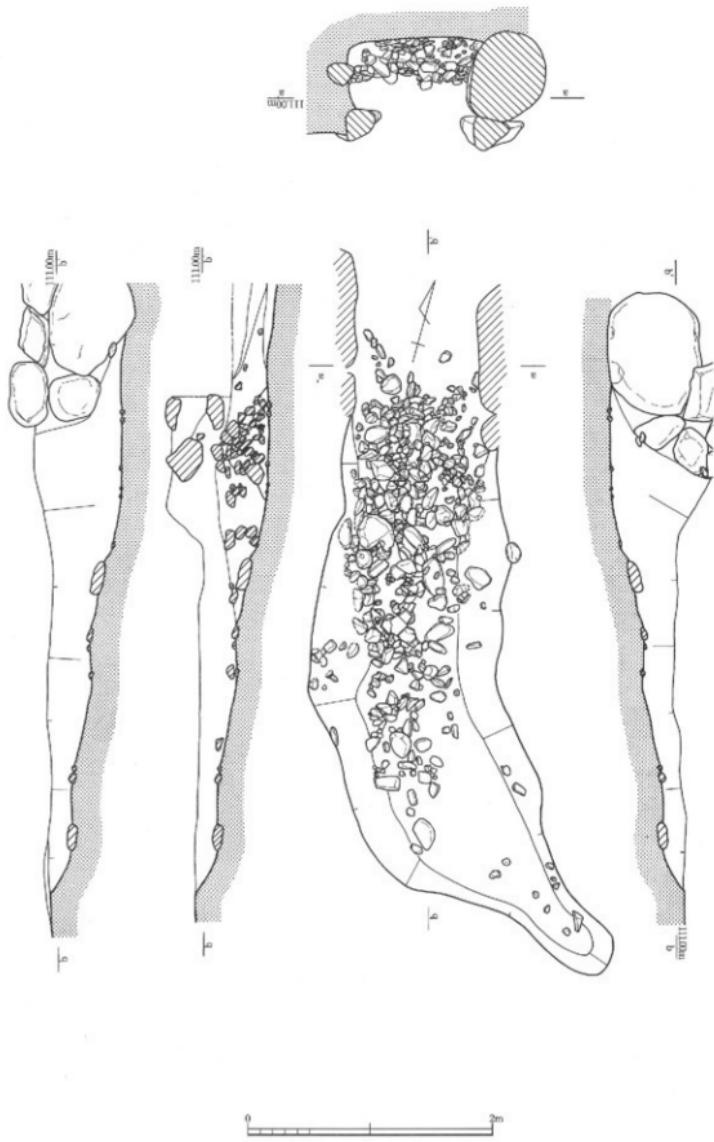
3次面は堆積した土の上に黄色の粘土を貼って、床面が形成されていた。

#### 遺物の出土状況(第62～64図、図版28・29)

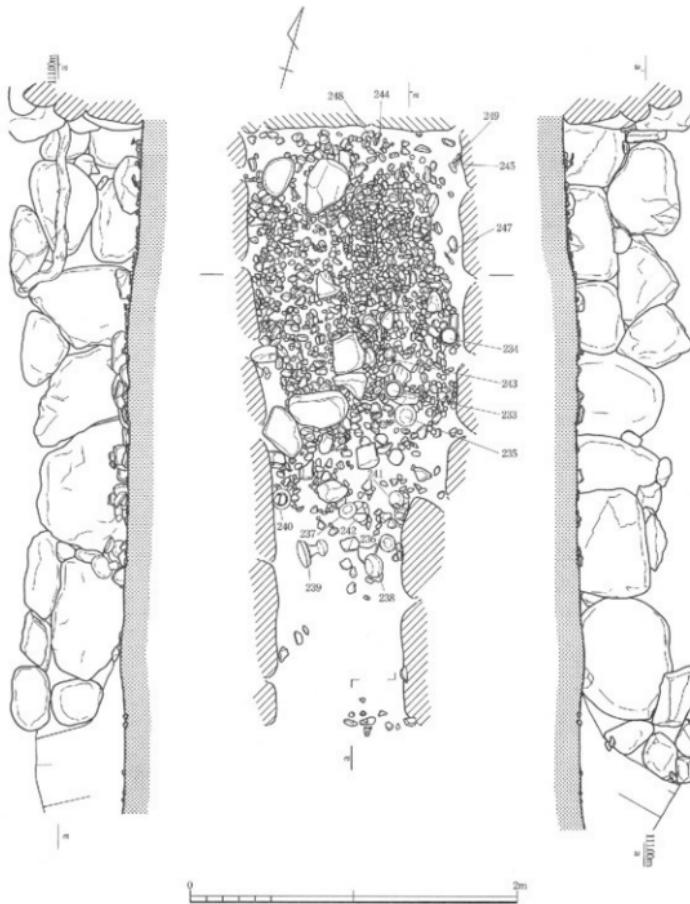
1次面(初葬面)からは、耳環(243)1点、鉄釘(245～251)、須恵器坏身(233～235)3点、杯蓋(236・237)2点、短頸壺(240)、甌(239)、平瓶(238)、土師器の坏C(241・242)が出土した。これらの遺物は埋葬時の2次の移動を除いて、原位置を保っていると判断している。全て



第60図 ST 1 石室展開図(1/40)

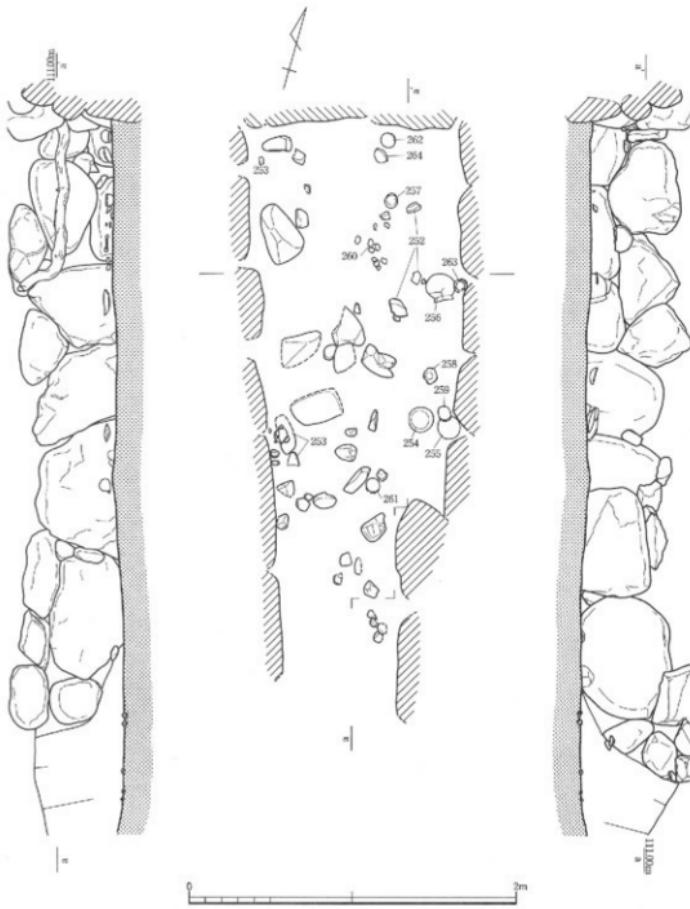


第61図 S T 1 墓道実測図(1/40)



第62図 S T 1・1次面遺物出土状況実測図(1/30)

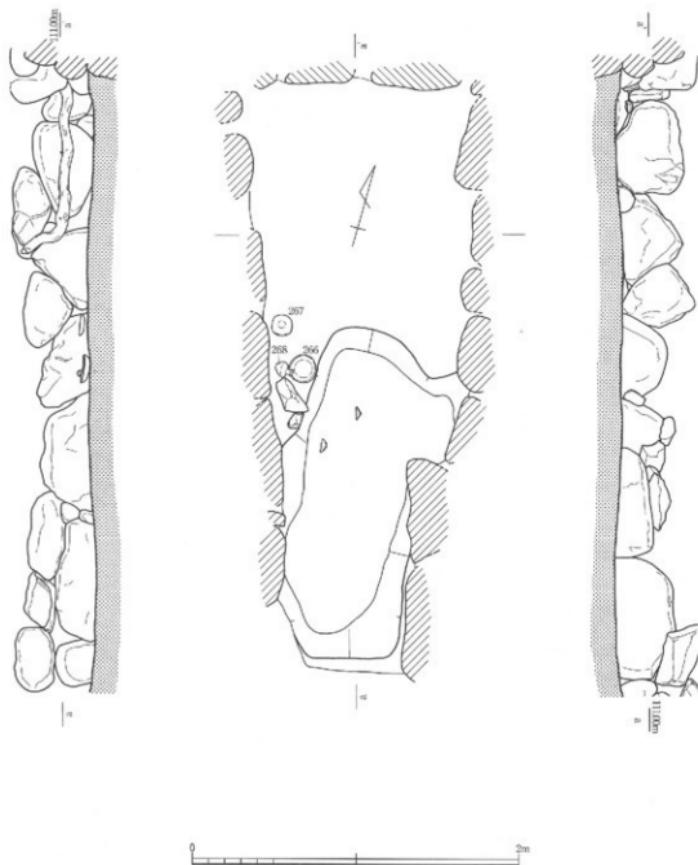
の遺物は棺台が置かれていた石室西半部をさけるように、東半部と羨道から出土した。これらの内、玄室からは須恵器の杯身(233～235)3点、耳環(243)、鉄釘(245～251)が出土した。杯身は2点(233・234)が正位置に、最も南にある1点(235)が伏せた状態で出土した。鉄釘は玄門部付近ではなく、玄室内の東半部でも奥壁側に集中していた。これらのことから木棺は奥壁に詰めた形で設置されていたものと考えられる。羨道部では玄門部付近で集中した遺物が検出した。玄室部の遺物比べて、器種も豊富であり須恵器杯蓋(236・237)、平瓶



第63図 S T 1・2次面遺物出土状況実測図(1/30)

(238)、短頸壺(240)、甌(239)、土師器壺C(241・242)が出土した。平瓶(238)は逆位置に、甌(239)は横倒しになった状況で、杯蓋(236・237)は内面を上向きに、土師器壺C(241・242)は正位置で出土した。

2次面からは土師器壺A(252)、壺C(253・254)2点・鉢A(255)1点・小型壺(257~264)8点・甌(256)1点・須恵器壺蓋(265)1点が出土した。これらの遺物は玄室の東半部から出土した。これらの遺物の内、鉢A(255)は逆さに配置されており、このなかからは鉄釘が出

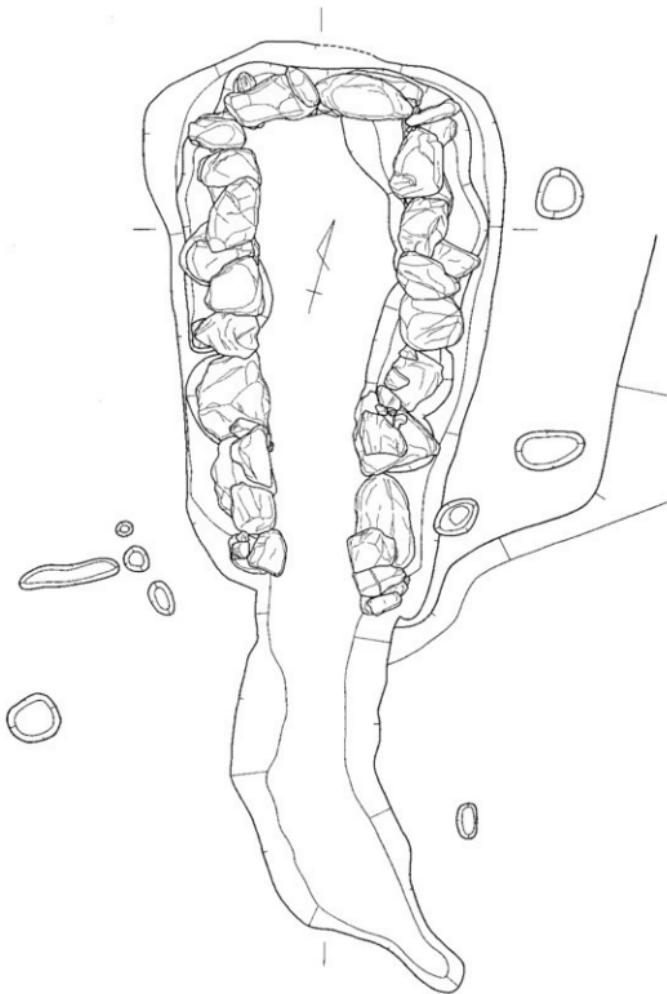


第64図 S T 1・3次面遺物出土状況実測図(1/30)

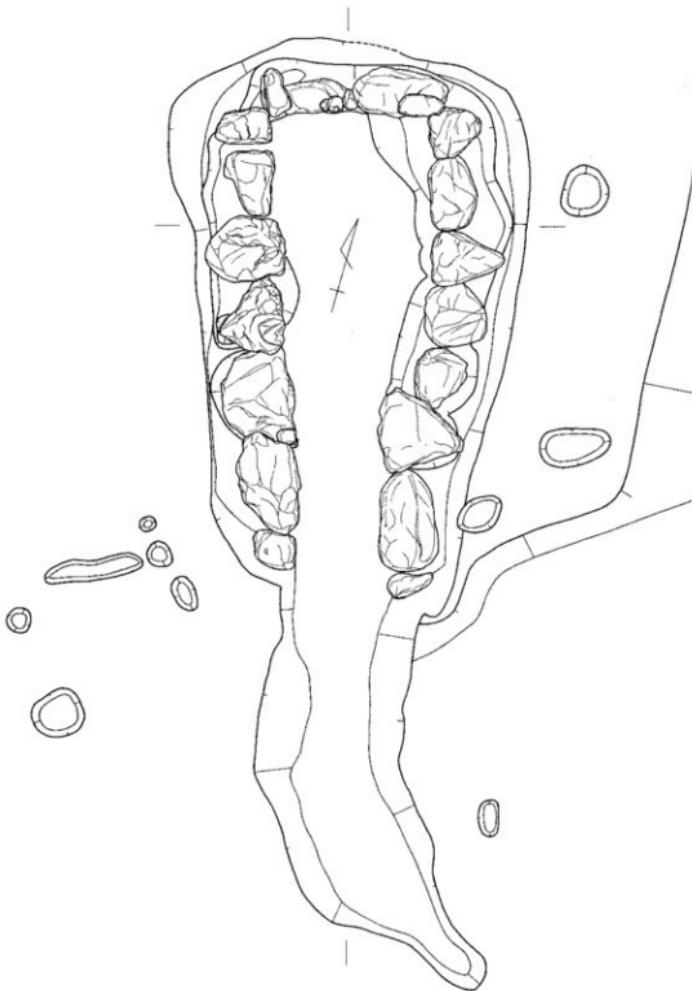
土した。小型壺(257～264)は8点が伏せた状態で出土した。壺(256)は横倒しになった状況で出土した。

3次面からは、須恵器壺M(268)、土師器壺A(266)、土師器碗(267)が出土しており、玄室の西半部で出土した。遺物は全て正位置で置かれており、西側壁中央に寄せられた状況で出土した。

S T 1ではこれらの石室内から出土した遺物に加えて、前庭部からも、須恵器の壺(277)が出土した。

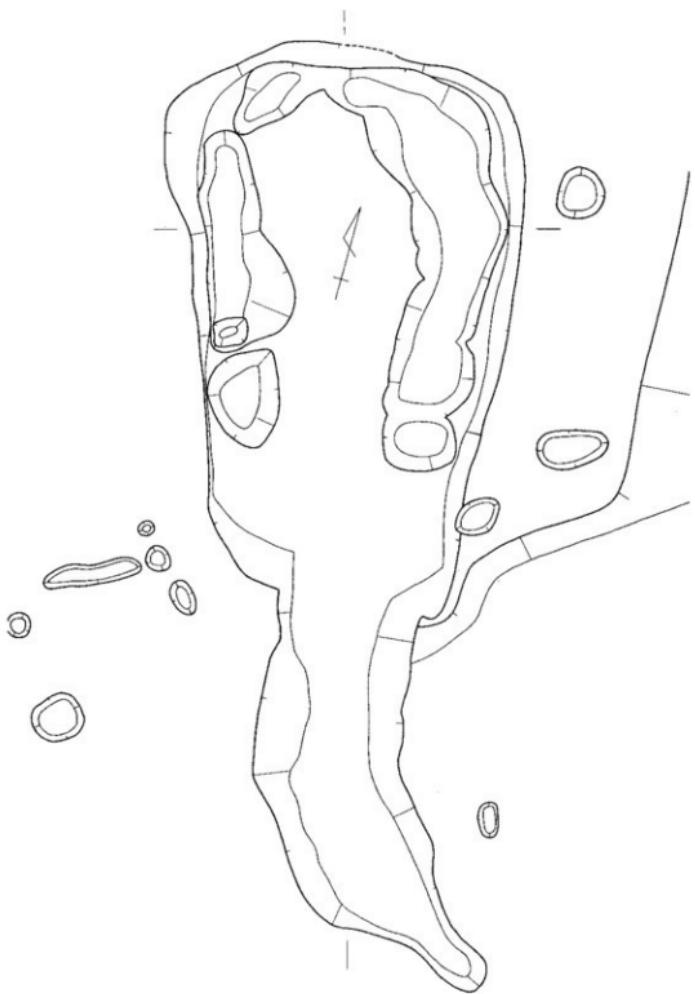


第65図 S T 1 配石状況実測図(1/40)



0 2m

第66図 ST1 基底石配石状況実測図(1/40)



第67図 ST 1 墓室実測図(1/40)

#### C 前庭部(第61図)

前庭部では最大幅1.6m、長さ4.2m、深さ0.7m、の墓道を検出している。また、前庭部には直径10cm～20cmの多量の礫が粘土質の土とともに積み上げられていた。これが閉塞施設になるかどうかは調査で判断できなかった。

#### D 石室掘形(第67図、図版23～25)

S T 1 の石室掘形は楕円形を呈する。また石室掘形には墓道が接続していた。石室掘形の規模は主軸上で南北4.5m、中軸上で東西2.5mを測った。石室掘形の法面は急な勾配を持っており、壁体の背面からの距離はわずかであった。

石室掘形の底部から肩までの比高差は、北側肩が最も高く比高差約0.68mであり、東側肩での比高差は約0.65mを測る。西側肩と底部の比高差は0.65mを測る。南側も肩部を有しているが、中央部には墓道が接続していた。

石室掘形底部の基底石据え付け穴は、すべての基底石にみられるわけではなく、羨道部の据え付け穴は穿たれていなかった。玄室部は全ての基底石に据え付け穴が認められたが、東側壁及び奥壁基底石の東側石材は、一連の据え付けを共有していた。奥壁西側基底石、西壁、奥壁側の3石と羨道側の2石にそれぞれ対応する3カ所の据え付け穴が認められた。据え付け穴は平均して0.15～0.2mであった。

#### E 土層(第68図)

S T 1 の調査では、石室主軸と中軸に沿って畦を設定し、土層の観察および図化を行った。石室掘形埋土、床面置き土、石室内流入土に大別できる。

**石室掘形埋土** ⑩から⑯は、石室掘形埋土である。石室掘形埋土は粘土質のものと砂質のものが交互に裏込めされていた。各層は石室掘形の外側から内側に向けて下方に傾斜しており、外側から土が入れられた状況が観察できた。

**置土** S T 1 では基盤面に置き土をして床面としていた。1次面(初葬面)に対応する置土は、⑩である。なお、2次面までには⑪・⑫が堆積しており、⑬上面がそのまま床面として利用されていた。また、3次面までは⑭・⑮が堆積しており、⑯の上面に⑩の粘土を貼り、3次面を形成していた。

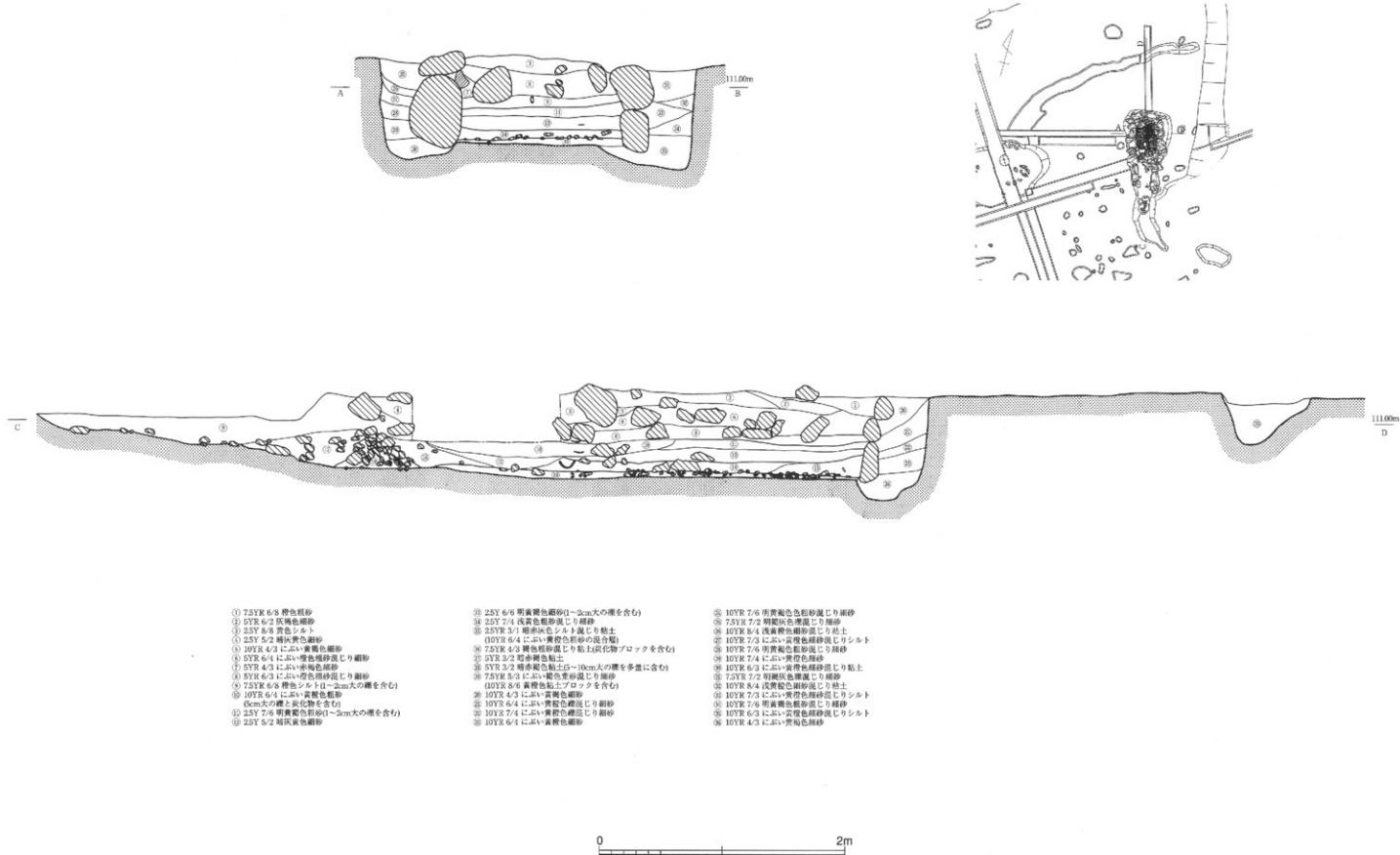
**石室内流入土** ①～⑩・⑯は、石室内に流入した堆積土である。これらは石室崩壊前の堆積土、石室崩壊後の堆積土および堆積した土の上面から穿たれた攪乱坑の埋土の3層に大別できる。①～⑧は、崩壊した石室壁体が落下した面を構成する層であり、この層より下層は石室崩壊前の堆積土と考えることができる。

#### F 出土遺物

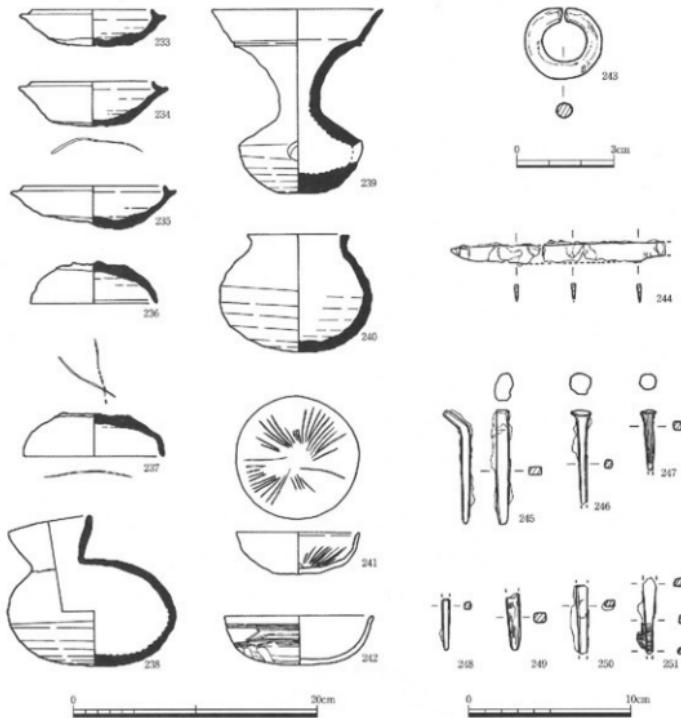
1次面(第69図、図版38・39) 耳環(243)は外径2.2cm内径が1.35cm重量8.6gである。中空であり、銅地に金箔を巻いており、内側に巻皺が認められる。

刀子(244)は刃部の幅が1.6cmで長さが13cm程度になると考えられる。

鉄釘(245～251)は完存しているものは少ないが、7～8cmの長さがあったものと考えら



第68図 S-T 1 土層断面実測図(1/30)



第69図 S T 1・1次面出土遺物実測図

れる。断面はほぼ方形であり、頭部は方形であった。木目の遺存状況は悪いが、縦方向のもの若しくは横方向のものが認められる。

須恵器杯身(233~235)は3点出土した。(235)は口径11.4cm、器高3.5cmであり、口縁部は受け部から0.3cm突出している。底部には回転ヘラケズリが認められる。(233)は口径9.6cm、器高3.0cmである。口縁部は受け部から0.3cm突出しているのみである。底部はヘラ切り未調整である。内面には一定方向のナデが認められる。(234)は口径9.8cm、器高3.6cmであり、底部はヘラ切り未調整である。内面には一定方向のナデが認められる。底部にヘラ記号が認められる。(235)はT K 209型式、(233・234)は217型式a類(杯H)に相当する。<sup>238</sup>

須恵器坏蓋(236・237)は2点出土した。口径11.3と10.2cm、器高3.5と3.4cmである。天井部はヘラ切り未調整である。(237)は底部に一定方向のナデを施し、天井部にヘラ記号が認められる。

須恵器甌(239)は口径13.8cm、器高15cmである。体部の小型化が進んだものであり、底

部には回転ヘラケズリが認められる。

須恵器平瓶(238)は口径6.6cm、器高12.5cmである。やや内湾気味に外上方にのびる頸部に楕円形の体部を有する。底部は回転ヘラケズリ、肩部から内面にかけては回転ナデ調整を施している。

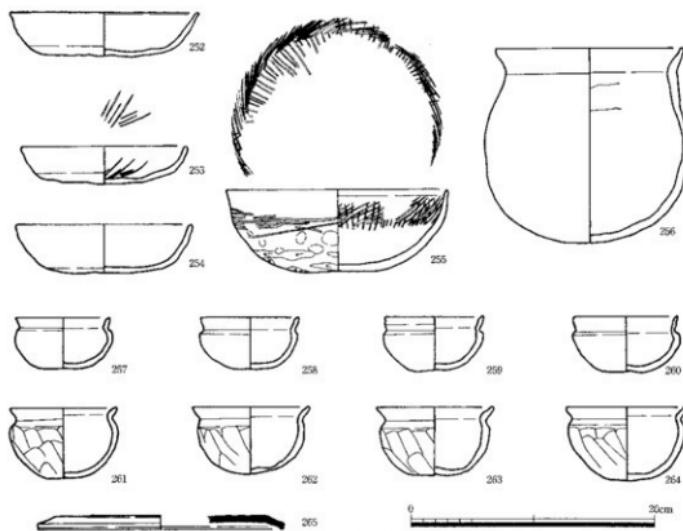
須恵器短頸壺(240)は口径8.2cm、器高9.55cmである。

土師器壺C(241・242)は口径10cm、器高3.45cmであり、丸底に下半部が内湾し、上半部が外反する口縁部を有する。端部には内傾する面を有する。口縁部上半には強いヨコナデ<sup>23</sup>が認められるがヘラ磨きは観察できなかった。内面には1段の放射状暗文が認められる。<sup>23</sup>

1次面の須恵器群はTK 209型式期の後半からTK 217型式期の前半の幅で考えることができ、飛鳥I式の範疇で考えられる土器群である。須恵器で見られる時期幅は1次面での追葬行為によるものである可能性がある。

2次面(第70図、図版40) 土師器壺C(252・254)は口径が14.6と15.4cm、器高が3.1と3.9cmであり、扁平化が進んでいる。平底に内湾する口縁部を有する。口縁端部は内傾する面を有する。底部にはユビオサエの跡が観察でき、口縁部外面から内面はなで調整で仕上げており、暗文は(253)で観察できた。<sup>24</sup>

土師器鉢(255)は口径が約18.2cm、器高が6.7cmであり、やや上げ底気味の底部に内湾する口縁部を有する。口縁部外面にはその上半部で横方向のヘラ磨きが認められ、底部には指ナデが認められる。内面に2段の放射状の暗文をもつが、螺旋状暗文の状況は確認できていない。



第70図 S T 1・2次面出土遺物実測図

土師器壺(256)は口径15.3cm、器高5.8cmである。口縁部端部は上方につまみ上げられており、肩部の張りは比較的小さい。遺存状況が悪いため、調整は観察できなかった。

土師器小型壺は口縁部がほぼ直立するもの(257～260)と口縁部が外反するもの(261～264)の2種類が認められる。前者(257～260)は口径7.6～8.4cmであり、器高が4.2～4.6cmである。口縁部はヨコナデされており、薄く仕上げられている。そのほかの部分もナデ調整が行われており、器壁は平滑に仕上げられていた。後者(261～264)は口径が8.5cm～9cmであり、口縁部に強いヨコナデが行われており、内面はナデ、外面は板ナデによって仕上げられていた。

須恵器壺蓋(265)は口径19.8cmに復元できる。田辯編年のMT21型式に相当する。<sup>註4</sup>

2次面の出土遺物は時期を決定する遺物に乏しいが、飛鳥VI式～飛鳥V式の範疇で考えている。

### 3次面(第71図、図版40)

土師器杯A(266)は口径17cm、器高3.3cmである。器高は低く、平底で、下半部が内弯し、上半部が外反する口縁部を有する。端部は若干つまみあげられている。

土師器碗(267)は口径12.8cm、器高3.4cmである。丸底で内弯する口縁部を有する。口縁部上半部にヨコナデが認められる他はナデ調整されている。

須恵器壺M(268)は口径3.9cm、器高9.6cmであり、底部に高台を有している。底部は回転ヘラケズリ、肩部から内面にかけては回転ナデ調整が観察できる。<sup>註5</sup>

遺物は土師器塊の暗文が完全に消滅していることと、須恵器壺Mが出現していることから、平城V式以降の範疇で理解できるものと考えている。

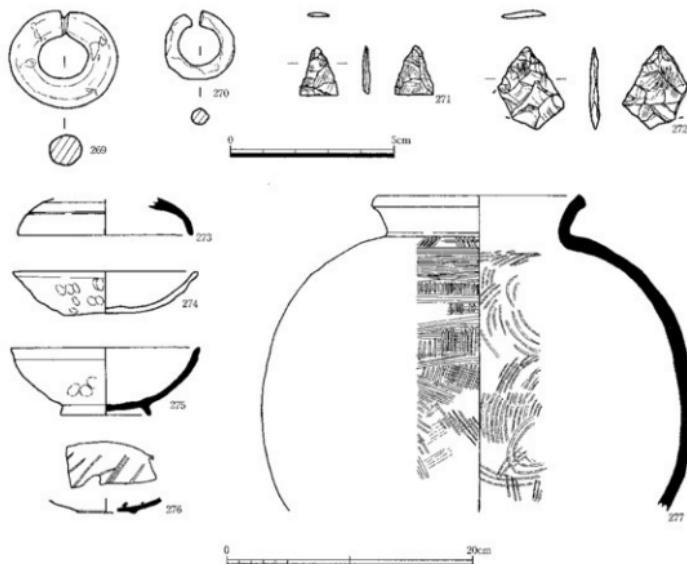
前庭部出土遺物(第72図)　須恵器壺(277)は口径16.2cm、胴部最大径25cm、残存高26cmである。口縁部には回転ナデ、胴部外面には平行タタキ、体部内面には青海波文が認められた。

### 攪乱坑出土遺物(第72図、図版40)

S T 1 には石室内に攪乱坑が存在しており、石縫(271・272)、耳環(269・270)、土師器壺(274)、須恵器壺蓋(273)、瓦器塊(275・276)等の遺物が出土した。

### F 小結

以上述べてきたようにS T 1 の内部施設は左片袖形の横穴式石室であり、主軸上で玄室長2.36m、中軸上で玄室幅1.3m、玄門部で羨道幅0.84m、主軸上で羨道長0.88mであり、有袖形の横穴式石室としては非常に小型である。また羨道には長さ3.4mの墓道がともなう。



第72図 ST 1 前庭部及び擾乱坑出土遺物実測図

横穴式石室からは、TK209型式期～TK217型式期にかけての飛鳥I式土器が1次面から出土しており、この型式幅は追葬による可能性がある。7世紀前半に製造されたと考えられる。

またST 1が古墳時代終焉以降に2度にわたる再利用が行われていることは注目される。2次面に関しては飛鳥IV～V式と考えている。出土遺物は土師器が主体であり、須恵器は壺蓋の小片を一片伴うのみであった。近年畿内においても、7世紀後半段階から8世紀にかけて石室を継続使用している例が報告されており、古墳時代終焉以降の追葬と評価されている。<sup>註10</sup>しかし、これらの例では副葬品に須恵器の壺が主に使われており、当該古墳出土の土器の組成とは一致しない。ST 1の下層再利用面はむしろ律令祭祀にともなうと評価されている遺構での器種の組成と近似している。

3次面は平城V式以降に相当すると考えており、土師器壺A(266)・壺(267)、須恵器壺M(268)が出土した。これらの遺物は古代墳墓のなかでも火葬墓より、むしろ9世紀以降数が増加する木棺を使用したものと共通する。

墳丘は完全に削平されていた。

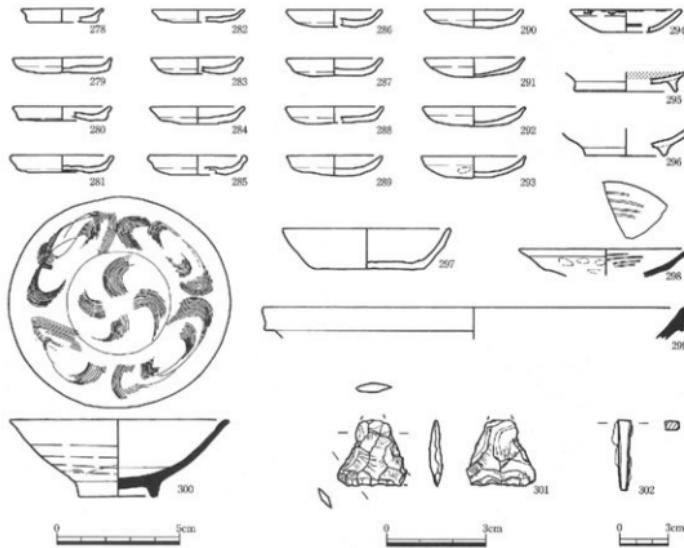
床面は3面検出でき、1次面(初葬面)が7世紀初頭、2次面が8世紀、3次面が9世紀である。なおST 1は大日寺古墳と命名した。

## 6 下層包含層

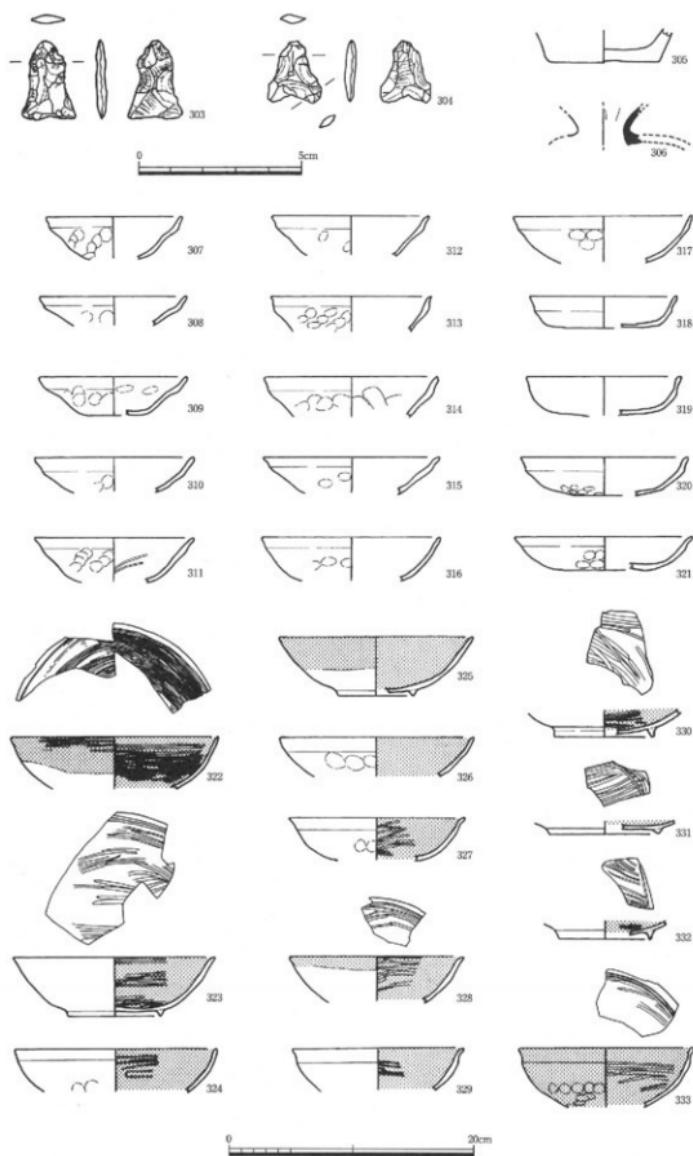
下層包含層の出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦器、瓦質土器が出土した。量的には9世紀代～15世紀のものが中心であった。また、これらに加えて6世紀代の須恵器も数点出土した。しかし、出土する遺物は地区によってかなり差違が認められた。以下に、出土した遺物が近似した様相をしめす地区をまとめ、これらから出土した遺物の特徴について述べる。

c 4～6、d 4～6、e 4～6、f 3～6、g 4～6区(第73図、図版41) 石鎚(301)、黒色土器A類塊(295～296)、瓦器塊(298)、東播磨系須恵鉢鉢(299)、土師質皿(278～294・297)・土釜、白磁碗(300)、鉄釘(302)が出土した。これらは12世紀から13世紀にかけての遺物であり、下層遺構面で検出した中世墓群と同一時期幅の遺物である。これらの地区において下層遺構面からは柱穴群が検出されている。柱穴からは遺物は出土しなかったが、下層包含層出土の遺物が12世紀から13世紀を中心にしているところから、これらの柱穴群は当該時期に相当すると考えられる。しかし、遺物の出土量は相対的に希薄であった。

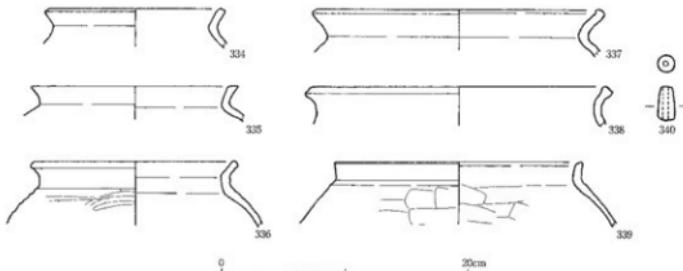
f 7～I 7区(第74・75図、図版41・42) 石鎚(303・304)、弥生壺(305)、土師器壺(307～321)・壺(334～339)、須恵器平瓶(306)、黒色土器A類塊(322～332)・B類塊(333)、土錐(340)などの9世紀から10世紀にかけての遺物が出土した。これらの地区では土坑などの古代の遺構も検出されており、包含層出土の遺物と時期が一致する。また柱穴群が検出されているが、当該時期のものと考えられる。



第73図 下層包含層出土遺物実測図①



第74図 下層包含層出土遺物実測図②



第75図 下層包含層出土遺物実測図③

j 7～m 7区 包含層の大部分が削平されており、遺物もほとんど出土しなかった。

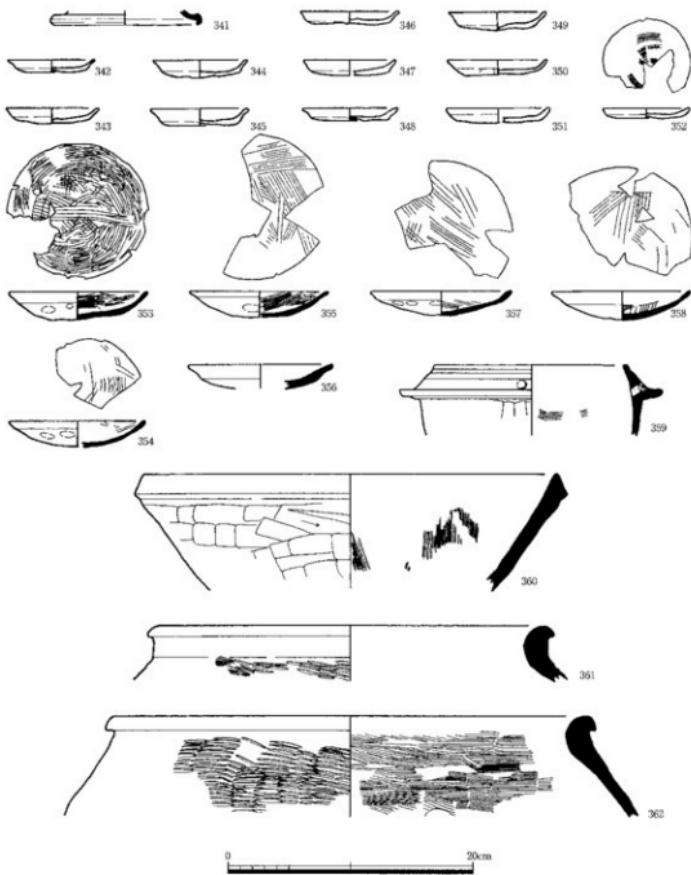
n 7～q 7区(第76図、図版42) 須恵器高杯(341)、土師質皿(342～352)、瓦質皿(353～358)、壺(361・362)、擂鉢(360)、土釜(359)が出土した。これらは、主に14世紀後半を中心とする時期の遺物である。上層包含層出土の遺物と時期的には近接しているが、壺や擂鉢の形態において、古い様相が認められる。

#### 6.まとめ

大日寺遺跡では、弥生時代～近世にいたる各時期の遺構、遺物が出土しており、断続的に土地利用がなされていた状況が認められた。しかし、各時期によって、遺跡の中心となる箇所や土地利用のありかたは異なっており、また、遺構が形成されない断絶期も認められる。ここでは、当該調査の調査成果を総括し、また既往の調査結果も加味しながら、大日寺遺跡における遺構群の変遷についてまとめた。

まず当該調査区が現在のように平坦な地形となったのは、近世に石垣を造成した時点とみられる。それ以前は、東西に尾根状地形の稜線が形成されていたものと考えられる。調査区北部で検出した石垣の南側では近世の耕作土を除いて基本的な堆積が認められず、最も高い位置で地山を検出したことから、本来的にこの位置に稜線がはしっていたことが伺える。また、j 7～n 7区にかけては、中世の包含層がほとんど削平され、地山が高い位置から検出されていることから、やや地形的に盛り上がっていったことが伺える。

弥生時代の遺構は、遺跡の西部に集中している。今回の調査では弥生時代の明確な遺構は検出されなかったが、遺物はn 7～q 7区で出土した。これらは、弥生時代の遺構、包含層が15世紀代の遺構や整地によって削平された結果、15世紀代の遺構や包含層に混入したものと思われる。n 7～q 7区に隣接した箇所に位置するDN T00-4次調査地点からは弥生時代の方形に巡る溝が検出されており、また、さらに東の調査地点(DN T96-1)からも弥生時代の溝が検出されている。大日寺遺跡における弥生時代の集落域の中心を想定すれば、遺跡の西部がその範囲となろう。



第76図 下層包含層出土遺物実測図④

弥生時代に續く、古墳時代前・中期の構造、遺物は今のところ検出されておらず、断絶期になっている。

古墳時代後期では、当該遺跡は墓域として利用されていたようであり、古墳を一基検出している。ST1は7世紀初頭に築造されたものである。左片袖形の横穴式石室であり、主軸上で玄室長2.36m、中軸上で玄室幅1.3m、玄門部で羨道幅0.84m、主軸上で羨道長0.88mであり、有袖形の横穴式石室としては非常に小型である。しかし、当該遺跡からは、6世紀後半から7世紀初頭にかけての須恵器がST1から離れた箇所からも出土した。このような状況と小型の古墳が単独で存在することがまれなことを勘案すると、未調査の区

域や後の時代に著しく整地された地点に同様の古墳が存在していた可能性が指摘できる。古墳時代後期では墓域と居住域は一定の距離をもって存在している場合が常であり、周辺の喜多町遺跡からは当該時期の住居跡が検出されているので、これがその候補になろう。

古代では、7世紀～9世紀にかけて古墳が再利用されているが、その他には、目立った遺構、遺物の検出はない。

古代でも10世紀代になると当該調査区域でのf 7～i 7区にかけて、遺物が集中して出土するようになり、廃棄土坑も1基検出している。またこの地区から検出した柱穴群も当該時期のものと考えられる。

中世前半期には、古代後期に引き続き、遺構、遺物はn 7～q 7区に集中するようである。中世墓が4基検出されているが、これは屋敷墓と位置づけることが可能である。屋敷墓については、考察で詳述しているが、当該時期では中世の建物跡を構成すると考えられる柱穴群と中世墓が近接した位置から検出されている。中世墓からは中国産の貿易陶磁が出土しており、在地産の和泉型瓦器塊とは半世紀近い年代差をもっているものがある。

中世後半期には集落の中心は再び、当該遺跡西南部に集中するようになる。遺構、遺物はn 7～q 7区に集中して検出されている。当該調査区の南に隣接するDNT00-1次調査、DNT00-4次調査でも中世の遺構、遺物が検出されており、特にDNT00-1次調査では寺院跡と考えられる遺構が検出されている。中世後半期では、この寺院跡を中心として集落が形成されていたものと考えられる。

近世になると当該遺跡は大規模な整地が行われたようで、検出した石垣もこの時期に築かれたものと考えられる。石垣築造時には、かなりの掘削が行われたことを伺うことができ、石垣の裏込め土やこの際に造成された平坦面に、弥生土器、貿易陶磁、瓦器等が含まれていた。裏込め土に比較的多くの貿易陶磁が含まれていたことから、中世墓が破壊された可能性を示唆することができる。

註1 土師質皿の年代については、土山健史氏の土師質皿の分類、編年を参考とした。土山氏は堺環濠都市集落から出土する15世紀以降の土器群を編年するなかで、土師質皿の変遷についても言及されている。土山氏によると、土師質皿は白色系の皿と赤褐色系の皿に分類されており、当該遺跡で多く出土している赤褐色系の皿に関しては、以下のような変遷過程が述べられている。

14世紀後半：口径7.8cm・器高1.5cmを測る。内面は刷毛調整の後、丁寧なナデ調整を行い、刷毛調整は蜘蛛の巣状のものが認められる。

15世紀代：口径7.3前後を測り、器壁が薄くなり、口縁部の立ち上がりは短く、内面のナデ調整は省略され、ハケ調整は蜘蛛の巣状のものから、15世紀後半にはしだいに直線的な方向になる。

16世紀代：口径6.5cm・中葉から後半で6.0cm、末葉で5.5cmなる。16世紀後半以降では器壁が厚くなる傾向がある。また、調整に関しては、内面刷毛の粗雑化がすすみ、一方向のみとなる。

土山建史1989「堺環濠都市における15、16世紀の在地土器」『中近世土器の基礎研究V』

なお、当該遺跡で検出されている土師質皿は内面の刷毛の粗雑化の傾向が早い段階から認められるようであるが、共伴している瓦質土器の型式から判断して、法量の変化に関しては、土山氏が指摘したものと同様の傾向が認めらるようである。

註2 瓦質皿の分類は尾谷雅彦氏の分類 編年案に従った。尾谷氏は、瓦質皿の法量が次第に小型化、扁平化している点に注目し、瓦質皿を法量により分類している(第77図)。

尾谷雅彦1994「天野山金剛寺出土の土釜埋納土器について」『天野山金剛寺遺跡』

註3 瓦質擂鉢の年代については、鎌柄俊夫氏の分類・編年案に従っている。鎌柄氏は擂鉢を以下のように3群5型式に分類している。

14世紀末葉(I - 1群)：口縁部を上下に発達させたもの。

15世紀初頭(I - 2群)：端面の横ナデが強く外端部を短かな縁帯状にし、上端部を尖り気味につまみあげるもの。

15世紀前葉から末葉(II群)：口縁部断面が三角形を呈し、体部は下半部が丸みを帯び、内縁気味に立ち上がり、傾きも急なもの。口縁外端部の稜が鋭いII - 1群(15世紀前葉から



第77図 尾谷雅彦による瓦質皿の分類と編年(1/4)

中葉)と上端部が丸みを帯びるII-2群(15世紀後半から末葉)に細分されている。

16世紀前葉から中葉(Ⅲ群)：口縁部が丸みを帯び、端部は外端部をほとんど意識しなくなり、外面の削りも多くの失われる段階。

鈴柄俊夫1989「大阪南部の瓦質土器生産について(1)」『大阪文化財論集』

鈴柄俊夫1989「大阪南部の瓦質土器生産について(2)」『中近世土器の基礎研究V』

註4 須恵器の型式に関しては下記の文献を参照した。

田辺昭三1966『陶邑古窯跡群I』

註5 註1と同じ

註6 瓦質甕の年代については、鈴柄氏の分類に従っている。鈴柄氏は瓦質甕を以下のように口縁部の形態により3群8型式に分類している。

13世紀後葉(I-1段階)：口縁部の断面が「T」字状を呈するもの。

14世紀初頭から前葉(1-2段階)：口縁端部が方形化するもの。

14世紀中葉(1-3段階)：頸部を含めた形態が「U」字状で端部に面取りが行われているもの。

14世紀後半(II-1段階)：口縁端部が尖り気味、もしくは丸くおさめられているもの。

15世紀前半(II-2段階)：頸部が肥厚し短く外反するもの。

15世紀中葉(II-3段階)：頸部が失われ口縁部は肥厚した部分と一部外折する部分だけとなるもの。

15世紀末から16世紀初頭(III-1段階)：口縁部が玉縁状を呈するもの。

16世紀中葉(III-2段階)：玉縁が薄くなり方形化するもの。

鈴柄俊夫1987「中世前期における大阪南部の甕生産」『考古学と地域文化』同志社大学

鈴柄俊夫1989「大阪南部の瓦質土器生産について(1)」『大阪文化財論集』

註7 註1と同じ

註8 註3と同じ

註9 註1と同じ

註10 註2と同じ

註11 註1と同じ

註12 註2と同じ

註13 註1と同じ

註14 瓦質土釜の年代については、菅原正明氏と鈴柄俊夫氏の分類・編年案を参考とした。菅原氏の分類によれば当該遺跡から出土している土釜はE型式となる。E型式は13世紀後葉～15世紀初頭に消滅するものであり、口縁部が内傾するものから直立するものへ変化するところが指摘されている。鈴柄氏の分類によればB群もしくはC群となる。各群はI類からV類に分類されている。

14世紀前葉(I群)：土師質土釜の形態を残しているもので、口縁端部の折り返しの残るもの

の。

14世紀後半(Ⅱ群)：体部が緩やかに内彎し、鉢は上縁ぎみに短い鉢がつき鉢端面は断面が隅丸方形をしており、鉢が指押さえと横ナデによって接合され、胴部外面には右下方向の削りが施されているもの。

15世紀初頭(Ⅲ群)：口縁部が直線的に内傾し、口縁部端部や鉢端部の端部の丸みは失われ、鉢の下面中位から横方向のヘラ削りが施されているもの。

15世紀中葉(Ⅳ類)：口縁部外面の段が低く、凹線に変化しているもの。

15世紀後半(Ⅴ類)：口縁が直立するもので、鉢部が水平方向に付けられるもの。

菅原正明1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

鶴柄俊夫1989「大阪南部の瓦質土器生産について(1)」「大阪文化財論集」

鶴柄俊夫1989「大阪南部の瓦質土器生産について(2)」「中近世土器の基礎研究V」

註15 註14に同じ

註16 註1に同じ

註17 註2に同じ

註18 註14に同じ

註19 註1に同じ

註20 瓦器塊は尾上実氏の分類・編年案に従った。尾上氏が設定した型式と資料の照合にあたっては法量・暗文・高台の形態を重視した。なお、年代観については森島康雄氏のものにしたがっている。

尾上実1983「南河内の瓦器」『藤澤和夫先生古稀記念古文化論集』

森島康雄1992「畿内産瓦器塊の併行関係の層年代」『大和の中世土器』Ⅱ

註21 土師器塊の分類・編年に関しては奈良国立文化財研究所の手法の分類、上田睦氏の形態に関する分類・編年案にしたがった。

手法 a 手法 ヘラ削りを行わず、成形時の凹凸をのこすもの。

b 手法 底部のみヘラ削りを行うもの。

c 手法 底部から口縁部にかけてヘラ削りを行うもの

0 手法 ヘラ磨きを行わないもの。

2 手法 口縁部外面にのみヘラ磨きを行うもの。

3 手法 底部にヘラ磨きを行うもの。

3 手法 全面にヘラ磨きを行うもの。

口縁部形態 a形態 口縁部外面に面を持たせ内側に屈曲するもの。

b形態 口縁部が逆「く」の字状口縁

c形態 口縁部が外反するもの。

d形態 内弯する。

- 底部  
1類 上げ底気味になったもの  
2類 平底に近いもの  
3類 丸底に近いもの

奈良国立文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告書Ⅷ』

上田睦1993「北岡遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』

註22 註21と同じ

註23 土師器甕の分類案に関しては上田氏の分類案に従った。

- 口縁部  
A形態 外反するもの  
B形態 直立するもの  
C形態 斜め上方に開くもの  
D形態 内湾するもの

- 口縁端部内面  
a類 段をなすもの  
b類 丸く收めるもの  
c類 端部に面をなすもの

- 口縁端部外面  
1類 端部外面をつまみ上げるもの。  
2類 端部内面をつまみ上げるもの  
3類 つまみあげないもの。

また胴部に関しては、胴部の最大径が上部にくるもの、最大径が中部にくるもの、最大径が下部にくるもの

上田睦1993「北岡遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』

註24 古代の土器の器種名については、下記の文献従った。

奈良国立文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告書Ⅷ』

註25 黒色土器の年代に関しては下記の文献を参照した。

- 森 隆 1990、1991「西日本の黒色土器生産(上)、(中)、(下)」『考古学研究』第37巻第2号、  
3号、4号

註26 註25と同じ

註27 註21と同じ

註28 貿易陶磁器の分類・編年は横田賢次朗、森田勉氏の分類を使用した。

- 横田賢次朗・森田勉1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4

註29 註28と同じ

註30 註20と同じ

註31 註1と同じ

註32 註20と同じ

註33 註28と同じ

- 註34 註1と同じ
- 註35 註28と同じ
- 註36 註20と同じ
- 註37 註1と同じ
- 註38 田辺編年のTK217型式に関しては、原典に基づき、a類、b類、c類と細分した。  
田辺昭三1966『陶邑古窯跡群Ⅰ』
- 註39 註24と同じ
- 註40 註24と同じ
- 註41 註24と同じ
- 註42 註24と同じ
- 註43 渡邊邦雄 1999「8・9世紀の古墳祭祀(上)(下)」『古文文化』vol.51-11、12

## 第3章 考察

### 第1節 横穴式石室について

～南河内地域の横穴式石室～

太田 宏明

#### 1はじめに

本稿は当該遺跡で検出した横穴式石室を地域のなかで位置づけ、歴史的な評価をあたえるために、南河内地域を対象として、横穴式石室の分析・検討を行った。分析にあたっては、南河内地域の横穴式石室の分布、地域色、階層性、変遷過程を検討し、南河内地域の横穴式石室全体が持つ傾向を把握し、この傾向のなかで、当該遺跡において検出された横穴式石室の歴史的位置づけを行った。

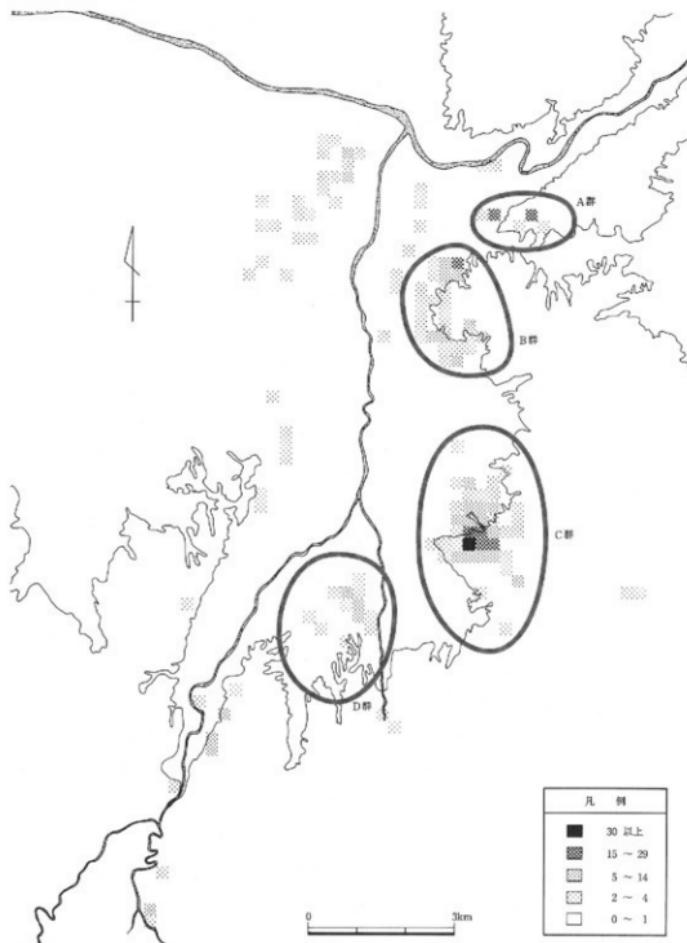
なお、当該遺跡で検出された横穴式石室は畿内型石室の範疇で考えることができ、本稿の分析で採り上げた南河内地域の横穴式石室は大部分が畿内型石室である。畿内型石室に関する既往の研究では、森下浩行氏(森下1986)、山崎信二氏(山崎1986)、土生田純之氏(土生田1991、1994)によって概念規定が行われており、白石太一郎氏(白石1962、1966、1995)、河上邦彦氏(河上1979、1988、1992)、森下氏(森下1987、1993)富山直人氏(富山1994)、増田一裕氏(増田1996)、坂靖氏(坂1999)によって編年案が提示されている。これらの研究のなかで、畿内型石室は時期差、地域差、階層差などにより形を変えていくことが提示されてきた。また、資料に属性分析を行うことで、時期差・地域性・階層性をよみとる事を試みた分析も行われている(太田1999)。本稿で行う分析では、属性分析の成果を主に用いている。

#### 2 分布と地域色

本章では、南河内地域の後期古墳の分布と地域色について検討した。当該地域は地形的にも完結性を有する地域であり、東は葛城山系・金剛山系により、西は羽曳野丘陵・小山田丘陵により、南は和泉葛城山系により、北は大和川により他地域と区画されている。

第78図は当該地域において50m四方の区割りを行い、各区内に存在する古墳の数量をスクリーントーンの種類によって区別して示したものである。<sup>註1</sup>当該地域の後期古墳は石川流域、特にその東岸に集中している。また、後期古墳が大きくなれば4つの群にわかれて分布している状況がよみとれる。これらを北から南へ追っていくと、最も北にある一群(A群)は、石川と大和川合流地点の東南に位置する明神山系に所在し、芝山古墳群、明神山古墳群、田辺古墳群で構成される。次に、石川東岸においては、石川・千早川の分岐点までは、北に譽田山古墳群、五十村古墳群、飛鳥千塚古墳群、駒ヶ谷古墳群、大谷古墳群で構成される一群(B群)があり、南に一須賀古墳群、平石古墳群、加納古墳群、白木古墳群

で構成される一群(C群)がある。石川・千早川分岐点の南には寛弘寺古墳群、西大寺山古墳群、板持古墳群、神山丑神古墳群で構成される一群(D群)がある。これらより以南では嶽山古墳群、田中古墳群、三日市古墳群が石川東岸に点在している。A～Dの各群は、複数の群集墳で構成される群集墳群と考えられ、A～Cの各群には、6世紀代の古墳を中心とする群集墳と7世紀代の古墳を中心とする群集墳の双方が含まれ、またD群では古式群集墳も含んでいる。



第78図 南河内地区における古墳分布密度(1/100)

### 3 平面形態の分析

畿内型石室の平面形態は、地域性が反映されやすいことがこれまでにも述べられている。<sup>23)</sup>このような、地域色は、特定地域に成層的に築かれた首長墓の系列や群集墳を単位として現れている場合が多い。ここでは、南河内地域の横穴式石室の平面形に地域・群集墳群・群集墳といった様々なレベルでの地域性がどのような影響を持つのか分析した。分析に際しては、平面形を指指数化した玄室幅指数を使用した。

南河内全体での、平面形態を玄室幅指数を使用して集計すると、玄室幅指数は指数16～74まで分布しており、正規分布している状況も見受けられない。このことから、地域全体でまとまりがあるとは言えない。

次に、古墳群単位での平面形態の比較を行った。分析に際しては、平面形態を分析するに十分な資料が存在する寛弘寺古墳群と一須賀古墳群を探り上げ相互比較した。第79・80図は両古墳群の玄室幅指数を0.2間隔で集計し、比較したものであるが、一須賀古墳群は指数60前後のものが最も多く、主に指数50～70にかけて分布している。一方で、寛弘寺古墳群は指数40前後のものが最も多く、主に指数30～50にかけて分布している。寛弘寺古墳群では、指数60以上の略方形プランのものも見られるが、これらは終末期の小型化した特殊な石室である。このことから、一須賀古墳群よりも寛弘寺古墳群の方が細長い平面形態を探っていることがわかる。両古墳群は異なる群集墳群に包括されるが、これらの群集墳群は近接している。このようなことから、平面形態に見られる地域色は河内もしくは南河内といった広い範囲でまとまりがなく、個々の群集墳や群集墳群を単位としてまとまりを見せていているようである。

### 4 玄室規模の分析

南河内地域の有袖形横穴式石室には、玄室規模で、長さ6.5mから1.5m、幅で3.22mから1.1mまでの差異がある(第7表)。このような横穴式石室における平面規模の差違は、階層性によるものとの指摘があり(近藤1983)、副葬品の組成からの検証も行われている(尼子1992・重藤1993)。また、7世紀代には古墳の薄葬化が進み、この中で、横穴式石室の玄室規模も縮小していくことが指摘されている(水野1970)。本節では、玄室規模の差異は階層性と時期差の両方によって生じることを踏まえ、玄室長の分布域が時間的にどのように

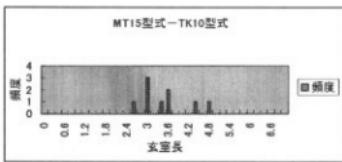
変化するか分析した。なお、各資料の築造時期は初葬段階の遺物と考えられる須恵器の型式を使用した。

MT15型式が出土した資料では、資料が少ないものの玄室長2m～3m程度のものがあり、最大値4.3m、最小値2.5mである(第81図・第7表)。TK10型式が出土した資料では、やや大型化がみとめられ3m前後のものが中心となり、最大値3.5m、最小値2.9mとなる(第81図・第7表)。MT15型式からTK10型式が出土した当該地域の横穴式石室は、中小規模の石室で構成されるといえる。しかし畿内地域全体で見ると、この時期にすでに奈良県市尾墓山古墳や大阪府南塙古墳で単独墳に大型横穴式石室の採用がみられる。当該地域にこの時期の単独墳が今のところ確認されていないのが最大値が低い原因である。しかし、この時期の石室は以後の時期に比べると全体的に小振りであるといえる。

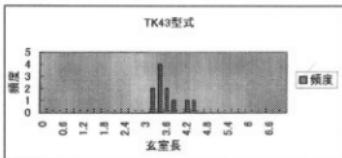
これに続くTK43型式が出土した資料では3.4m前後のものと4.2m前後のものが認められ、最大値4.3m、最小値3.2mとなる(第82図・第7表)。一須賀古墳群WA1号墳は玄室長6.5m、玄室幅2.6mあり、この時期のものである可能性がある。そうであれば、この時期に大型石室<sup>注5</sup>が当該地域に出現していたといえる。この時期に全体的に石室が大型化しつつ、石室の階層分化が著しく進んだ事が窺える。

TK209型式が出土した資料では最大値6.1m、最小値2.4mとなる(第83図・第7図)。最大値から最小値までの幅が広がっているのが特徴である。3.8m前後の資料が最も多く、石室の規模は大型化しているといえるが、逆に前段階には認められなかった3m以下の資料も含まれている。次の段階には、このような小型の石室が主体を占めるようになることから、当該時期の後半にこのような石室が出現したことが想定できる。

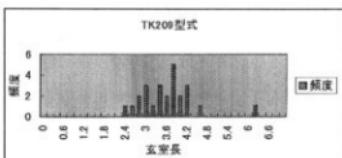
TK217a-b型式が出土した資料では、最大値3.2m、最小値2.5mであり、全体的な、石室規模の縮小化が起こっている(第84図・第7表)。TK217c型式の段階になると、無袖



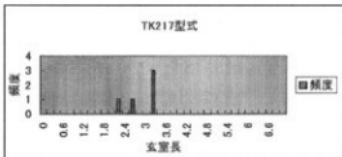
第81図 MT15-TK10型式の玄室規模の分布



第82図 TK43型式の玄室規模の分布



第83図 TK209型式の玄室規模の分布



第84図 TK217a-b型式の玄室規模の分布

形のものが主流をしめるようになる。無袖形のものはこの時期をとおして小型化していくとみられ、田辺古墳群では全長2m程度にまで縮小したものもみられる。

以上、当該地域の主に群集墳に採用された石室の規模の変遷をまとめると、MT15型式及びTK10型式が伴うものは、大型のものが多く全体的に小振りであり、その後、TK43型式及びTK209型式が伴うものは、規模が大型化していくと同時に、階層差が顕著になる。TK217型式が伴うものは、全体的に規模が縮小されていくなかで、再び階層差が反映されなくなっていく傾向が指摘できる。<sup>註4</sup>

## 5 壁面の分析

本節では、横穴式石室の壁面構造を分析する。横穴式石室は、玄室側壁、前壁、袖部、羨道側壁の各壁体よりなっている。ここでは、各壁体で観察できた用石法の分析を行う。

畿内型石室の各壁体の用石法は第2表、第85図のように分類することができる。この分類は当該地域の横穴式石室の分類にも有効であり、各変異と実資料を照合すれば、第7表のように分類できる。ここでは、時期差、階層差が各壁体の用石法にどのような影響を持つのか分析した。

第3～6表は各部位における各変異に対して、初葬段階のものとしてどの型式の須恵器が伴っているのかクロス集計したものである。まず奥壁では、MT15型式が出土した資料(以下段階という)では1類がともなっている。TK10型式段階では2類が1例、3類が4例となる。TK43段階では3類が9例、4類が2例となる。4類を採用しているものは大型のものが多いという傾向がある。TK209段階では3類が15例、4類が8例となる。このような傾向から奥壁は、MT15段階からTK10段階にかけて1類から2類への変化が、TK10段階で2類から3類への変化があったものと考えられる。4類についてTK43段階で出現しているが、この後、TK217段階まで3類と共存している状況がある。4類は大型のものに採用される例が多い。

玄室側壁については、MT15段階で1類から2類への変化が、TK10段階で2類から3類への変化があったものと考えられる。4類についてTK43段階の末葉に出現しているものと考えられ、TK209段階では全体の21%を占めるようになる。TK217段階には再び3類が大部分をしめている。

前壁については当該地域の資料が不足されているため、分析ができなかったが当該地域の横穴式石室の変遷に大きな影響力をもったと考えられる大和盆地では、1類と2類がMT15段階からTK10段階にかけて存在し、3類がTK10からTK43段階に、4類がTK209段階に存在する。TK217段階には天井が低くなり、5類が出現する(太田1999)。

袖部については、MT15段階で1類から2類への変化が、TK10段階で2類から3類への変化があったものと考えられる。TK43段階では3類が主体をしめ、TK209段階では3類が71%、4類が29%となり、4類が増加傾向にあると言える。

	1類	2類	3類	4類	5類
奥壁	O.1 	O.2 	O.3 	O.4 	O.5 
玄室側壁	G.S.1 	G.S.2 	G.S.3 	G.S.4 	G.S.5 
袖部	S.1 	S.2 	S.3 	S.4 	S.5 
前壁	Z.1 	Z.2 	Z.3 	Z.4 	Z.5 
蔑道側壁	S.S.1 	S.S.2 	S.S.3 	S.S.4 	S.S.5 

第85図 各部位の変異一覧

1類 (O 1)	板状の石材を小口積みするもの。1段7石程度で構成される。石材の多くは、壁体として使われている面の長辺が50cm以下である。
2類 (O 2)	扁平な石材をブロック状に横位に据えて使用する。1段4石程度で構成される。50cm以上の石材が多く見られ、1m程度の石材も見られる場合がある。
3類 (O 3)	奥壁の整備が進み巨石を使用し壁面を構成するもの。一段一石積みへの指向が窺えるが、まだ達成されていない段階のもの、多くは1段2石で構成される。
4類 (O 4)	巨石を使用し一段一石が達成された段階のもの、2段積みのものと3段積みのものがある。報長の立面形をしていることをもって、次5類と区別する。
5類 (O 5)	天井が低くなるのに連動して奥壁が正方形もしくは横長になったもの。
1類 (Z 1)	持ち送りのきついドーム状に石材を架構するもの。
2類 (Z 2)	垂直に近い形で2、3石を積んでいるもの。
3類 (Z 3)	垂直に1石もしくはそれに準じる形で積んでいるもの。
4類 (Z 4)	前壁を斜めに架構するもので玄室天井の高いもの。1石積みのものと2石積みのものがある。
5類 (Z 5)	壁を斜めに架構するもののと1石積みのもので天井の低いもの。
1類 (S 1)	石材を3段以上に小口積みし、側壁まで側面を1段2石以上で積んでいるもの。
2類 (S 2)	石材を3段以上に小口積みし、側壁まで側面を1段1石で積んでいるもの。
3類 (S 3)	立石を用い、その上面に天井石まで1、2石積むもの。
4類 (S 4)	立石の上に直接天井石が載るもの。
5類 (S 5)	立石を用いず、かつその上に直接天井が載るもの。
1類 (G. S 1)	板状の石材で小口積されているもの。使用される石材は最大50cm程度のもの。
2類 (G. S 2)	扁平な石材をブロック状に横位に据えて積んでいるもの。最大1m程度の石材も使用する。5~7段積み。
3類 (G. S 3)	石材が大型化し3~4段積みとなったもの。この際高さ調節のための小石材は1段に数えない。
4類 (G. S 4)	基底石を立てて使用し3段積みのもの（調節の石材は1段に数えない）。
5類 (G. S 5)	2段積みもしくは1段積みのもの。
1類 (S. S 1)	板状の石材で小口積みされているもの。使用される石材は最大50cm程度のもの。
2類 (S. S 2)	1m以下の扁平な石材をブロック状に小口積みするもの。
3類 (S. S 3)	5~8段積み立石より小型の巨石材で積まれているもの。
4類 (S. S 4)	立石と同程度の巨石材で積まれているもの。
5類 (S. S 5)	ほぼ1石でつまれているもの。

第2表 各部位の用石法一覧

	O1	O2	O3	O4	O5	$\Sigma$
MT15	1	0	0	0	0	1
TK10	0	1	4	0	0	5
TK43	0	0	9	2	0	11
TK209	0	0	15	8	0	23
TK217a-b	0	1	4	0	0	5
TK217c	0	0	0	0	0	0
$\Sigma$	1	2	32	10	0	0

第3表 奥壁と須恵器型式の対応

	GS1	GS2	GS3	GS4	GS5	$\Sigma$
MT15	2	1	0	0	0	3
TK10	0	2	3	0	0	5
TK43	0	0	10	1	0	11
TK209	0	1	17	5	1	24
TK217a-b	0	2	3	0	0	5
TK217c	0	0	0	0	0	0
$\Sigma$	2	6	33	6	1	46

第4表 玄室側壁と須恵器型式の対応

	SS1	SS2	SS3	SS4	SS5	$\Sigma$
MT15	3	0	0	0	0	3
TK10	0	3	1	1	0	5
TK43	0	0	8	1	0	9
TK209	0	0	7	15	1	23
TK217a-b	0	0	2	0	0	2
TK217c	0	0	0	0	0	0
$\Sigma$	3	3	18	17	1	50

第5表 美道と須恵器型式の対応

	S1	S2	S3	S4	S5	$\Sigma$
MT15	1	2	0	0	0	3
TK10	0	3	2	0	0	5
TK43	0	0	6	1(1)	0	8
TK209	0	0	17	3(4)	0	24
TK217a-b	0	0	1	0	0	1
TK217c	0	0	0	0	0	0
$\Sigma$	1	5	26	9	0	45

第6表 袖部と須恵器型式の対応

()内はその可能性のあるもの

美道側壁についてはMT15段階～TK10段階で1類から2類への変化が、TK10段階で2類から3類への変化があったものと考えられる。TK43段階では3類が主体をしめ、TK209段階では3類が30%、4類が65%となる。

須恵器の型式と石室部位の変異は1対1の対応関係はない。しかし、概ね、須恵器の型式変化にともない、より高度な技術とより大きな石材を必要とする用石法が出現・普及している。このことから用石法の変化は時期差で説明が可能である。部位によっては、大型の石室が小型の石室に先駆けてより新しい用石法を採用している状況も認められる。

## 6 まとめ

本節では、分析結果を総括し、南河内地域の横穴式石室の展開について述べた。記述を行う際は、須恵器の各型式が重なり合いを持ちながらも、MT15型式が6世紀初頭～前葉、TK10型式が6世紀中葉、TK43型式が6世紀後半、TK209型式が6世紀末葉から7世紀前葉、TK217型式が7世紀中葉から後半にかけて主体的に流通したと考え、各型式が主体的に流通した時期を型式期と呼び、各型式期における資料の特徴についてまとめた。

まず、6世紀初頭のMT15型式期には、主に当該地域の北部で横穴式石室の築造が始まったようである。当該時期においてすでに他地域では、単独墳を中心に大型石室の導入が行われているが、当該地域では当該時期の大型単独墳が未発見であり、石室は群集墳の中・小規模古墳に採用されており、これらの石室群は規模も全体的に小ぶりである。各部位では主に1～2類の用石法がみられる。当該時期において南河内地域南部では、石室の導入が遅れ、木棺直葬墓を埋葬施設としている状況が認められる。

6世紀中葉のTK10型式期では北部で、各部位が2類からなる石室へと変遷し、この時期に奥壁や袖部を中心に部分的に3類の用石法の導入が行なわれたようである。石室の規模は若干の大型化が認められる。

古墳名	平面形	玄室長	玄室幅	側室長	側室幅	O	GS	Z	S	SS	測量法	文献
金山古墳	圓神	28	2.5	6.26	1.72	4	3	3	4	3	TK209	1
太平山古墳	圓神	453	2.38	22	1.8	5	5	9	4	5	未発掘	2
東高石垣古墳	石片神	63	2.1	45	1.8	4	5	4	4	5	TK209	3
二子古墳群西	圓神	495	1.7	0.5	1.4	-	-	-	-	-	-	4
二子古墳群東	圓神	44	1.55	1.5	1.3	3	3	3	3	-	-	4
深穴古墳	石片神	38	2.5	4.5	1.3	-	-	-	-	-	-	2
東高石26号墳	石片神	32	1.25	12	0.95	3	3	-	-	3	TK43	5
東高石28号墳	無神	2	0.85	-	-	-	-	-	-	-	坪地なし	5
東高石30号墳	小石室	12	0.6	-	-	-	-	-	-	-	坪地なし	5
東高石32号墳	無神	44	1	-	-	-	-	-	-	-	坪地なし	6
東高石7号墳	石片神	24	1.2	1.6	1	-	-	-	-	-	TK43~TK209	6
東高石40号墳	無神	42	0.75	-	-	-	-	-	-	-	TK209~2	7
東高石41号墳	無神	37	0.6	-	-	-	-	-	-	-	TK217C	7
東高石38号墳	無神	6	1.1	-	-	-	-	-	-	-	TK217B	7
東高石43号墳	無神	38	1.2	-	-	-	-	-	-	-	坪地なし	7
東高石45号墳	兩神	41	22	5.6	1.8	4	3	-	3	4	TK209	8
東高石47号墳	左片神	24	1.3	1.8	1.1	3	3	-	3	3	TK209	8
東高石48号墳	左片神	28	1	1.7	0.6	3	2	-	-	-	坪地なし	8
東高石52号墳	石片神	21	1	15	0.8	2	2	-	3	2	TK217D	9
東高石53号墳	右片神	32	1.25	2.9	1.3	3	4	-	3	5	TK217D~e	9
東高石59号墳	左片神	15	1.1	2.4	0.9	2	2	2	2	2	坪地なし	9
東高石61号墳	無神	23	0.6	-	-	-	-	-	-	-	坪地なし	9
東高石62号墳	無神	16	0.5	-	-	-	-	-	-	-	TK217a	9
東高石64号墳	石片神	41	1.4	2.65	0.9	3	2	-	3	4	TK209	9
東高石70号墳	機口式石室	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9
東高石71号墳	圓穴式石室	27	0.75	-	-	-	-	-	-	-	坪地なし	9
東高石72号墳	右片神	21	1	0.8	-	-	-	-	-	-	TK217a	10
東高石75号墳	兩神	27	1.65	2.3	1.3	3	3	-	3	4	TK209	10
東高石76号墳	右片神	-	13	-	-	2	2	-	-	-	TK217c	10
東高石78号墳	右片神	25	1.7	3.1	1.5	3	3	-	3	3	TK217a	10
東高石80号墳	圓洞無蓋	4	11	2.3	1	-	-	-	-	-	TK209	11
東高石80号墳	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	TK209	11
東高石80号墳	記述なし	-	-	-	-	-	-	-	-	-	TK43	11
東高石80号墳	右片神	-	-	-	-	-	-	-	-	-	TK43	11
田原W1号墳	圓神	63	2.6	8.5	1.2	4	4	6	4	4	TK43~TK209	12
田原W4号墳	無神	25	1.2	-	-	-	-	-	-	-	TK217c	12
田原W5号墳	無神	3	0.8	-	-	-	-	-	-	-	H5なし	13
田原W6号墳	無神	32	1.8	3.5	1.2	3	3	4	3	3	TK43	13
田原W7号墳	左片神	3	1.4	3.1	1	3	3	4	3	3	TK209	13
田原W11号墳	右片神	43	2.3	3.4	1.2	1	1	1	1	1	MT15	13
田原W12号墳	圓神	5.8	2.5	6	1.4	3	3	4	3	4	TK209	13
田原W13号墳	兩神	28	1.8	2	1.2	3	4	-	3	4	TK209	13
田原W14号墳	左片神	37	3	2.5	0.7	3	3	5	4	4	TK209	13
田原W15号墳	兩神	34	2.4	6	1.2	3	3	4	4	3	TK43	13
田原W16号墳	右片神	35	2.2	2	1.1	2	2	-	1	2	MT15~TK10	13
田原W19号墳	包片神	6	2.2	4	1.2	3	3	4	3	4	HJ上せり	13
田原W20号墳	左片神	3.1	1.36	3.4	1.4	3	3	4	4	4	TK217c~e	12
田原W21号墳	右片神	37	2.1	2.7	1.3	3	4	-	4	4	TK43	14
田原W22号墳	右片神	47	3.2	3.2	1.6	3	3	5	1	3	TK10	14
田原W23号墳	右片神	32	2	3.3	1.2	3	3	2	3	3	TK217a	14
田原W24号墳	右片神	3	1.85	2.3	1.1	1	1	-	-	1	MT15~TK10	14
田原W25号墳	右片神	22	1.9	2.2	1.1	2	2	2	2	1	坪身等出上せず	14
田原W27号墳	圓神	33	2.1	3.3	1.3	3	3	-	3	3	TK43	14
田原W9号墳	右片神	34	2.16	3.3	1.35	4	4	-	3	4	TK209	15
田原W3号墳	右片神	3.25	2.1	3.75	1.25	3	3	-	3	4	TK10	15
田原W5号墳	左片神	36	2.45	4	1.4	3	3	4	3	4	TK43	15
田原W6号墳	右片神	29	1.8	2.9	1.1	2	2	-	2	2	TK10	15
田原W7.2号墳	右片神	29	1.8	3.7	1.5	4	3	-	3	3	TK209	15
田原W7.1号墳	不明	-	-	-	-	3	3	-	-	-	TK217a	15
田原H8.5号墳	右片神	29	1.7	2.4	0.95	3	2	2	2	2	TK10	15
田原H9.5号墳	右片神	3.5	1.8	3	1.35	2	3	1	2	2	TK10	15
田原B10号墳	右片神	34	1.9	5.15	1.1	3	3	2	3	3	TK43	15
田原B11号墳	不明	0.9	1.7	-	-	-	-	-	-	-	TK10	15
田原B14号墳	右片神	-	1.6	2	0.85	-	1	-	2	1	MT15	16
田原B15号墳	右片神	2.5	1.4	1.9	1	-	-	-	2	1	MT15	16
田原B17号墳	右片神	21	0.7	-	-	-	-	-	-	-	MT15	16
田原B17.5号墳	右片神	41	1.9	3.4	1.2	4	3	-	3	4	TK209	16
田原B18号墳	無神	5.1	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	16
田原B20号墳	右片神	2.6	1.8	-	1.1	4	3	-	3	4	TK217~209	16
田原B22号墳	右片神	31	1.6	1.5	0.9	1	1	-	2	1	-	16
田原B23号墳	左片神	2.6	1.6	2.1	1.1	3	3	-	3	4	TK209	16
田原B14号墳	右片神	3	1.7	1.8	0.5	1	1	-	1	1	坪出上なし	16
田原B15号墳	右片神	-	1.6	1.5	0.8	-	1	-	1	1	坪出上なし	16
田原B16号墳	右片神	3.4	1.7	1.4	0.8	1	1	-	1	1	坪出上なし	16
田原B18号墳	右片神	3.3	2.1	2.3	0.8	1	2	-	1	2	坪出上なし	16
田原B19号墳	右片神	3.1	1.7	1.6	0.8	1	1	-	1	1	坪出上なし	16
田原B20号墳	右片神	3.4	1.7	1.8	1	1	1	-	1	1	坪出上なし	16
田原B21号墳	右片神	3.2	1.6	1.2	0.8	1	1	-	1	1	坪出上なし	16
田原A1.3号墳	右片神	3.64	1.96	2.2	1.2	5	3	2	4	3~4	未発掘	17
田原A3.9号墳	左片神	3.72	2	4.73	1.3	4	3	4	4	3~4	未発掘	17
田原A9.9号墳	右片神	3.75	1.9	4.8	1.4	4	3	-	4	3	TK209	18
田原O4.5号墳	圓神	3.3	2.4	2.8	1.8	3	4	-	3	4	TK209	18
田原O5.9号墳	左片神	3.45	2	3	1.15	3	3	-	3	3	TK209	18
田原O6.0号墳	不明	4.3	2.25	6.6	-	3	3	-	-	-	TK43	18

一須賀O1号墳	不明	-	1.3	鐵塊	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	18
一須賀O17号墳	不明	-	1.5	鐵塊	-	-	-	-	-	-	-	TK217a	18
一須賀O1号墳	片付地	3.3	1.8	3.8	1.25	3	3	-	3	3	-	TK209	18
一須賀O1号墳	石片地	2.9	1.5	4.3	1.2	4	3	-	3	4	-	TK209	18
一須賀O11号墳	片付地	1.6	1.75	3.6	1.4	4	3	-	3	3	-	坪山なし	18
一須賀O12号墳	石片地	3.55	1.9	2.6	1.5	4	3	-	3	4	-	TK43	18
一須賀O13号墳	無地	5.4	1.65	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	18
一須賀O2号墳	無地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	19
一須賀O3号墳	無地	1	0.6	-	-	5	3	-	4	4	-	坪山なし	20
一須賀O4号墳	無地	2	0.5	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	20
一須賀N10号墳	無地	3.45	0.95	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	20
一須賀N11号墳	無地	3.2	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	20
辺近1号墳	無地	3.6	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	21
辺近2号墳	無地	2.2	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	21
辺近3号墳	無地	4.3	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	TK217c	21
辺近4号墳	無地	2.9	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21
辺近5号墳	無地	1.8	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21
辺近6号墳	無地	3.8	2.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21
辺近7号墳	無地	4.35	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	TK217c	21
辺近8号墳	無地	2.6	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	TK217c	21
辺近10号墳	無地	1.4	0.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21
田辺12号墳	無地	1.6	0.45	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21
辺近13号墳	無地	1.6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21
辺近14号墳	無地	1.6	0.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21
飛込2号墳(飛込2号墳)	圓錐	3.5	2.1	5	1.3	3	3	-	3	4	4	TK43-TK209	22
飛込2号墳(飛込2号墳)	圓錐	3.2	1.8	3.7	1.1	-	3	-	3	4	-	TK209	22
切戸1号墳	石片地	3.37	1.78	2.8	1.06	3	4	-	3	4	TK10-TK43	23	
切戸2号墳	片付地	3.3	2.2	11	不明	3	3	-	3	4	-	TK43	23
奈原塚1号墳	片付地	4.42	3.25	5.4	1.65	3	4	-	3	4	-	TK209	23
奉誠寺跡1号墳	圓錐	4.08	2.13	3.28	1.31	4	3	-	3	3	-	TK43	23
キトレ1号墳	不明	2.6	1.2	-	-	3	2	-	3	-	-	TK43-TK209	23
キトレ2号墳	不明	-	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	TK43-TK209	23
大谷1号墳	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	23
大谷2号墳	圓錐	3.6	1.9	-	-	3	3	-	3	4	-	TK209	23
大谷3号墳	石片地	2.4	1.2	3	0.8	3	3	-	3	4	-	坪山なし	23
大谷4号墳	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	23
大谷5号墳	無地	3.9	1	-	-	-	-	-	-	-	-	TK217a-c	23
藤山第2号墳	肉垂	2.99	1.33	2	0.8	昇殿の心不規	-	-	-	-	-	坪山なし	24
藤山第3号墳	左肩地	3.2	1.5	1.3	-	3	3	3	4	-	-	坪山なし	24
田中塚1号墳	無地	5.5	-	5	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	24
田中塚2号墳	無地	3.2	-	4.3	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	24
田中塚3号墳	圓錐	3.8	-	4.7	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	24
田中塚4号墳	左肩地	4.2	1.9	5	1	昇殿の心不規	-	-	-	-	-	坪山なし	24
山の古墳(石室)	無地	-	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	25
山の古墳(石室)	無地	-	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	25
小企平古墳	無地	-	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	25
御前所古墳	左肩地	3.8	2.4	-	1.6	3	4	-	3	4	-	TK209	26
三日市9号墳	無地	-	0.65	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27
三日市10号墳	圓錐	3.9	1.6	3.3	1.05	3	3	-	3	4	4	TK209	27
三日市12号墳	石片地	0.6	3.3	0.5	-	-	-	-	-	-	-	TK217a	27
三日市13号墳	石片地	-	6.5	1.4	3	2	-	-	-	-	-	TK43	28
九ノ木古墳	有輪	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	未発掘	29
北峯1号墳	無地	2.63	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	未発掘	29
北峯2号墳	圓錐	3.11	1.64	3.3	1.26	3	5	5	3	3	4	未発掘	29
北峯4号墳	右肩地	2.31	1.95	1.9	1.12	3	3	5	2	3	4	未発掘	29
北峯5号墳	圓錐	3.68	-	3.1	-	3	-	-	-	-	-	未発掘	29
神山井2号墳	無地	3.2	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	TK10-TK43	30
神山井3号墳	無地	2.8	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	TK209	30
神山井4号墳	無地	3.2	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	TK209	30
神山井5号墳	無地	6.8	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	TK209	30
神山井6号墳	2.6	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	TK209	30
神山井7号墳	無地	2.9	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	坪山なし	30
神山井8号墳	無地	4.7	1.5	-	-	-	-	-	-	-	-	TK209	30

1 小林洋耕1953「河内金山古墳及び大蔵古墳の研究」

2 太子町教育委員会1973「太子町の古墳」

3 森浩一1970「大阪古墳と古墳群」[考古学研究] 58号

4 北野勝1958「河内二子塚古墳概観」[古代学研究] 19号

5 大阪府教育委員会1986「奈良寺山遺跡発掘調査概要」[N]

6 大阪府教育委員会1987「奈良寺山遺跡発掘調査概要」[N]

7 大阪府教育委員会1988「奈良寺山遺跡発掘調査概要」[N]

8 大阪府教育委員会1989「奈良寺山遺跡発掘調査概要」[N]

9 大阪府教育委員会1990「奈良寺山遺跡発掘調査概要」[N]

10 大阪府教育委員会1991「奈良寺山遺跡発掘調査概要」[N]

11 大阪府教育委員会1994「奈良寺山遺跡発掘調査概要」[N]

12 大阪府教育委員会1970「河内町東山古墳の築造時期と調査概要」

13 大阪府教育委員会1969「奈良寺山東山古墳の築造時期と調査概要」

14 近づ飛博物館前2000「一枚古墳群Wア支」

15 大阪府教育委員会1974「一枚古墳群Wア支発掘調査概要」

16 大阪府教育委員会1993「一枚古墳群Wア支発掘調査概要」

17 大阪府教育委員会1982「一枚古墳群分布調査概要」

18 大阪府教育委員会1974「一枚古墳群古墳群」

19 河内町教育委員会1983「一枚古墳群Wア支発掘調査報告書」

20 「一枚古墳群発掘調査委員会」1996「太子カントリーホームズ建設に伴う埴田遺跡は一枚古墳群報告書」

21 埼原市教育委員会1987「田辺堺基分離調査概要」

22 埼原市教育委員会1997「別府野市坪庭文化財発掘調査報告書」

23 羽曳野市1994「羽曳野市史」

24 富田林市1985「富田林市史」

25 大阪府教育委員会1986「鎌池遺跡」

26 千早赤阪村教育委員会1983「朝日所、朝日所北古墳群概要」

27 河内長野市1993「三日市道跡発掘調査報告書」

28 河内長野市「河内長野市史」

29 桐原市教育委員会1986「明神山系遺跡発掘調査報告書」

30 大阪府教育委員会1992「守山山系遺跡発掘調査概要」

第7表 南河内地域の横穴式石室一覧

6世紀後半のTK43型式期には木棺直葬がほぼ姿を消し、埋葬施設は横穴式石室に統一される。各部位において3類を中心とした石室が導入される。当該時期には群集墳中の石室で階層分化が進む。

また当該時期から次の時期にかけて、群集墳を単位とした地域色が主に平面形態に顕著に現れるようになる。

6世紀末葉から7世紀前葉にかけてのTK209型式期では主に3類を中心とした石室群から4類を中心とした石室群への移行が想定できる。階層分化はさらに顕著になるが、この時期の終わりには、石室規模の縮小化が始まり、玄室長が2m台にまで小型化した石室が出現する。

7世紀前葉では、石室の小型化が引き続きみられ、7世紀中葉には無袖形の石室が主流を占めるようになる。

このように南河内地域の後期古墳に採用されている埋葬施設は畿内型とい一定の規格を共有するのみではなく、用石法の変化、規模の変化においても、全体的に一定の共通した傾向のなかで変化をしている。このような状況からは、当該地域の単独墳や群集墳が各々自由に古墳を設計、造営していたのではなく、ある種の規制のもとに定められた構築技法を用いて造営していたと考えるのが妥当であろう。大日寺古墳で検出された横穴式石室は玄室長2.36m、玄室幅1.3mであり、奥壁3類、玄室側壁4類、袖部2~3類、羨道側壁3類となる。玄室から出土した須恵器はTK209型式のものとTK217型式のものがあった。これらが追葬によるものかは調査で明らかにできなかったが、いずれにしても7世紀代の前半に築造されたものであるといえる。7世紀前半では南河内地域全体で石室の小型化が進んでいる。当該石室はこのような傾向に合致していると言える。

註1 古墳の数量をカウントする際には、本来、後期古墳のみをカウントするのが望ましいが、時期の判明していないものも多いので、すべての時期のものを含めた。カウントは「大阪府文化財分布地図」を用いて行った。

註2 通常群集墳は複数のものが集まってさらに大きな単位を形成することが指摘されている。(森岡1988、太田1998)

註3 碿内型石室の地域色に関しては、大和盆地の大和横穴式石室について河上邦彦氏(河上1992)・坂靖氏(坂1999)が考察をおこなっている。また、群集墳については一瀬和夫氏(一瀬1992)、太田宏明(太田1999)が分析を行っている。河上氏は主に石室主軸での断面形態や平面形態に大和盆地内部での小地域色が反映されることを主張した。また、一瀬氏は河内地域の山畠古墳群、高安古墳群、平尾山古墳群の平面形態を比較し、規格がことなる事を述べた。また太田は揖津地域や河内地域を探り上げ、このような地域色が個別の群集墳を単位として現れていることを指摘した。

- 註 4 玄室幅指數は玄室幅を玄室長で割った値を用いた。
- 註 5 出土須恵器を型式に照合する際には田辺編年を用い(田辺1966)、杯蓋の天井部と口縁部の境に付けられた棱の退化の具合と杯の口径を重視した。TK217型式期に関しては田辺氏の分類にしたがって、a類(坏H)、b類(坏Gでかえりが受け部より突出するもの)、c類(坏Gでかえりが受け部内におさまるもの)に細分した。また、須恵器も絶対的な時間軸の指標とはならないことは、窯における同一焼面で複数の型式が同時焼成されていることが確認されていることから明かである(藤原1991)。
- 註 6 出土した須恵器により、時期が特定できた2.5m前後の資料は1例であったが用石法の検討から、この時期のものと考えられる資料は数例みとめられ、一須賀古墳群I-14号墳(玄室長3m)、I-18号墳(3.3m)、I-19号墳(3.1m)、I-20号墳(3.4m)、I-21号墳(3.2m)が相当する。I-6号墳、I-8号墳は遺存状況が悪いが、右室掘方の規模から推定して、玄室長は2~3mであろう。
- 註 7 一須賀古墳群WA-1号墳は、石棺が1棺が納棺されており、釘が出土していないことから木棺が納棺されていた可能性も低く単次葬墓である可能性が高い。当該古墳から出土している須恵器群には杯蓋においてやや古い様相(MT85型式)が認められる。しかしながら他の器種は概ねTK43~TK209型式の様相を呈している。杯蓋も口径が小型化していることと須恵器群が一括資料であることを考えればTK43型式~TK209型式に相当すると考えられる。なお、石室の用石法からもこの時期のものであるといえる。
- 註 8 嶺内地域の横穴式石室は概ね玄室長が5mを越えると、資料数が極端に減少するという傾向がみとめられ(太田1997、1998)、一方で大型の単独墳に採用されている横穴式石室は玄室長が5m以上のものがほとんどである。これらのことから玄室規模5m以上の石室をここで大型石室とした。
- 註 9 丸川義弘氏は京都盆地の横穴式石室の平面形態を分析するなかで、この地域では当初単独墳に横穴式石室が採用され、群集墳には遅れて採用されることと群集墳中の石室は導入当初のものが最も大きく、順次規模が縮小していくことを述べた。本稿で対象とした地域では群集墳に導入当初の石室がみられ、また単独墳が少ない等、京都盆地とは異なる側面が多くみられるが、横穴式石室はMT15型式期からTK209型式期までは大型化の傾向があり、この後小型化していく傾向がある。地域によって横穴式石室の導入時期は異なるが、石室の規模の変動は、このようなながれのなかで理解すべきと考える。

#### 参考文献

- 網干 善教 1970「大和における後期古墳の歴史的背景」『日本古文化論叢』吉川弘文館  
尼子奈美枝 1993「後期古墳の階層性」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』  
池田 貴剛 1995「聖德太子墓出土の土師器」「太子町立竹内街道歴史資料館報」創刊号  
一瀬 和夫 1992「近畿地方」「季刊 考古学」第45号

- 太田 宏明 1997 「畿内型石室の属性分析」『千里山文学論集』58号 関西大学大学院
- 太田 宏明 1998 「類型化による群集墳分析－中河内地域を中心として－」『網干善教先生古稀記念考古学論集』
- 太田 宏明 1999 「畿内型石室の属性分析による社会組織の検討」『考古学研究』46卷1号 考古学研究会
- 太田 宏明 2000 「畿内型石室の計量分析」『情報考古学』6卷1号 日本情報考古学会
- 河上 邦彦 1979 「大和の大型横穴式石室の系譜」『櫻原考古学研究所論集』第4 吉川弘文館
- 河上 邦彦 1988 「大和の横穴式石室の概観と二、三の問題」『櫻原考古学研究所論集』第9 吉川弘文館
- 河上 邦彦 1992 「大和巨勢谷の横穴式石室の検討」『有坂隆道先生古稀記念日本文化史論集』
- 近藤 義郎 1983 「前方後円墳の時代」
- 重藤 輝行 1992 「北部九州の初期横穴式石室にみられる階層性とその背景」『九州考古学』67号
- 白石太一郎 1962 「畿内における横穴式石室の変遷」『古代学研究』第30号 古代学研究会
- 白石太一郎 1966 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』第42、43合併号 古代学研究会
- 白石太一郎 1985 「古墳の知識Ⅰ・墳丘と内部構造」東京美術
- 白石太一郎 1995 「古代史のなかの藤ノ木古墳」『藤ノ木古墳』読売新聞社
- 田辺 昭三 1966 「陶邑古窯跡群Ⅰ」
- 富山 直人 1994 「横穴式石室考－畿内を中心として－」『大阪市文化財論集』財団法人大阪市文化財協会
- 土生田純之 1991 「日本横穴式石室の系譜」学生社
- 土生田純之 1994 「畿内型石室の成立と伝播」『古代王権と交流』5 名著出版
- 坂 靖 1999 「大和の横穴式石室－岩屋山式成立以前－」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズVII
- 藤原 學 1991 「近畿」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』
- 丸川 義広 1989 「横穴式石室平面形態の分析」『大枝山古墳群』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 丸川 義広 1998 「横穴式石室平面形態の検討」『研究紀要』第5号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 増田 一裕 1996 「畿内大型横穴式石室の技術的展開と歴史的動向」『日本考古学』3 日本考古学協会
- 水野 正好 1970 「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』5
- 森岡 秀人 1988 「表六甲東麓における群集墳の静動」『歴史と神戸』125

- 森下 浩行 1986 「日本における横穴式石室の出現とその系譜」『古代学研究』111号 古代  
学研究会
- 森下 浩行 1987 「畿内大型横穴式石室考－後期古墳時代・畿内型A類の様相－」『考古学と  
地域文化』
- 森下 浩行 1993 「平群谷古墳群再論(下)」26-31P 「古代文化」45-12
- 山崎 信二 1986 「横穴式石室構造の地域別比較研究－中・四国編」
- 和田 晴吾 1992 「群集墳と終末期古墳」『新版・古代の日本』5 角川書店

## 第2節 中世土壙墓について

—いわゆる「屋敷墓」を中心に—

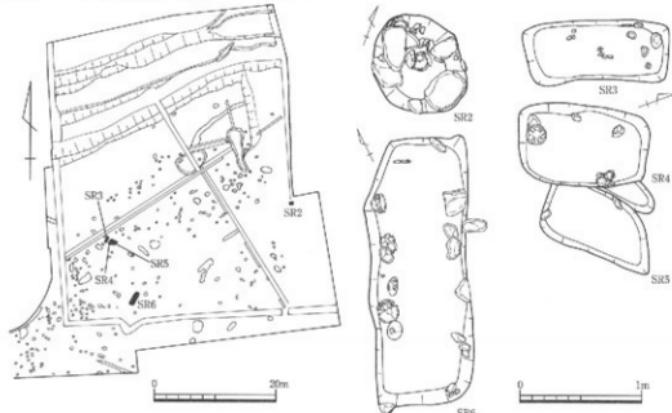
藤田徹也

### 1 はじめに

大日寺遺跡の下層面で検出されたSR2・SR3・SR4・SR5・SR6の各遺構は、その形状や出土遺物から土壙墓と考えられる。個々の遺構についての詳細は本報告に委ねるが、これら土壙墓と考えられる各遺構は、群をなして存在するのではなく、単独のものと多くても3基が並列するものであり、またSR3・SR4・SR5・SR6は、付近の柱穴などから考えられる建物跡と何らかの関係があると考えられる。したがって、これらの土壙墓は一般的に言われるような共同墓地とは考えにくく、坪之内徹氏<sup>注1</sup>が指摘した建物群に付随する墳墓、いわゆる「屋敷墓」と想定できる。

ここでいう「屋敷墓」とは、坪之内氏の見解を受けて橋田正徳氏が定義した「集落内から発見され、しかもその集落の継続期間中に作られたもので、個々の建物群と有機的な関係が想定できる土壙墓のことである。加えて、橋田氏は「屋敷墓」の意義を「屋敷の所有者が屋敷所有を正当化する手段」の一つとして作られたとしている。橋田氏の見解を積極的に評価すれば、「屋敷墓」を作る行為それ自体、世襲的な土地所有形態を有する当時の社会的背景を表すものであると言える。

本稿では、当遺跡で検出された5基の土壙墓を先学の研究や類似例をもとに検討し、当遺跡における位置付けを行っていきたい。



第86図 大日寺遺跡の土壙墓とその周辺

## 2 大日寺遺跡検出土墳墓の分類

江浦洋氏は、堺市日置莊遺跡検出土墳墓の分析から、土墳墓に埋納されている土器器小皿の5枚という数値に注目し、その数量が墓を作る際の共通した認識であることを指摘した。<sup>註3</sup>それを受けて橋田氏は、土墳墓に埋納される器種構成で分類している。<sup>註4</sup>まず、埋納される土器が椀、大皿と小皿が5個体前後で構成される土墳墓を1類、この中で、大皿1～2個体と小皿4～6個体のセットを1a類、椀1～2個体と小皿4～6個体を1b類、椀1～2個体と大皿1～2個体、小皿4～6個体を1c類と細分している。また、椀もしくは大皿1個体、もしくは椀と小皿または大皿と小皿が1・2個体で構成されるものを2類、小皿が1個体から3個体で構成されるものを3類、椀・皿類が10個体以上で構成されるものを4類としている。これらの中でも1類と2類は、中世前期を通して次第に多様化する土墳墓埋納形態のモデルになっていると指摘している。いざれにしても、土墳墓に皿を埋納するという事は、墓を作るという行為の中での共通した認識であったことが考えられる。

これらの先駆的研究をもとに当遺跡における土墳墓の埋納遺物を見ていくと、S R 2は白磁碗2点、瓦器塊2点の出土で13世紀前半頃のものと考えられる。小皿は出土せず、橋田氏の分類に当てはまらない。本報告でも記されているように、これらの遺物は骨を開むような形で検出されており蔵骨器としての機能も考えられ、以下に示す当遺跡の土墳墓とは様相が異なる。

S R 2は、調査区の東辺に位置する。調査区の東側は崖状になり、遺跡の立地する尾根上の端であることを示している。この事から、S R 2は検出された柱穴群（以下建物群）に付随するものではなく、集落の境界に位置していたと想定することができる。S R 2が埋納遺物、立地の観点で他の土墳墓と異なる様相を示すのは、いわゆる「屋敷墓」でないことに起因するものと考えられる。例えば、集落および地形の境界に位置する土墳墓として、大阪府豊中市の穂積遺跡<sup>註5</sup>・上津島南遺跡<sup>註6</sup>、高槻市上田部遺跡<sup>註7</sup>の例が挙げられる。



第87図 集落および地形境界に位置する土墳墓の例

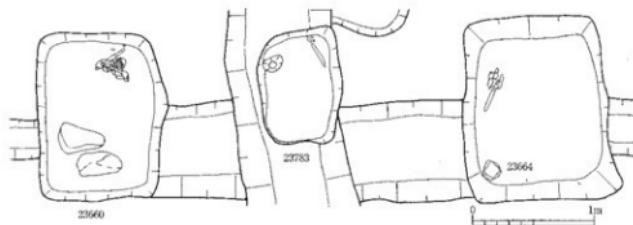
穂積遺跡の土壙墓は、12世紀中頃から13世紀後半にかけて5基が並列する形で作られている。これらの土壙墓は、集落と水田の境界に位置している。上津島南遺跡は、12世紀前葉のもので、東側の崖状地形と集落の境界につくられ、S R 2と同様の位置状況にある。上田部遺跡は、屋敷地を区画する大溝の外側に土壙墓6基、火葬墓2基がつくられている。これらの詳細時期は不明であるが、12世紀代として報告されている。穂積・上田部遺跡の場合、5・6基がまとめて検出されている点で共通しており、その領域が墓域（墓地）として認識されていた可能性がある。

S R 2が単独で検出され、また土壙墓に関係すると考えられる建物群との距離が離れている以上、穂積遺跡や上田部遺跡と同様の評価を与えることは出来ないが、集落境界に位置する土壙墓の場合、単独でつくられる例はあまり見当たらない。むしろ複数の土壙墓がまとまって検出される場合が多く、それらの多くが墓域（墓地）として認識されていることを考えれば、調査区の東側に複数の土壙墓があった可能性も否定は出来ない。推測ではあるが、ここでは集落境界に位置する土壙墓は複数基検出され、墓域（墓地）である認識がなされている場合が多いことを指摘するに留めたい。

S R 3出土の遺物は瓦器塊1点、土師質皿小型品4点であり、13世紀中葉と考えられ、橋田氏の分類では1b類とされるものである。S R 4出土遺物は、青磁碗1点、土師質皿大型品1点、土師質皿小型品5点で13世紀前半と考えられ、1c類に分類される。S R 5は、明確な出土遺物がなくここでは保留するが、S R 4に切られており、少なくともS R 4以前のものと考えられる。

S R 3・S R 4・S R 5は3基並列した形で建物群周辺から検出され、「屋敷墓」と認識することができる。管見の限りでは3基が並列する例はほとんど見られず、わずかに茨木市總持寺遺跡の1例<sup>註9</sup>のみである。

總持寺遺跡の土壙墓23660・23664・23783は、東西方向に約1m間隔で3基が並列した形で検出されている。23660は13世紀代、23664は13世紀後半から14世紀初頭、23783の時期は不明である。これら3基は、すべての土壙墓から鳥糞が出土しており、橋田氏が言



第88図 總持寺遺跡の土壙墓

う「『屋敷』所有の強化」の目的で血縁者が代々葬られたと考えることが出来る。

当遺跡の3基が並列する土壙墓は、出土遺物や遺構状況からSR5・SR4・SR3と東側から順に作られたと考えられ、総持寺遺跡の例から考えればこれらの土壙墓の被葬者が血縁者であると捉えることが可能であろう。

しかし、前述した穂積遺跡の5基の土壙墓はそれぞれが密接して作られていないがら隣接する土壙墓を壊すことはなかった例などの土壙墓の性質を考えると、SR4に切られているSR5は出土遺物が無く、土器を意図的に配置されたと考えられる他の土壙墓と比較すると、土壙墓である可能性それ自体疑問が持たれる。そこで次に、SR3とSR4が2基並列した形で作られたことを想定して考えてみたい。

東大阪市西ノ辻遺跡<sup>第10</sup>の並行する2基の木棺墓からは人骨が出土している。これらの木棺墓は、ともに13世紀後半のものとして考えられているが、木棺墓2が若干先行する可能性があることが報告されている。(西から木棺墓1・2) 木棺墓1からは、青磁碗1点、土師質皿大型品1点、小型品4点が出土し1c類に位置付けられる。報告書に掲げば被葬者は40歳代の女性である。木棺墓2からは、土師器大皿1点、土師器小皿7点が出土し1a類に位置付けられ、被葬者は40歳代の男性である。これらの木棺墓は、釘が出土していること、骨が水平な状況で検出されたことなどから、木棺が想定されている。この他にも、岡山県岡山市津寺遺跡の土壙墓4・5や岡山県山陽町馬屋遺跡土壙墓1・2、岡山県総社市三手遺跡土壙墓4・5など土壙墓2基が並んで(直行もしくは縱列含む)作られる場合、<sup>第11</sup>男性・女性がセットである場合が目立つのは興味深い事例である。

SR6は、建物群付近から単独で検出されており、「屋敷墓」と認識することができる。当遺跡における土壙墓の中では、最も古い時期に相当することから、当遺跡建物群(屋敷)の創設の主体者であった可能性がある。この土壙墓は、埋納された遺物から12世紀中葉と



第89図 西ノ辻遺跡木棺墓

考えられ、この「屋敷」は遅くとも12世紀前葉から中葉にかけて成立したと考えられる。

S R 6 に埋納された遺物は、白磁碗2点・瓦器塊4点・土師質皿小型品4点で、橘田氏の分類では4類に相当するものである。また、釘が出土していることから木棺墓と考えられる。

4類の例としては、11世紀末から12世紀初頭の大坂府高槻市上牧遺跡A区土塚墓1（瓦器塊2・大皿4・小皿5）、12世紀後半の京都府京都市平安京右京一条四坊四町S K80（白磁碗3・大皿1・小皿4・朱漆製品皿4）、13世紀初頭の京都市掠ノ木遺跡3トレンチS T382（白磁碗1・大皿1・小皿7）、12世紀中頃の7トレンチS T185（白磁碗2・大皿1・小皿9）、兵庫県淡河町淡河・中村遺跡BトレンチS K01（須恵器塊5・皿多数）などが挙げら

れる。これら土塚墓の埋納遺物を見てみると、いずれも椀・皿が10個体以上で構成されているものの、その埋納構成に統一性を見ることはできない。

しかし、兵庫県神戸市本山北遺跡第2次調査S T01の場合、遺物の個体数から橘田氏分類の4類に相当するものと考えられるが、遺物の出土した状況から木棺内と外の2群に分けることも可能である。本山北遺跡S T01埋納遺物の各個体数は不明なので推測の域をでないが、1類もしくは2類の埋納形態が複数埋納されているとも捉えることが可能であろう。

同様に先に触れた当遺跡S R 6 を含む6例の遺物構成を見てみると、上牧遺跡A区土塚墓1・平安京右京一条四坊四町S K80の埋納構成は、1類もしくは2類の複数構成と捉えることが可能であり、また掠ノ木遺跡の2基に関しては、1c類に皿が増量された形と捉えることができる。また、淡河・中村遺跡S K01のように椀が多くモデルを1・2類に求めることができないものもある。当遺跡SR 6 もこれに該当するであろう。

この様に、モデルを1・2類に求められるものと、求められないものの2つに細分するこ

とが可能ではなかろうか。

近隣地域も含めて4類相当の資料が不足している現段階では、細分化は困難であるが今後の資料増加を待って再検討が必要であろう。

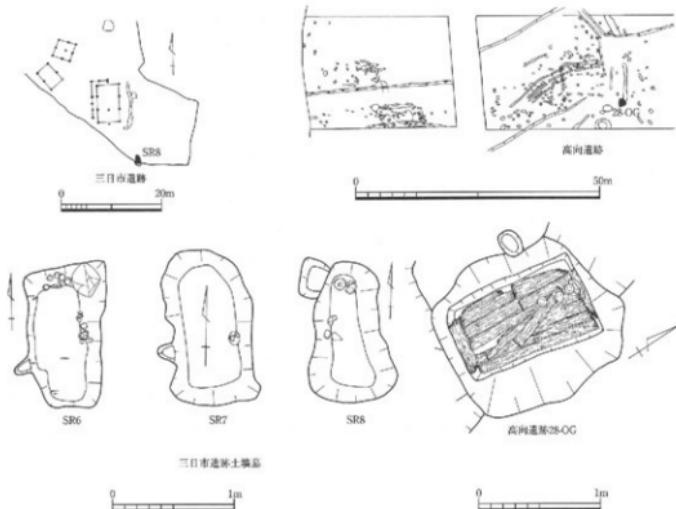
### 3 河内長野市域の土壙墓

河内長野市域の土壙墓としては、三日市遺跡のSR6・SR7・SR8、高向遺跡の28-O-Gが挙げられる。三日市遺跡の土壙墓はいずれも集落内につくられた「屋敷墓」と考えられる。

三日市遺跡SR6の遺物は、土師器皿大型品1点・土師器皿小型品11点・小型瓦器塊6点で、橋田氏の分類では4類に相当するものであるが、出土状況から複数に構成されているものと考えられる。これらの出土遺物から12世紀後半のものと考えられ、また釘が出土していることから木棺墓の可能性が高い。

SR7の遺物は13世紀前半頃と考えられる白磁碗1点のみであるが、橋田氏の分類で1類もしくは2類に相当するものであろう。この2基は、並列した形で検出されており、前述した例からすると男女の血縁者である可能性も考えられる。

SR8は、白磁碗1点・瓦器塊1点・土師器皿1点が出土しており、2類に相当し、13世紀前半のものと考えられる。



第91図 河内長野市域の土壙墓

高向遺跡28-O Gは木棺墓である。13世紀代<sup>出20</sup>の土師器皿大型品1点・土師器皿小型品2点・瓦器皿2点が出土し、1a類に相当する。この木棺墓は、建物群周辺に作られたと考えられるものである。

三日市遺跡と高向遺跡の「屋敷墓」と、建物の主軸は一致している。当遺跡の場合、S R 2を除く「屋敷墓」と考えられる土壙墓が概ね同一方向の軸となっており、建物と墓の主軸を概ね一致させることが「屋敷墓」の共通認識と言えるのではないかろうか。

#### 4 まとめにかえて

本稿では、当遺跡から検出された土壙墓を埋納された遺物や作られた位置、建物群との関係などから、その類似例との比較をもとに検討してきた。また、橋田氏分類における4類を細分することが可能であることも示した。

まず、当遺跡の土壙墓についてS R 2とそれ以外の4基は、埋納された遺物、建物群との関係（土壙墓の位置）から、土壙墓としての性格が異なることを指摘した。

先述したように当遺跡S R 3・S R 4・S R 5・S R 6は、その主軸方向は概ね一致する。河内長野市域で検出した「屋敷墓」の方向と建物群の軸が概ね一致していることから考えれば、当遺跡における建物群の復元は困難であるものの、これらも「屋敷墓」と認識することが可能である。これらの「屋敷墓」は、12世紀中葉に作られたS R 6を始めとして、S R 5・S R 4・S R 3と続けて作られている。これらの被葬者が同一「屋敷」の主体者と想定すれば、S R 6の被葬者は「屋敷」の創始者と考えられ、S R 3・S R 4・S R 5にわたる約100年間この「屋敷」を保持できたと考えられるのである。また、S R 3・S R 4・S R 5がほぼ同じ領域に作られていることは、S R 6以後、この領域が屋敷地内において「垣中の墓所」としての認識がなされたと想定できる。仮に、この様な状況説明が可能であるならば、S R 4と同時期に作られたS R 2は、他の4基とは立場の異なった被葬者が考えられよう。

藤澤典彦氏は「屋敷墓」の位置付けについて「特定の墓所を持ち得ない人々」が設けたものとし、惣村の発生、共同墓地の成立が「屋敷墓」消滅の原因と考えている。先に述べたようにS R 2が「屋敷墓」とは異なる共同墓地の様相を含むものであるならば、共同墓地と「屋敷墓」は並存していたと考えられる。また、現段階で同遺跡内における3基以上の「屋敷墓」が検出された例が少ない事や、河内長野市域で「屋敷墓」と認識できるものが、当遺跡の4基に加え先述した三日市遺跡と高向遺跡の4基のみである事などを踏まえると、中世前期は開発者にとって「屋敷」所有・維持が困難な時代であり、この様な状況のもと、当遺跡で検出された4基の「屋敷墓」は、稀な例であると言える。長期に渡って「屋敷」を保持したと考えられる当遺跡「屋敷墓」の被葬者は、木下密運氏<sup>出21</sup>や藤澤氏が言う墓地を持つことができない民衆であるかどうか疑問が残る。

橋田氏の行った分類の4類相当については、細分の余地があることを指摘したに過ぎない。勝見（坂田）孝彦氏の資料を参考にすれば<sup>324</sup>近江国内の土壙墓には4類相当のものが多く見られ、4類相当の土壙墓を考えるにあたっては重要な位置を示すものと考えられる。いずれにしても本稿で行った検討の多くは現在確認できる類似例から推察したものであり、これらの課題を充分に検討することはできなかった。また、埋納形態の相違点つまり器の置き方、棺内・外に置く場合の相違などが何に起因するものなのか明らかにすることはできなかった。これらの課題については近隣地域だけではなく西日本全域の類例を比較検討したうえで考えていかなければならないだろう。識者諸賢の御批判を仰ぎ、今後の課題としたい。

#### （謝辞）

本稿を執筆するにあたって豊中市教育委員会橋田正徳氏、陣内高志氏には、数多くの有益な御教示・御指導を賜った。また、岡本洋、田福涼、正岡大実（以上、立命館大学大学院生）、松山功（立命館大学学生）の諸学兄からは有益な御助言・御協力を頂いた。なお、図面作成や資料収集にあたっては、高木久美子（立命館大学学生）、箕造加奈子（京都橘女子大学学生）、中野咲（関西大学学生）の手を煩わせた。特に、高木久美子には執筆の当初から、校正その他の雑用にまで多大な御尽力を頂き、大変な迷惑をおかけした。末筆ながら各氏に対し記して深謝の意を表すものである。

註1 坪之内徹1990「中世における墳墓と葬制（6）」『揖河泉文化資料』第41号

註2 橋田正徳1991『屋敷墓試論』『中世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会

註3 江浦 洋1988「中世土壙墓をめぐる諸問題」『日置莊遺跡（その3）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

註4 橋田正徳1993「中世前期における土葬墓の出土供膳具の様相」『貿易陶磁研究』13

註5 本報告において記しているが、出土した骨は破片化した骨粉であり、詳細は不明であるが人骨と考えるのが妥当であろう。

註6 橋田正徳2000岡町図書館歴史講座「中世とよなかに生きた人々」発表レジュメ

註7 『上津島南遺跡発掘調査概報』1984府営上津島住宅遺跡調査団

註8 鐘ヶ江一郎1993「上田部遺跡」『高槻市文化財年報 平成3年度』高槻市教育委員会

註9 『慈持寺遺跡』1998（財）大阪府文化財調査研究センター

註10 『西ノ辻遺跡第9次発掘調査報告』1996（財）東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会

註11 橋田正徳氏から御教示頂いた。

註12 『上牧遺跡発掘調査報告書』1980高槻市教育委員会

註13 小檜山一良ほか1999「平安京左馬寮・朝堂院跡・平安京右京一・二条二～四坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市文化財研究所

- 註14 森島康雄1998「槇ノ木遺跡」『京都府遺跡調査概報』第85冊（財）京都府埋蔵文化財センター
- 註15 前掲13
- 註16 丹治康明・阿部敬生1994「淡河・中村遺跡」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 註17 内藤俊哉1996「本山北遺跡 第2次調査」『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 註18 『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1988三日市遺跡調査会
- 註19 「高向遺跡」1989（財）大阪府埋蔵文化財協会
- 註20 報告書の記載では、13世紀後半に位置付けられているが瓦器皿のヘラミガキの状態からすると、13世紀後半までは下らないと考えられ、また木棺墓と関係があると推察される建物群付近の井戸からは13世紀前半頃に位置付けられる尾上編年Ⅲ-1期相当の瓦器塊が出土している。したがって本稿では、13世紀代という位置付けのみしておきたい。
- 註21 橋田正徳氏から御教示頂いた。
- 註22 藤澤典彦1989「中世の墓地ノート」『仏教芸術』182号毎日新聞社
- 註23 木下密運1986「中世の墳墓」『日本歴史考古学を学ぶ（中）』有斐閣
- 註24 勝見（坂田）孝彦1993「近江中世の土壙墓と輸入陶磁器に関する若干の検討」『貿易陶磁研究』13  
本文中で引用した遺構・遺物は図版作成の都合上、一部改変したものを含めてすべて再トレー  
スしたものである。

### 第3節 考古地磁気年代推定

この考古地磁気年代推定用の試料は平成11年11月26日にDNT99-1 S R 1の焼土から採取した。

#### 1 考古地磁気年代推定の基礎

磁石は北を指す。地球には地磁気が存在するためである。地磁気はベクトル量であり、ある地点における地磁気を記述するために、方向(偏角と伏角)と大きさ(全磁力)が必要である。一般に、磁気コンパスの磁針が指す北(磁北)は、真北(地図の経線方向)からはずれている。この磁北と真北の間の角度が偏角である。磁針をその重心で支え、磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面の下になるように傾く。この傾斜角が伏角である。河内長野市の現在の偏角は約6.7°Wで、伏角は約48°である。また、全磁力は、約0.45エルステッドである。これら地磁気の三要素(偏角・伏角・全磁力)は観測する地点によって異なる値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気分布は、地球の中心に棒磁石を置いたときにできる磁場の分布に近似される。この棒磁石の軸方向は、自転軸から約11.5°傾いている。この磁軸と地表との交点が地磁気北(南)極である。

地磁気は絶えず変動し、時代と共にその地磁気北極の位置を変える。従って、ある地点で観測される偏角・伏角の値も時代と共に変化する。方向だけではなく、大きさ(全磁力)も変化する。この変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

歴史時代の地磁気永年変化は、岩石や焼土の残留磁化の測定を基礎とする考古地磁気測定によって明らかにできる。どんな物質でも、ある(強)磁場中に置かれると磁化を帯び、そして磁場が取り除かれると、普通の物質からは磁化が消える。しかし、強磁性物質(磁石になる物質)では、外部磁場が消えても磁化が残る。これが残留磁化である。残留磁化の強さや安定性は、磁化を獲得する時の条件によって異なる。残留磁化はその獲得方法の違いによっていろいろな名前で呼ばれる。考古地磁気学で地磁気の化石として最もよく利用するのが熱残留磁化である。岩石には小量の強磁性粒子(赤鉄鉱や磁鉄鉱などの鉄の酸化物)が含まれている。火成岩では、高温のマグマの状態から冷えて岩石になる過程で、強磁性粒子がその時の地磁気によって磁化を帯び、冷えてからはその残留磁化を保持し続ける。これが熱残留磁化である。土も焼かれると、冷却の過程で同様の熱残留磁化を獲得する。熱残留磁化の性質を簡単にまとめると、次のようになる。岩石の誕生時または土が焼かれた時の地磁気方向を記録していて、その大きさは地磁気の大きさに比例し、何億年もの長い期間でも変質しない。これらの性質によって、地磁気の化石として利用が可能なのである。遺跡の焼土の熱残留磁化測定から得られた過去2,000年間の西南日本における偏角-伏角の変化を第図に示す。偏角は20°Wから15°E、伏角は35°から60°の間で変化

している。第図のような地磁気永年変化の標準曲線が得られると、逆に、年代の確かでない遺跡の焼土の残留磁化を測定し、永年変化曲線と比較することで、その年代の推定を行うことができる。これが考古地磁気による年代推定である。この方法は<sup>14</sup>C法やフィッシュョン・トラック法のような放射(絶対)年代測定法とは異なり、それだけで独立して年代を決定できない。普通、偏角と伏角の組合せで永年変化曲線から2つか3つの候補年代が出てくる。そのうちの何れを採用するかは、考古学的推定に頼ることになる。

従来、考古地磁気年代推定では、二次磁化を除去するための消磁実験は行われていなかった。考古地磁気試料として用いられる焼土は、焼成温度がキューリー温度以上の高温に達していれば、その熱残留磁化は非常に安定なものであると考えられること。さらに、せいぜい2000年前までの歴史時代のものを測定の対象としているため、二次磁化の主成分である粘性残留磁化(VRM)は少量しか付いていないと推定されたためである。しかし、近年、測定機器の性能の飛躍的な向上により測定精度が高くなり、わずかな二次磁化の影響も識別できるようになってきた。そこで、中島・谷崎(1990)は、考古地磁気試料について段階交流消磁実験を実施し、考古地磁気試料にも消磁実験が必要であることを明らかにした。そこで、本報告でも交流消磁を全試料について実施し、図3の地磁気永年変化曲線の偏角-伏角図上にその残留磁化測定結果をプロットし、誤差角( $\alpha_{95}$ )を考慮した上で年代を推定を行った。

## 2 試料の採取と測定

### (1) 試料採取方法

遺構の焼土から次の様な手順で試料を採取する。

- ① 焼土面に先の尖ったハンマーで、1辺が数cm程度の立方体試料を取り出すための溝を、試料が床面から外れないように、手で押さえながら丁寧に掘る。
- ② 溝を掘り終わった後、掘り込み作業中に試料表面についた砂や石を刷毛で丹念に取り除く。
- ③ 薄く溶いた石膏をビニール袋に入れ、試料全体にかけて表面を補強する。
- ④ 乾燥後、やや固めの石膏を試料上面にかけ、1辺5cmの正方形のアルミ板をすばやく押しつける。石膏が固まるのを待ち、アルミ板を外す。
- ⑤ アルミ板を用いて作った平面の最大傾斜の方位と傾斜角を、考古地磁気用磁気コンパス(Hirooka, 1971)で測定し、平面上に方位測定位置を示すマーク(平面を定義する3つの点)と試料番号を記入する。
- ⑥ ハンマーで試料を掘り起こし、試料の底面を石膏で補強し、新聞紙等に包み持ち帰る。

### (2) 試料整形方法

遺構で採取した試料はそのままでは測定できないので、試料整形を以下のように行う。

- ① 試料を1辺3.5cmの立方体に切断するために、プラスチックの型板(34×34 mmの正方形)を利用し枠取りの線を引く。この時、型板のマークと試料表面の方位測定位置を示すマーク(3点)を合わせる。
- ② 試料温度が上がるのを防ぐために冷却水をかけながら、ダイヤモンド・カッターで1面ずつ切断する。切断面が崩れないように石膏で補強し、次の面の切断を行う前に試料を充分乾燥させる。この作業を5回繰り返すと立方体試料が得られる。
- ③ 試料表面についた余分な石膏をカッターで削り落とす。

#### (3) 残留磁化測定方法

残留磁化は、当社製のリング・コア型スピナ-磁力計(SMD-88型)を用いて測定した。交流消磁実験には二軸回転方式の当社製DEM-8601-2型を使用した。この装置は、三層の円筒 $\mu$ -メタルによって外部磁場(地磁気)は10mT(ミリテスラ)以下にシールドされている。以下に今回実施した残留磁化測定と交流消磁の方法について述べる。

- ① 採取した全試料について、自然残留磁化(NRM)測定を行う。
- ② NRM測定結果をみて、段階交流消磁実験を行うバイロット・サンプルを各遺構より1個選ぶ。
- ③ バイロット・サンプルを5、10、15、20、30、40、50mTの各磁場で順に消磁し、その都度、残留磁化を測定する。各消磁段階の測定結果を消磁ベクトル図(Zijderveld, 1967)に表し、同図の直線上にのる最適消磁強度を決定する。
- ④ 残りの試料を全て最適消磁強度で消磁し、その残留磁化を測定する。そして、その平均値(バイロット・サンプルのデータを含む)を、年代推定のための考古地磁気データとして採用する。

#### (4) データ整理

測定結果として得られるデータは、試料に設定した座標に対するものなので、試料を遺構のもとの位置に戻した時の真北を基準方向とする座標に対するものに変換しなければならない。そのためには、試料が残留磁気を獲得した時の位置(地理的緯度、経度)、および方位(試料の一つの基準面の走向、傾斜)が必要である。位置については、1/25,000程度の縮尺の地形図から、その遺構の緯度、経度を読み取ればいい。方位は、試料採取の作業で磁気コンパスを使って測定している。磁気コンパスの方位は、磁北に対するものなので、真北に対する方位に直すために、試料採取地点の現在の偏角分を補正する必要がある。現在の地磁気偏角は、国土地理院の偏角分布の実験式から求めることができる。

測定にはいろいろな要因での誤差がつきものであるため、一つの遺構から8~10個程度の試料を採取している。これらの試料の個々の測定で得られた偏角(Di)、伏角(I)から平均値(Dm, Im)を求める。ここで用いる統計学的方法はFisherによって確立されたものであ

る。各試料の測定値を、方向( $D_i$ ,  $I_i$ )の単位ベクトルとして取り扱う。

まず、 $n$ 組の( $D_i$ ,  $I_i$ )より

$$N = \sum \cos I_i \cdot \cos D_i \quad (\text{北向きの成分})$$

$$E = \sum \cos I_i \cdot \sin D_i \quad (\text{東向きの成分})$$

$$Z = \sum \sin I_i \quad (\text{鉛直の成分})$$
を求めるとき、合ベクトルの大きさ $R$ 、および $D_m$ 、 $I_m$ は、

$$R = (Z^2 + N^2 + E^2)^{1/2}$$

$$D_m = \tan^{-1} E / N$$

$$I_m = \sin^{-1} Z / R \quad \text{で与えられる。}$$

このとき、信頼度係数 $k$ は、

$k = (n-1) / (n-R)$ となる。 $k$ が大きいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では数百の値になる。

誤差角 $\alpha_{95}$ は、危険率5%として

$$\alpha_{95} = \cos^{-1} [1 - (n-R/R) \cdot [(1/0.05)^1 / (n-1) - 1]] \quad \text{で与えられる。}$$

$\alpha_{95}$ が小さいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では数度以内になる。

これより $D_m$ 、 $I_m$ のそれぞれの誤差の幅として、

$$\delta D = \alpha_{95} / \cos I_m \quad (\text{偏角誤差})$$

$$\delta I = \alpha_{95} \quad (\text{伏角誤差})$$

が求められる。

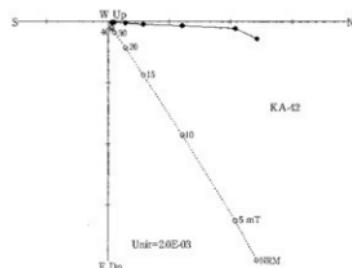
以上のようにして得られた計算結果を、一つの遺構を代表する考古地磁気データとしている。

なお、考古地磁気年代推定の原理や測定方法については、中島・夏原(1981)に詳しく解説されている。

### 3 残留磁化測定結果

大日寺遺跡で発掘調査された焼土遺構より8個の考古地磁気用の定方位試料を採取し、熱残留磁化を測定した。熱残留磁気測定結果を第8表と第92~94図に示した。現在の地磁気偏角の補正は、国土地理院の1990年磁気偏角図から読み取った $6.7^{\circ}\text{W}$ を使用した。

磁化の安定性を確かめるために行ったパイロットサンプルKA-42の段階交流消磁の結果を第92図に示す。この図はZijderveld図又は消磁ベクトル図と呼ばれ、同図の黒



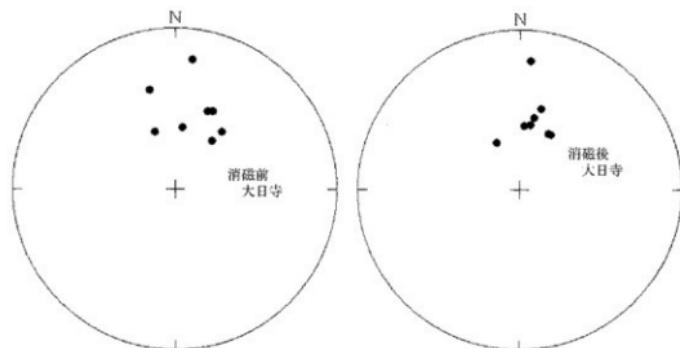
第92図 パイロットサンプルKA-42の直交ベクトル図

丸は水平成分、白丸は鉛直成分を表している。S(南), N(北), E(東), W(西)は水平成分の方向、U p(上向き), D n(下向き)は鉛直の方向である。白丸の横に記した数字は交流消磁の強度で、単位はmT(ミリテスラ)である。この図で、丸印の間をむすんだ直線がその消磁段階で消された磁化ベクトルとなる。磁化の各成分は図上では直線上に並ぶ点の列で表される。特に考古地磁気試料のような単純な受熱を持った試料では問題とする初期磁化は原点に向う直線として表される。

第92図を見ると、非常に安定で5 mTで二次磁化が消磁され、あとは原点に向って消磁されている様子がわかる。段階消磁の結果より最適消磁強度を15 mTと判断して、残りの試料すべてを15 mTで消磁を行った。

今回の残留磁化強度は、10.3emu程度であり良く焼けていると思われるが、2個の試料が平均磁化方向から外れている。磁化強度もあり、焼成不足は考えられず、焼成された後に動いたことがわかる。

消磁後の磁化方向の外れたものを除外して平均磁化方向とバラツキの程度を表すバラ



第93図 消磁前(NRM)と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図

試料名	交流消磁前			交流消磁後 消磁強度 = 15mT		
	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^{-3}$ emu	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^{-4}$ emu
KA-41	25.8	45.2	1.47	11.5	51.9	3.52
KA-42	6.7	58.0	9.17	4.6	56.6	21.0
KA-43	-15.0	36.3	1.36	9.7	55.8	2.90
KA-44	-20.1	58.6	8.15	-26.6	62.8	29.2
KA-45	37.5	58.6	1.32	27.3	57.2	3.53
KA-46	22.8	46.0	3.19	15.0	46.1	1.40
KA-47	39.3	51.8	0.83	29.9	57.2	2.48
KA-48	7.6	19.4	7.57	5.0	20.1	21.6

第8表 熟残留磁気測定結果

メータを求めた。偏角と伏角の平均値についての信頼度パラメタ  $k$  は 126.1、誤差角  $\alpha_{95}$  は  $6.0^\circ$  であり、信頼度の低いまとまりの悪いデータと言える。

第8表は個々の試料の熱残留磁気測定結果(D<sub>m</sub>, I<sub>m</sub>)である。第93図は消磁前と15mTでの消磁後の磁化方向の等面積投影図である。

第8表に消磁前と消磁後についての、磁気方向の平均値(D<sub>m</sub>, I<sub>m</sub>)、誤差角( $\alpha_{95}$ )と信頼度係数(k)、および平均磁気強度を示した。試料数 n は平均値(D<sub>m</sub>, I<sub>m</sub>)を計算した試料数である。括弧内の数字は測定した試料数である。

#### 4 年代推定

西南日本の地磁気永年変化曲線(広岡、1977)に第9表の消磁後の測定結果をプロットする

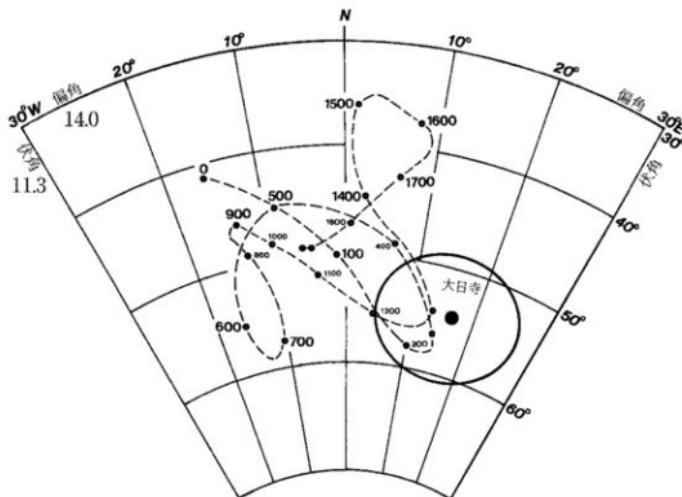
(1) 交流消磁前の測定結果

遺構名	試料数 n	D <sub>m</sub> ( $^{\circ}$ E)	I <sub>m</sub> ( $^{\circ}$ )	$\alpha_{95}$ ( $^{\circ}$ )	k	平均磁化強度 $\times 10^{-3}$ emu
大日寺	8	1.25	48.6	13.8	17.0	4.13

(2) 交流消磁後の測定結果

遺構名	試料数 n	D <sub>m</sub> ( $^{\circ}$ E)	I <sub>m</sub> ( $^{\circ}$ )	$\alpha_{95}$ ( $^{\circ}$ )	k
大日寺	6 (8)	16.1	54.5	6.0	126.1

第9表 考古地磁気測定結果(平均磁化方向)



第94図 広岡により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた過去2000年間の地磁気永年変化曲線と測定結果(黒丸は平均磁化方向、横棒は誤差角  $\alpha_{95}$  の範囲を示す。)

と第94図のようになる。黒丸が平均磁化方向で、それを囲む楕円は誤差角  $\alpha$  95の範囲を示している。本来ならば黒丸は永年変化曲線上に並ぶはずであるが、実際には永年変化曲線の不確かさや、測定時の誤差、試料採取時の誤差、磁化獲得の強弱、遺構の傾動などいろいろな誤差が積算されて永年変化曲線上には並ばないことが多い。永年変化曲線が地磁気の方向を正しく示しているとして、平均磁化方向に一番近い曲線の年代が考古地磁気推定年代となる。第94図の平均磁化方向(黒丸)は4世紀と14世紀の曲線に良く接近している。

考古学年代と楕円の誤差角を考慮すると推定年代は13世紀前半～14世紀中頃と思われる。

今回の測定は試料数も少なく、誤差角も大きく信頼度も低いことから時期のみの提示とした。採集した焼土遺構は多くの石が敷き詰められていて、考古地磁気の測定に適した試料を取ることが出来る場所が無かった。無理をして可能なかぎり採取したが、それで8個が精一杯であった。段階交流消磁の結果から非常に安定な磁化を獲得していることから良い条件で試料を採集していれば、もう少し良い結果が期待できたと思われる。

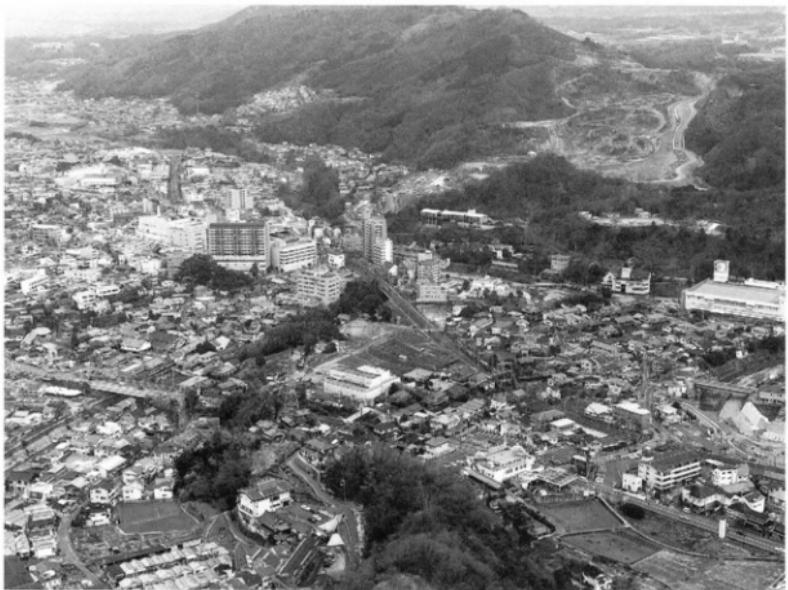
## 5 引用文獻

- Hirooka, K. (1971) : Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan. Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral, 38, 167-207.
- 広岡公夫(1977) : 考古地磁気および第四紀考古地磁気研究の最近の動向. 第四紀研究, 15, 200-203.
- 中島正志・夏原信義(1980) : 考古地磁気年代推定法. 考古学ライブラリー 9。ニュー・サイエンス社。
- 中島正志・谷崎有里(1990) : 考古地磁気試料の交流消磁実験. 福井大教育紀要.
- Shibuya, H. (1980) : Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大基礎工修論, 54p.
- Zijderveld, J. D. A. (1967) : A. C. demagnetization of rocks : analysis of results. In Methods in paleomagnetism, Collinson et al. (eds.), 254-295, Elsevier Pub. Com.

# 図版



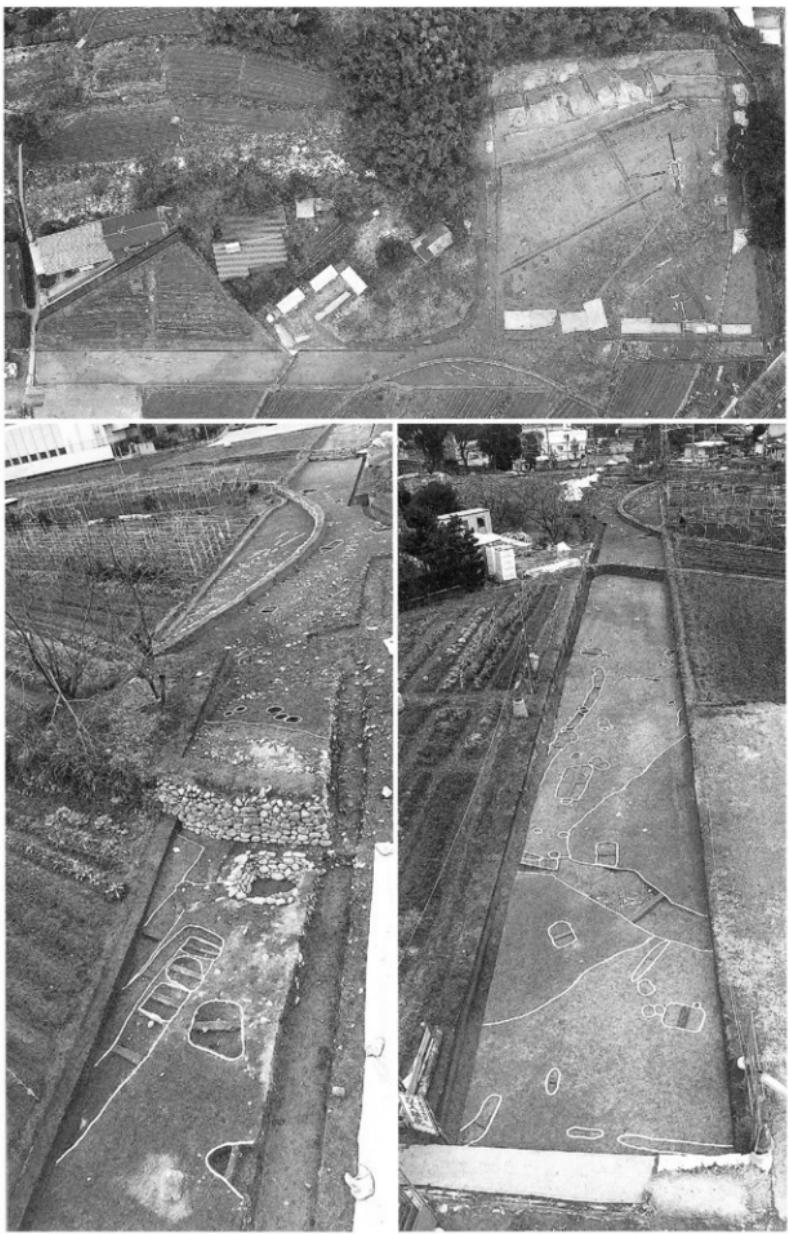
調査地遠景（東から）



調査地遠景（西から）



b~g・3~8区上層造構全景（上から）



c 7 ~ j 7 区上層構造全景 (東から)

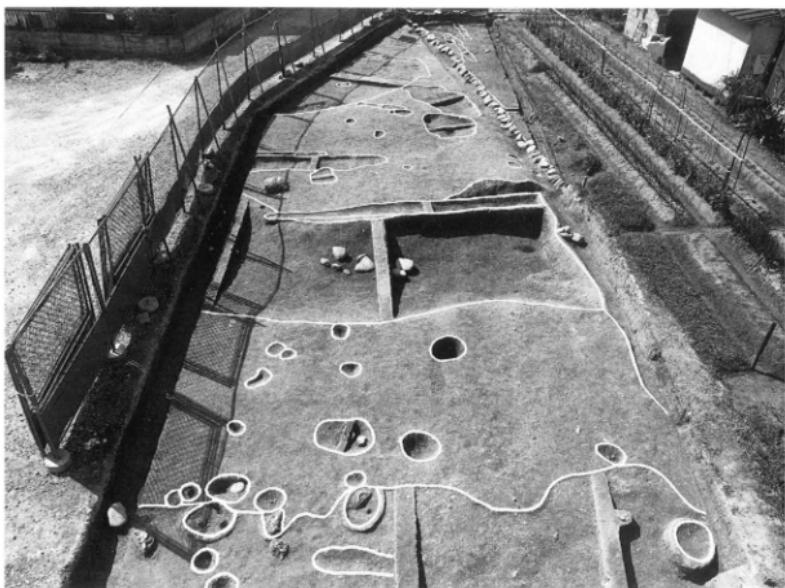
f 7 ~ n 7 区上層構造全景 (西から)



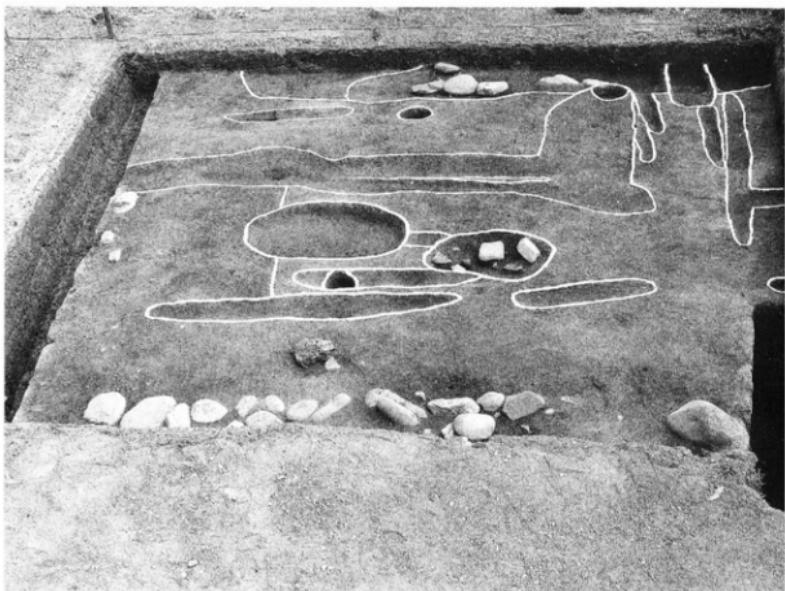
b ~ g . 3 ~ 8 区上層構造全景 (西から)



b ~ e . 5 ~ 8 区上層構造全景 (西から)



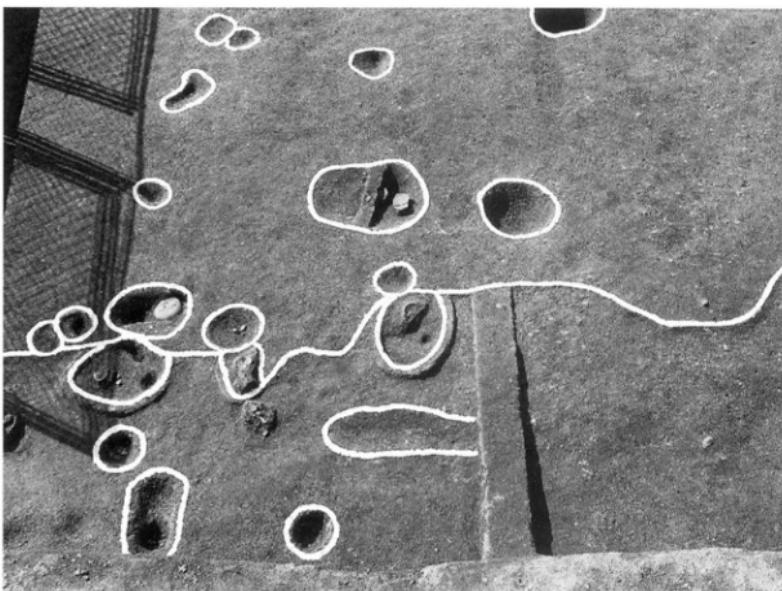
n 7～g 7 区上層遺構全景（東から）



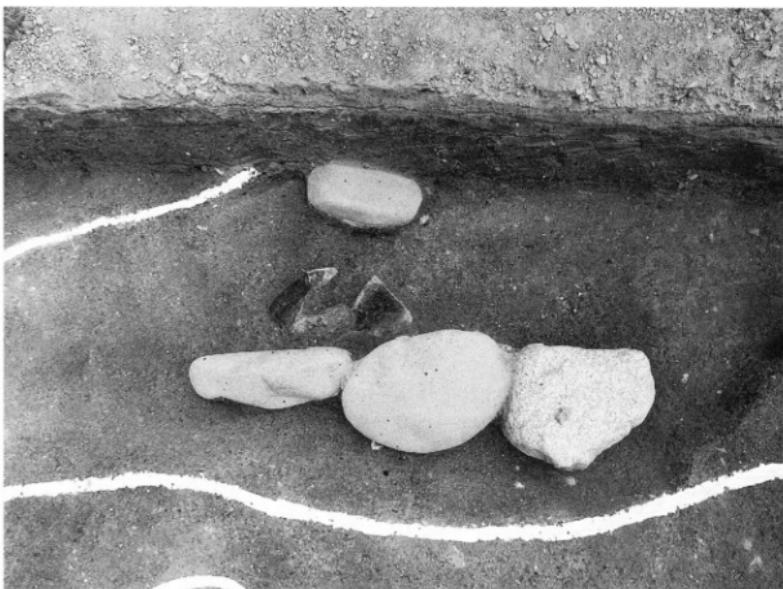
n 7 区上層遺構全景（東から）



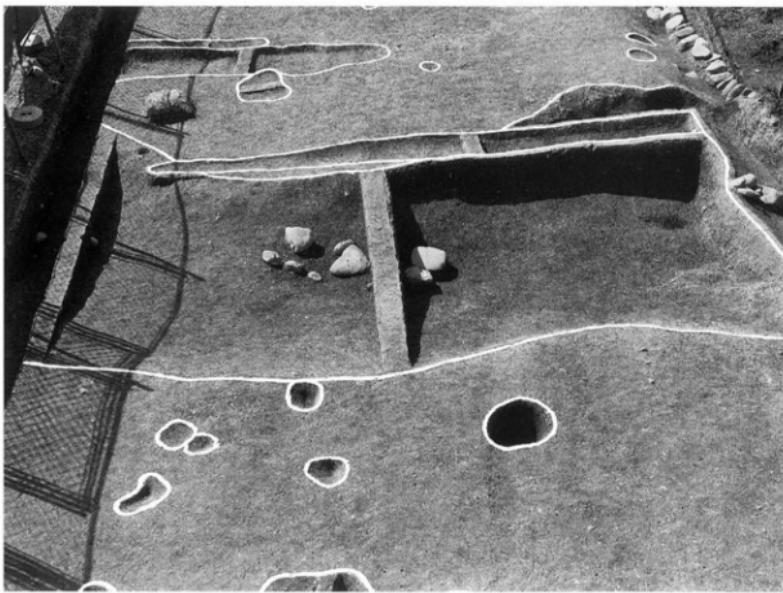
SD 2 (西から)



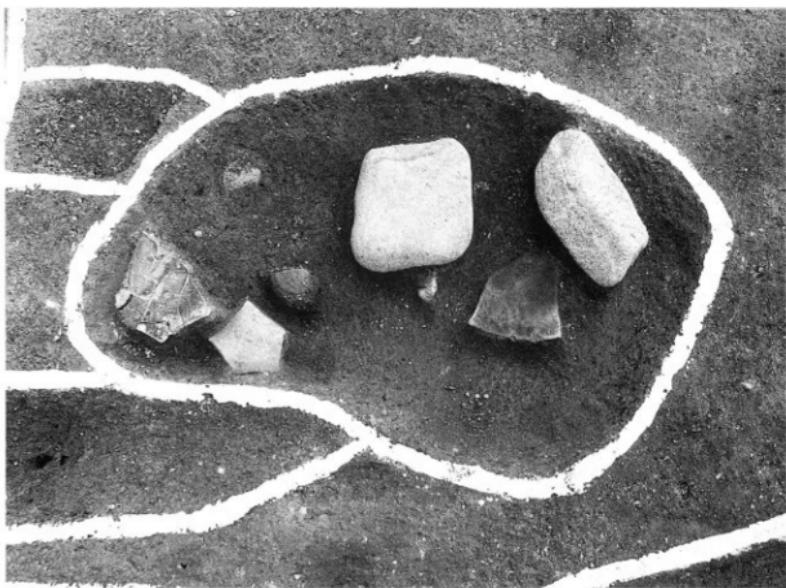
SD 3, SK 15~18 (東から)



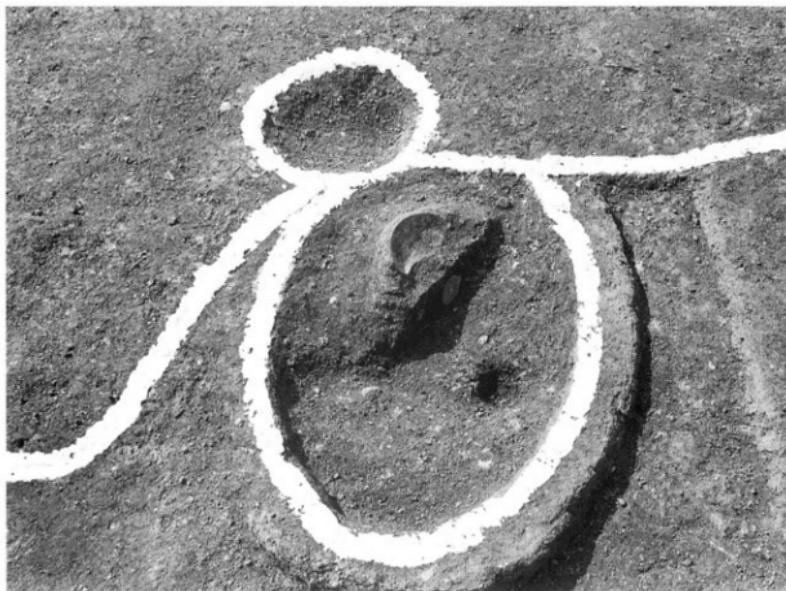
S D 3 (西から)



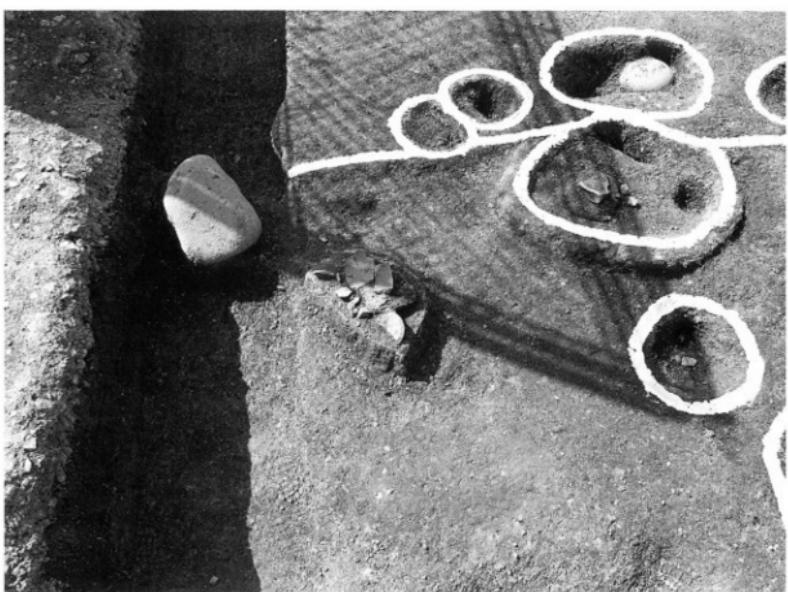
S D 4 ~ 6 (東から)



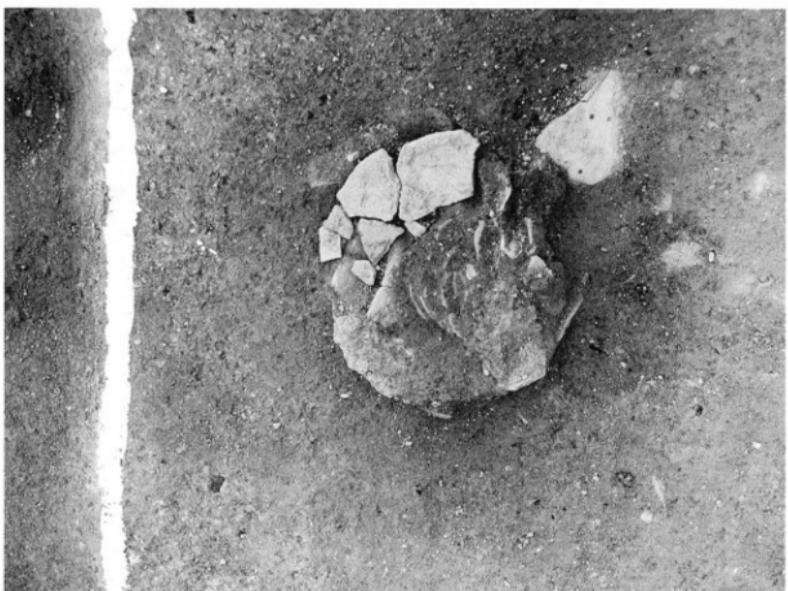
SK 13 (東から)



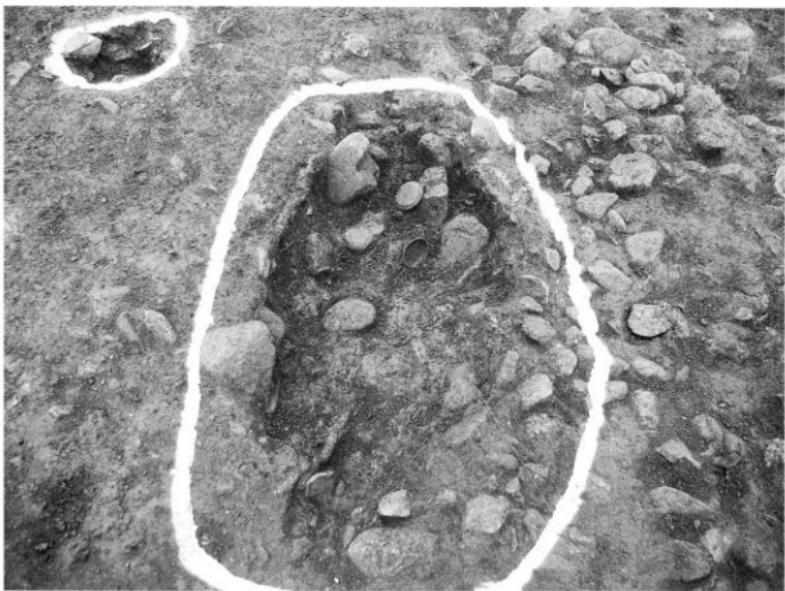
SK 15 (東から)



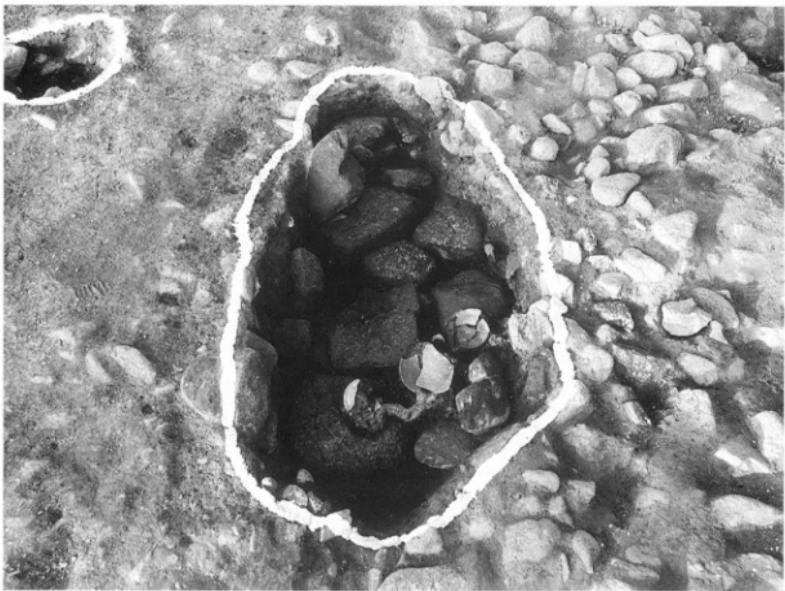
SK 17 (東から)



S O I 遺物出土状況



S R 1 (南から)



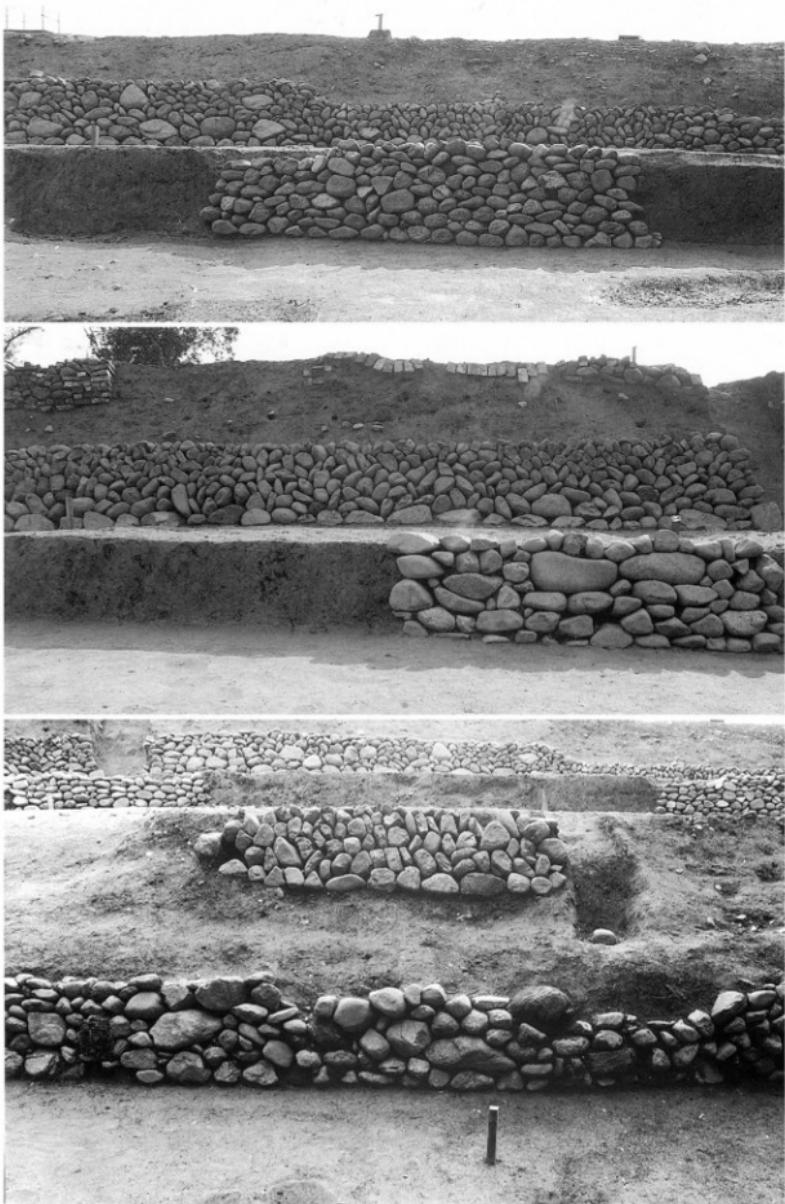
S R 1 完掘状況 (南から)



SW 1～5 (南から)



SW 1～5 (西から)



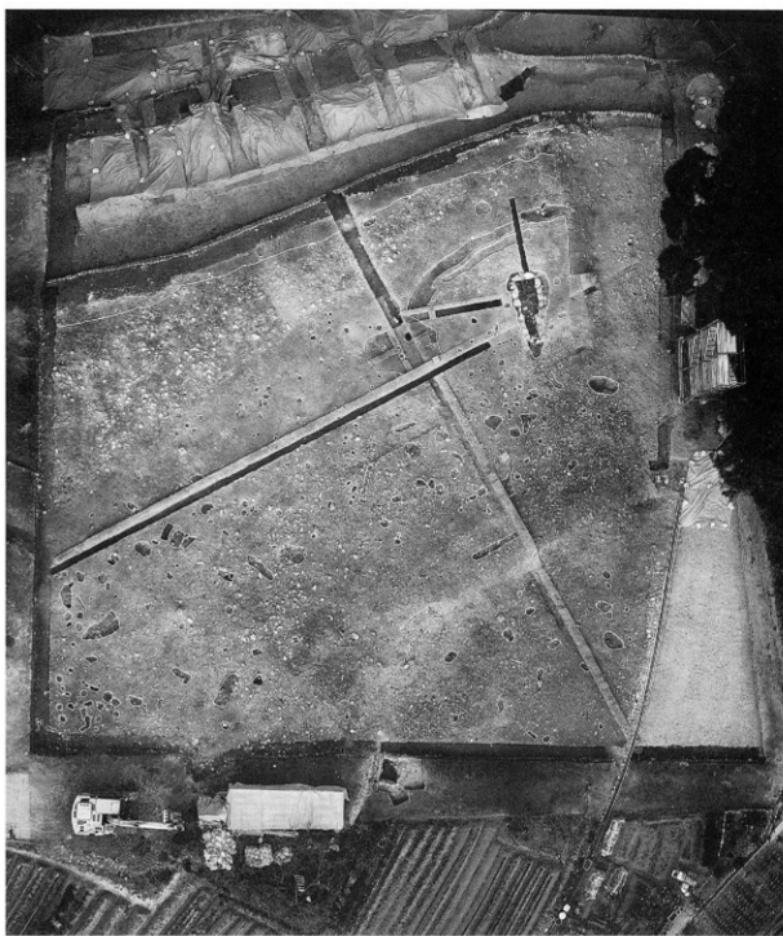
SW 1 ~ 5 (北から)



SW1～5（北から）



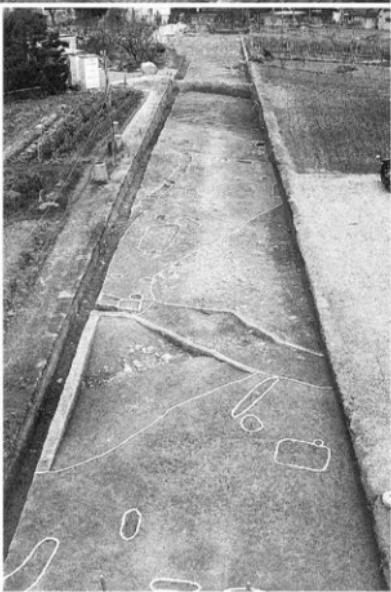
SW1～5（北から）



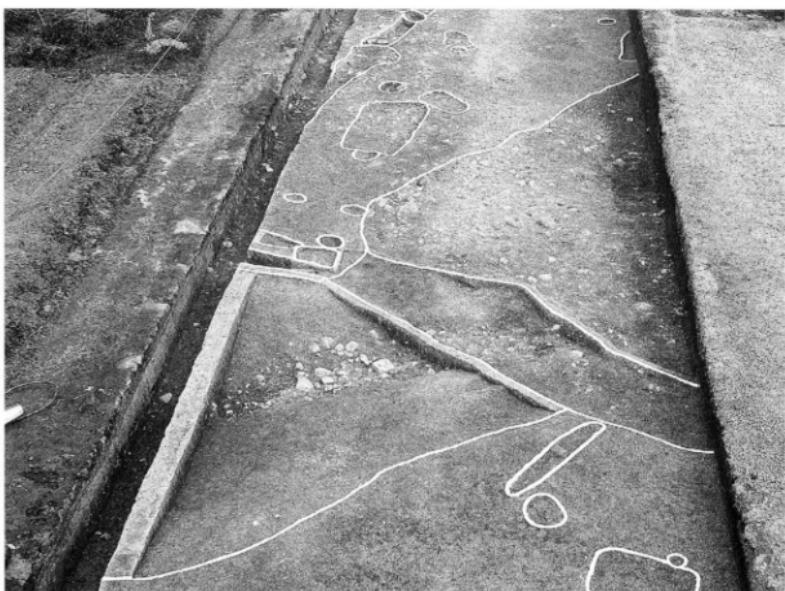
b ~ g • 3 ~ 8 区下層造構全景（上から）



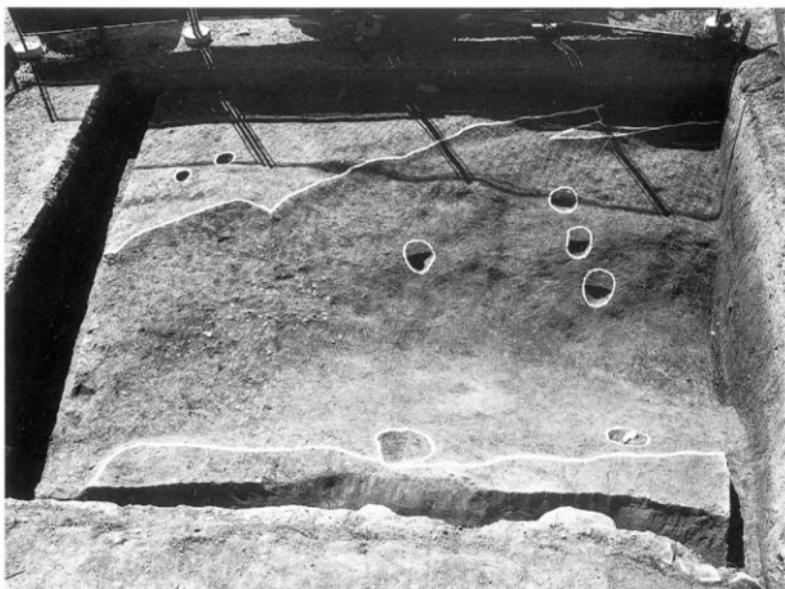
f 7～n 7区下層遺構全景（東から）



f 7～n 7区下層遺構全景（西から）



S D 9 (西から)



S D 10 (東から)



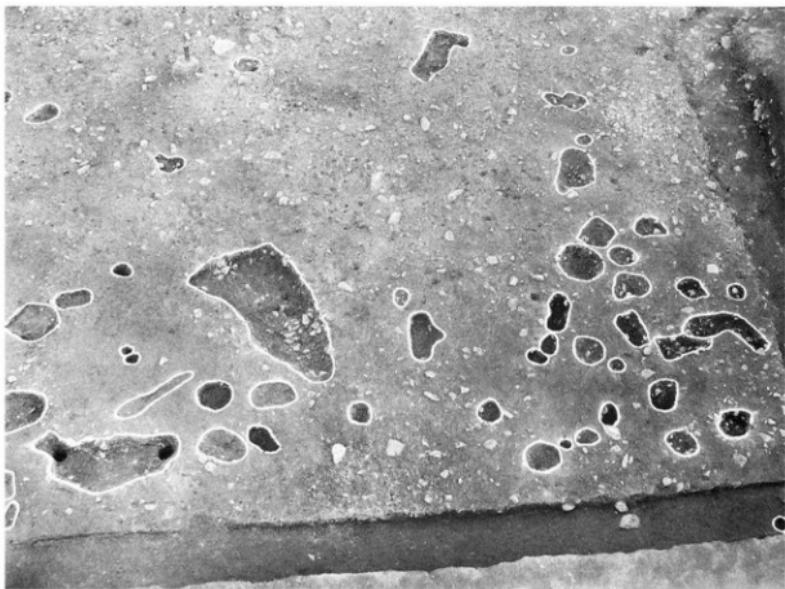
SK 35 (南から)



SK 39 (南から)



b ~ g + 3 ~ 8 下層遺構全景（西から）



柱穴群（西から）



S R 2 炭化物、骨出土状況



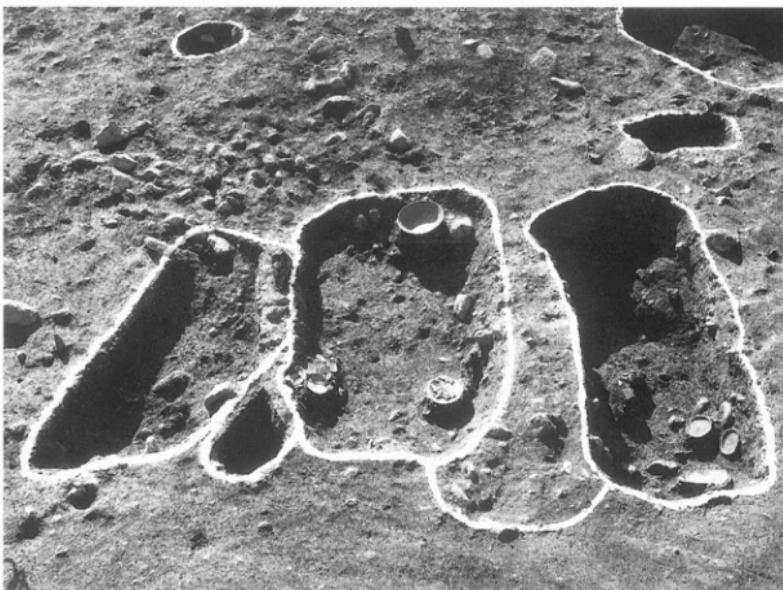
S R 2 遺物出土状況



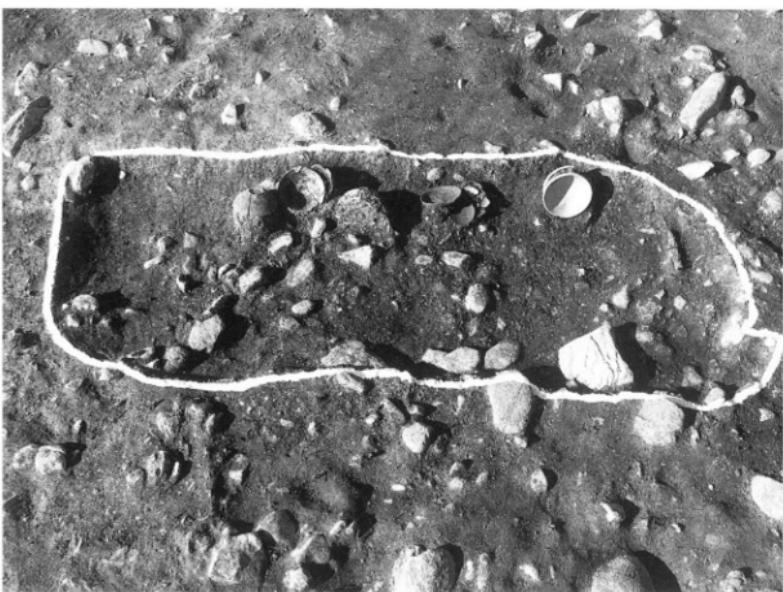
S R 2 (東から)



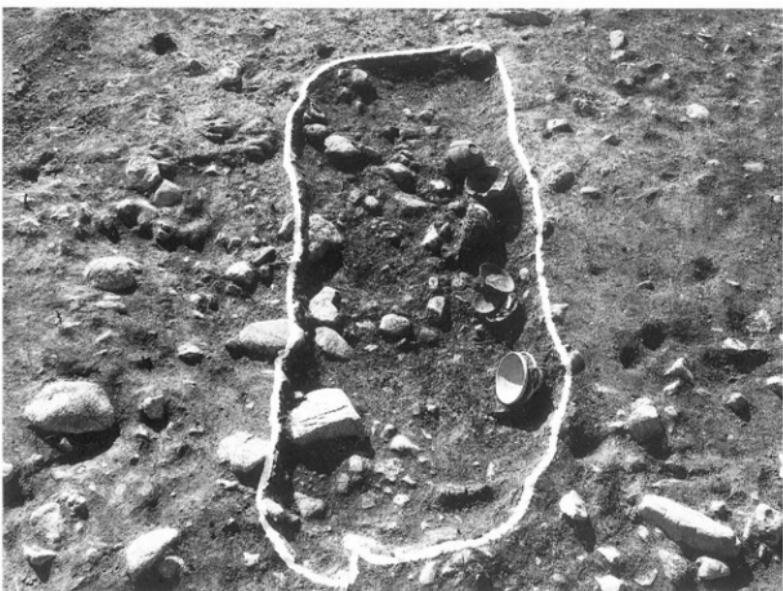
S R 3 ~ 5 (南から)



S R 3 ~ 5 (北から)



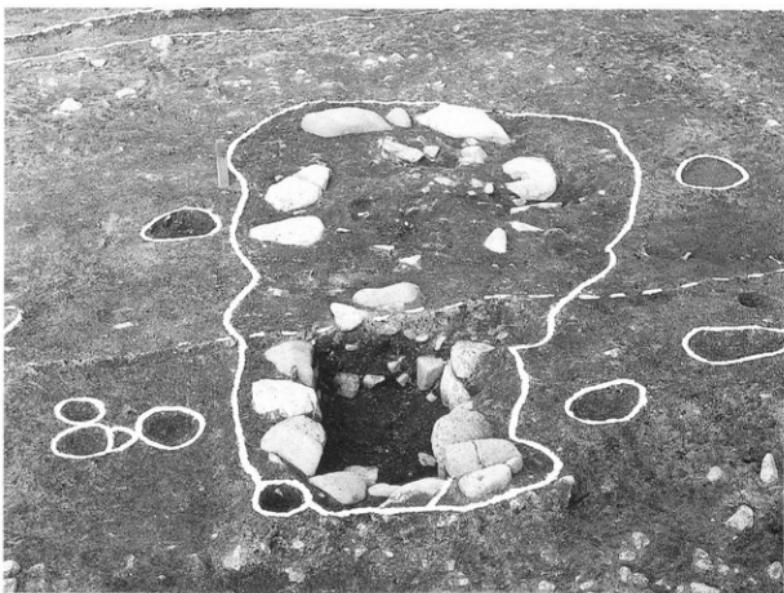
S R 6 (東から)



S R 6 (北から)



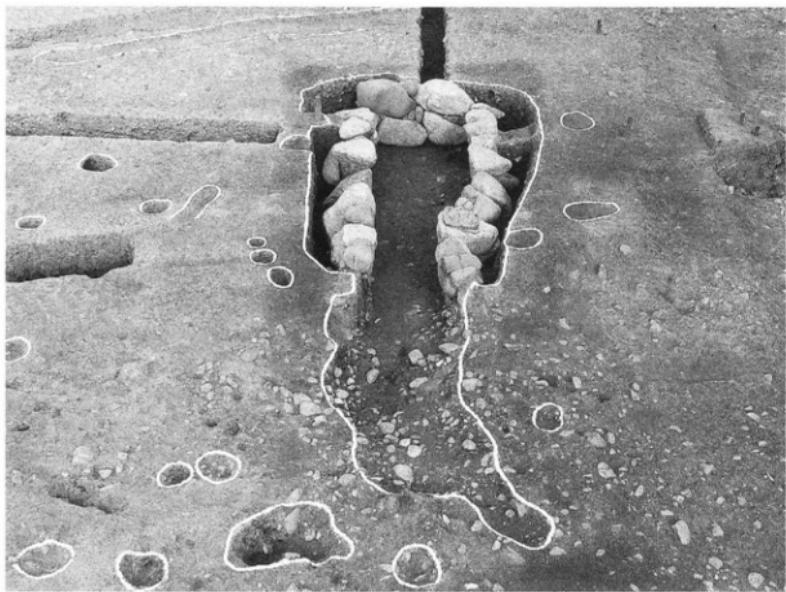
S T 1 検出状況（東から）



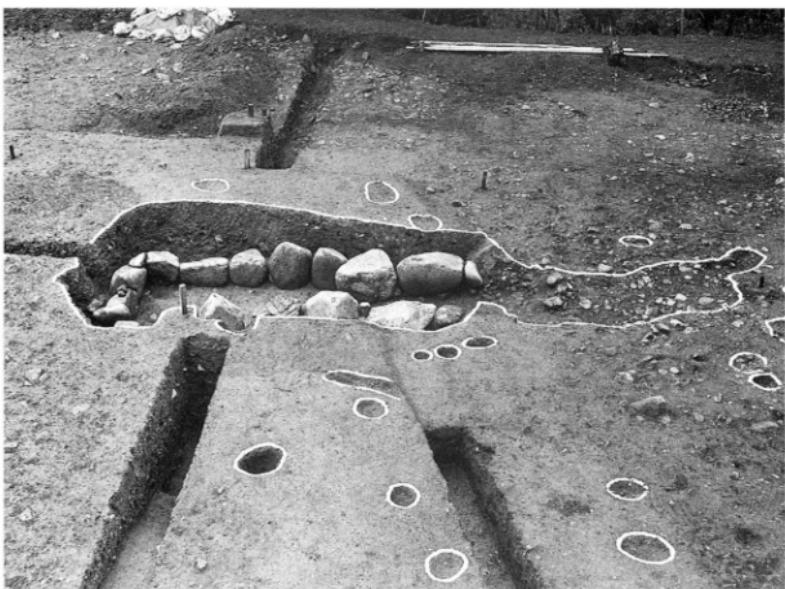
S T 1 石室検出状況（南から）



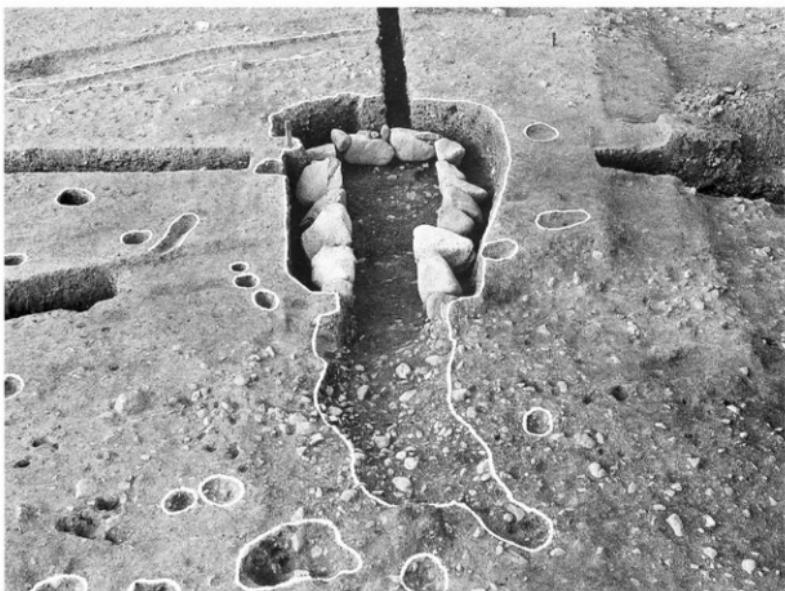
S T 1 石室及び堀形（西から）



S T 1 石室及び堀形（南から）



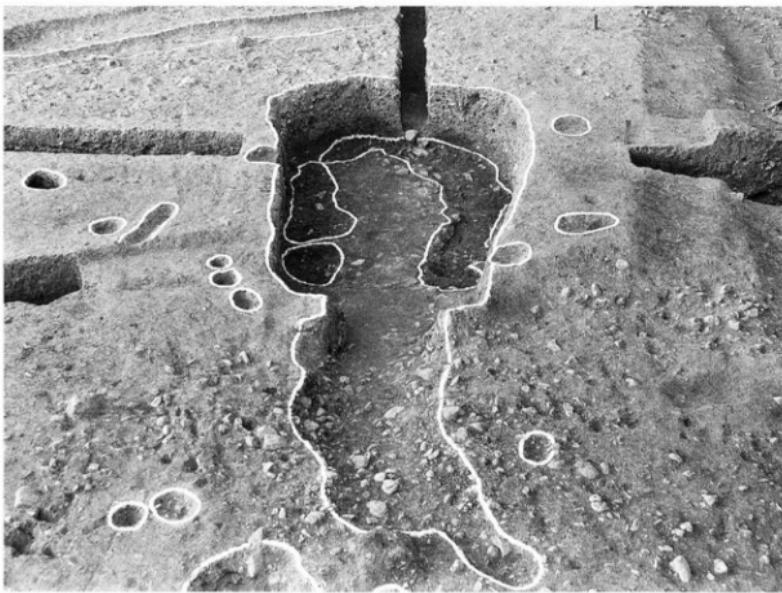
S T 1 基底石及び石室堀形（西から）



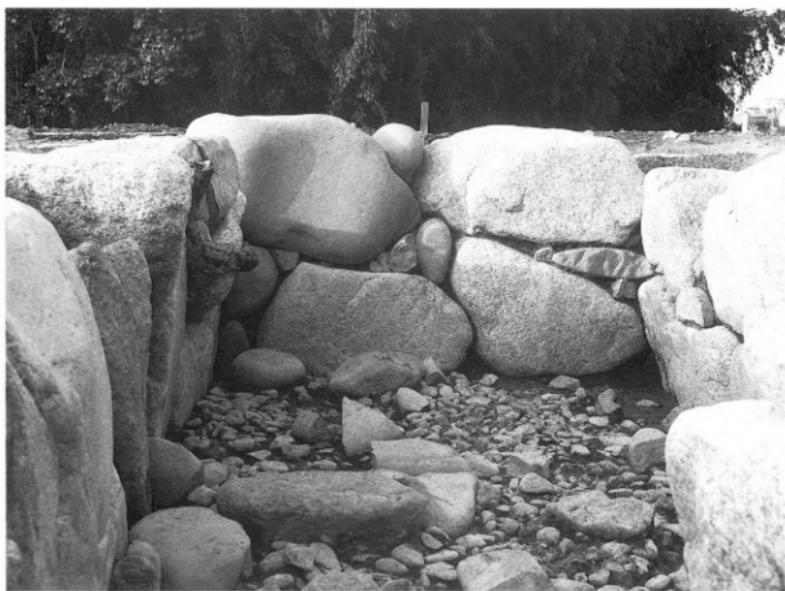
S T 1 基底石及び石室堀形（南から）



S T 1 石室堀形（西から）



S T 1 石室堀形（南から）



S T 1 奥壁 (南から)



S T 1 石室と羨道部 (北から)



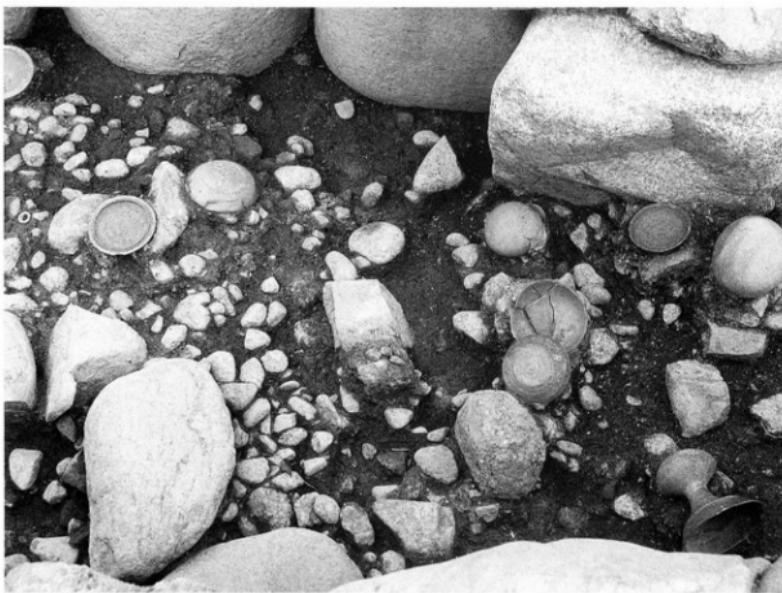
S T 1 西側壁（東から）



S T 1 東側壁（西から）



S T 1・1次面遺物出土状況北半部（西から）



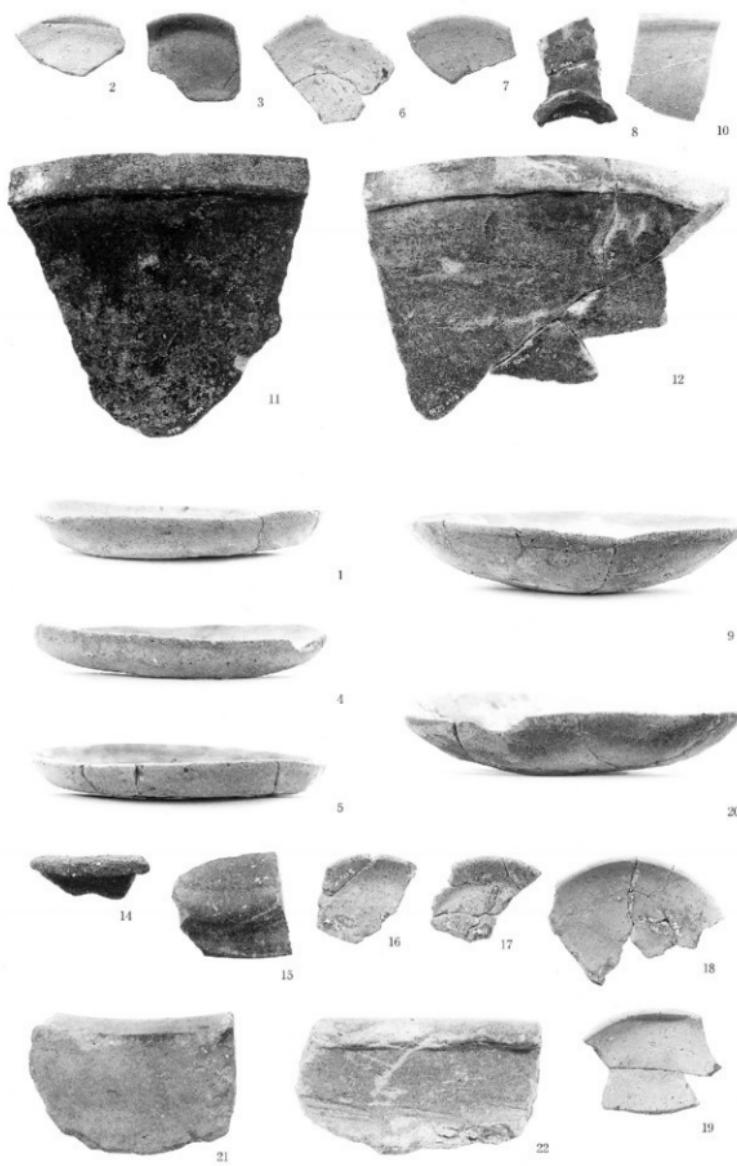
S T 1・1次面遺物出土状況南半部（西から）



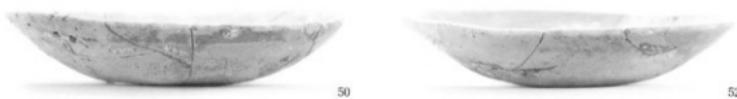
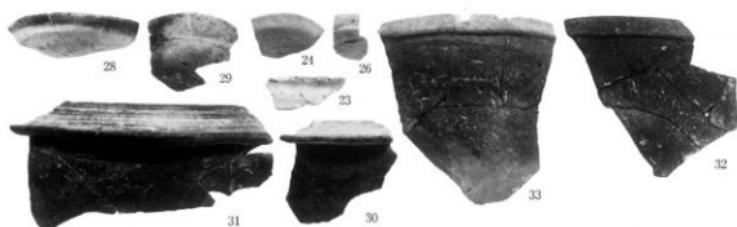
S T 1・2 次面遺物出土状況（南から）



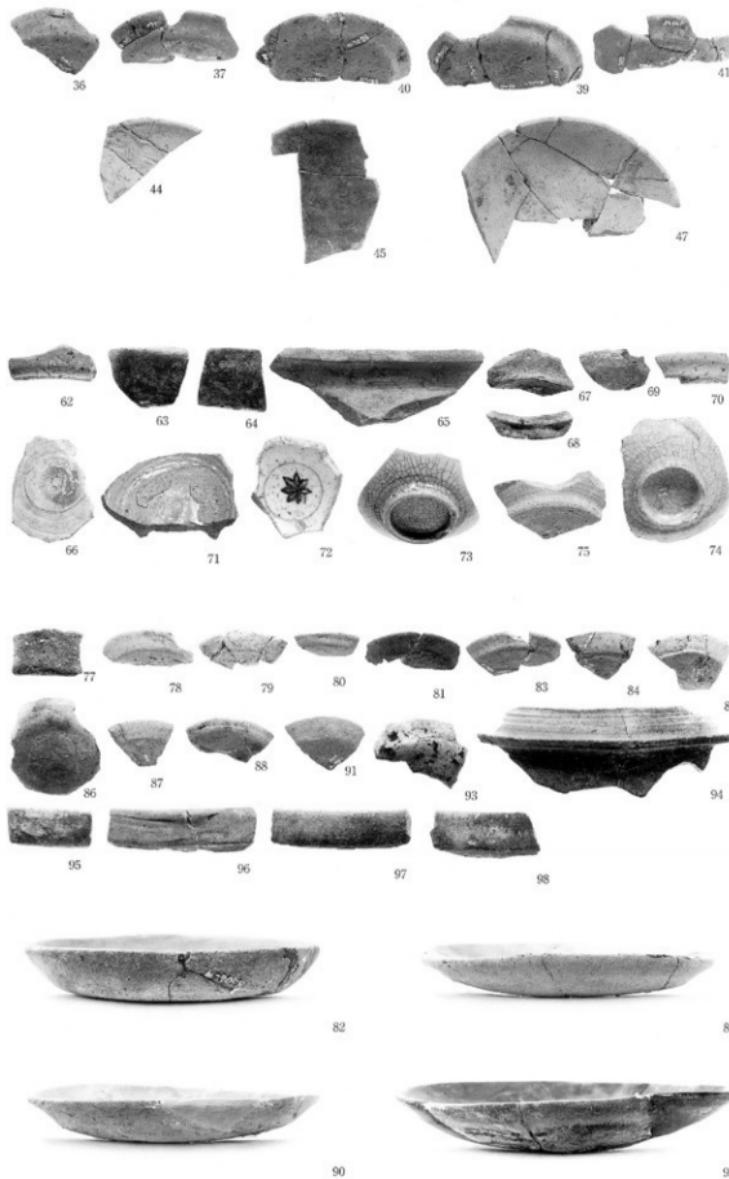
S T 1・3 次面遺物出土状況（西から）



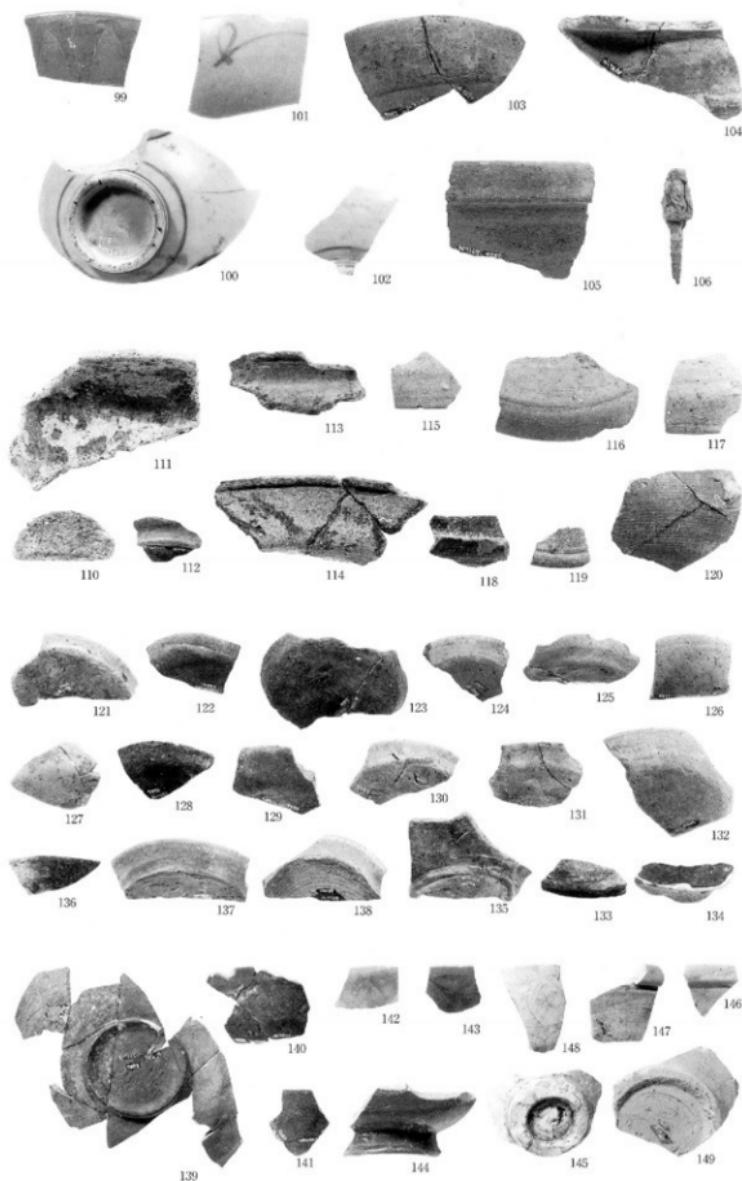
S D 3 (1 ~12), S D 4 (14~22)



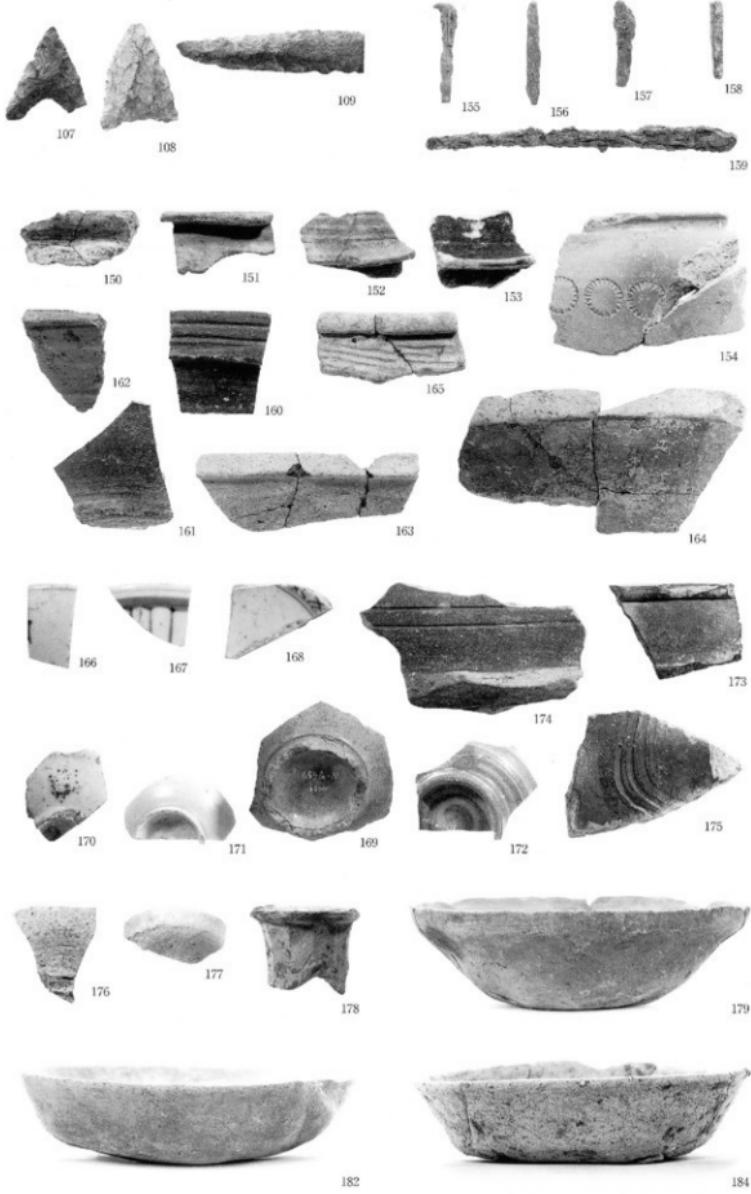
S K 10(23)、S K 13(24・32・33)、S K 15(28)、S K 16(27・29)、S K 17(26・30)、S K 18(31)  
S K 21(34・35)、S O 1(42・43・46・48～53)



S O 1 (36・37・39～41・44・45・47), S W 8 (62), S W 9 (63～66), S W 11(67～75)  
上層包含層(77～98)



上層包含層(99~106・110~149)



上層包含層(107~109・150~175)、S D 9(176・177)、S D 10(178)、S K 39(179・182・184)



185



188



180



181



183



186



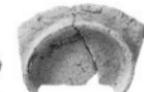
189



187



191



190



193



195



196



197



194



198



200



201



203



204



205



206



199



202



208



209



207



214



210



220



211



212



213



216



221



217



218



221

S R 2 (207~209)、S R 3 (210~214)、S R 4 (216~218・220・221)



223



224



215



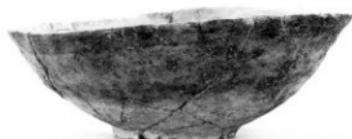
216



222



225



227



226



229



228

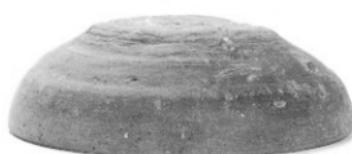


230



231

S R 4 (215), S R 6 (222~231)



237



236



233



234



235



238



239



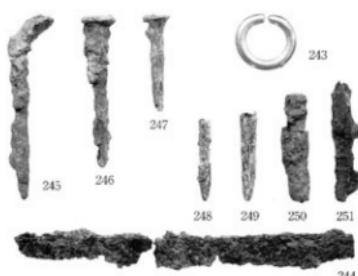
240



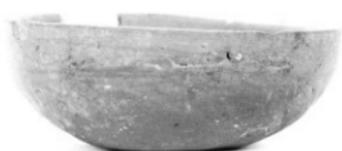
242



241



253



255



252



257



254



258



259



256



262



261

S T 1 · 1 次面(243~251)、S T 1 · 2 次面(252~259 · 261 · 262)



263



264



265



266



267



268



272

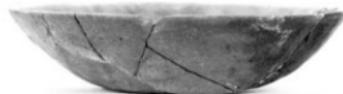
271

270

269



270



271



272



273

S T 1 · 2 次面(260・263・264)、S T 1 · 3 次面(266～268)、S T 1 · 扰乱坑(269～274)  
下層包含層(279・281・288)



289



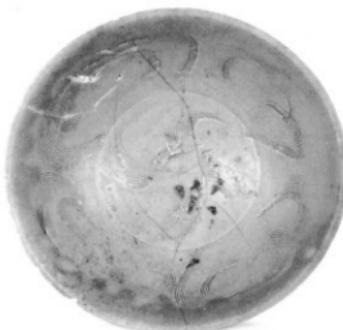
291



290



292



300



293



300



297



306



307



308



309



310



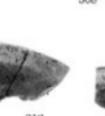
311



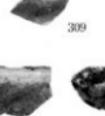
305



312



313



314



315



321



320

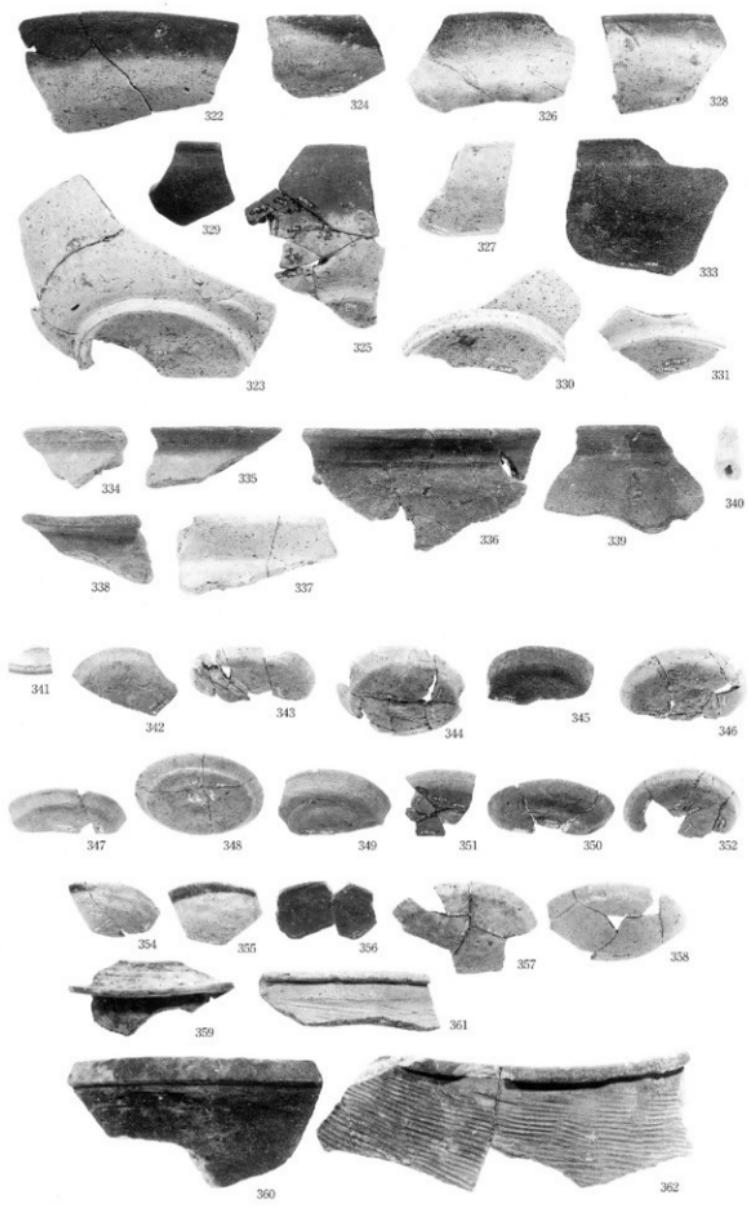


319



318

下層包含層(289～293・297・300・305～315・318～321)



下層包含層(322~331・333~352・354~362)

## 報告書抄録

ふりがな	だいにちじいせき
書名	大日寺遺跡
副書名	河内長野市遺跡調査報告XXV
シリーズ名	河内長野市遺跡調査報告
シリーズ番号	XXV
編著者名	尾谷雅彦 烏羽正剛 太田宏明 藤田徹也
編集機関	河内長野市教育委員会 河内長野市遺跡調査会
所在地	〒586-8501 大阪府河内長野市原町396-3 TEL 0721-53-1111
発行年月日	2001年3月31日

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
だいにちじいせき 大日寺遺跡	大阪府 河内長野市 喜多町	27216	府115 河 86	34° 26° 42"	135° 34° 24"	1999.8.6 2000.3.15	約5000m <sup>2</sup>	ポンプ場 建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大日寺遺跡	社寺	弥生～近世	古墳 土壙墓 石垣	須恵器 土師器 黒色土器 青磁 白磁 瓦器	横穴式石室を 検出

河内長野市遺跡調査報告 XXV

## 大日寺 遺 跡

---

2001年3月31日発行

発行 大阪府河内長野市原町396-3

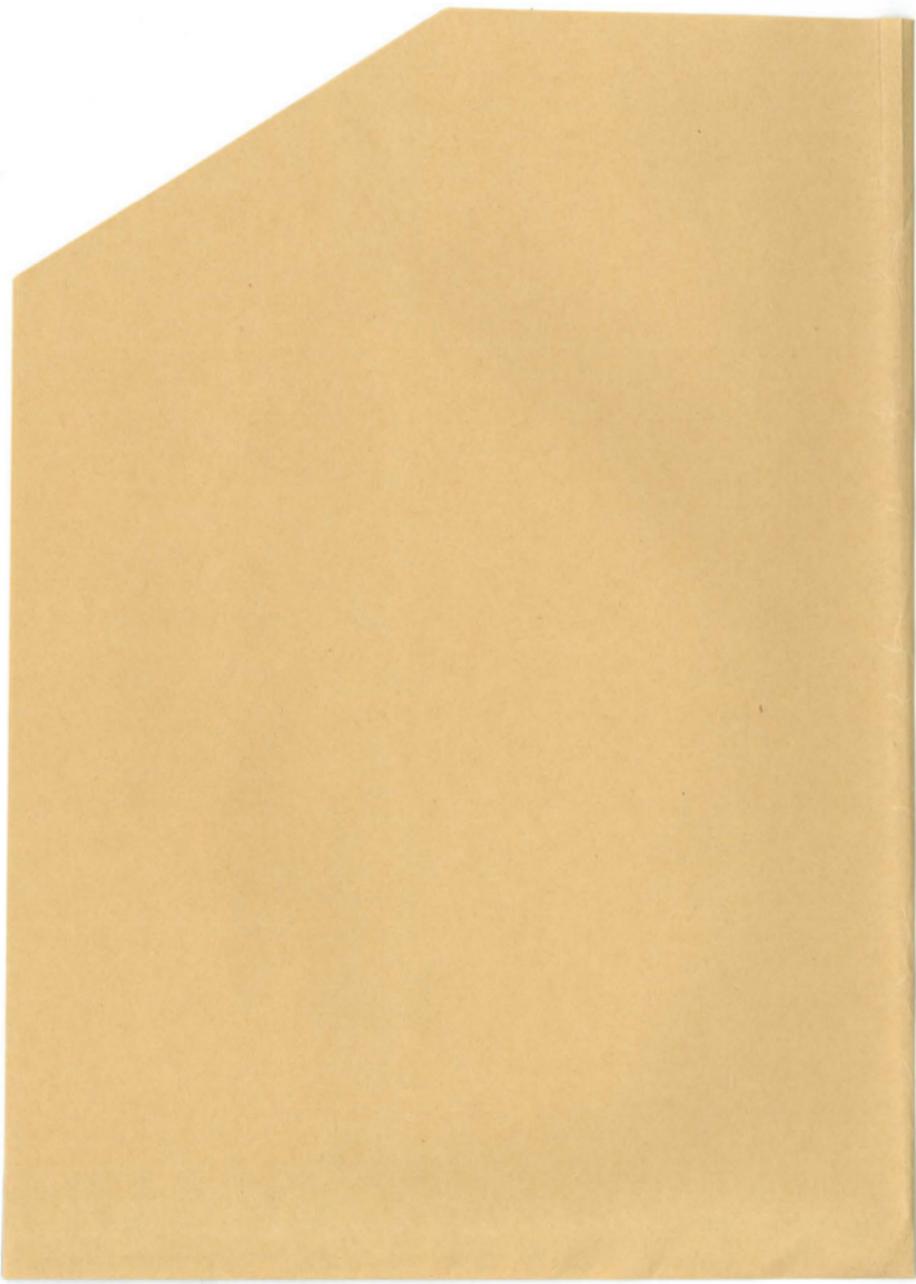
河内長野市教育委員会

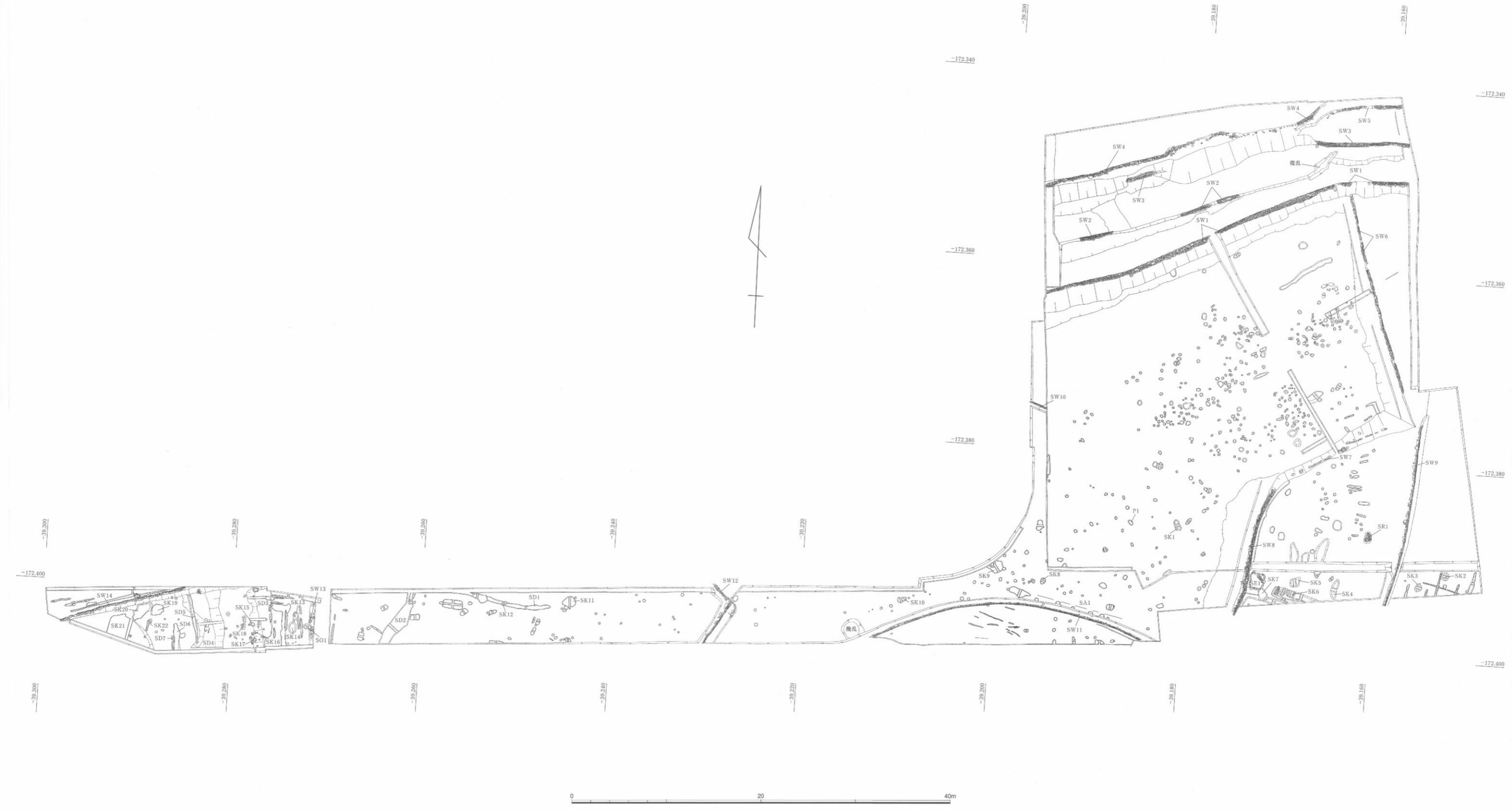
河内長野市遺跡調査会

0721-53-1111

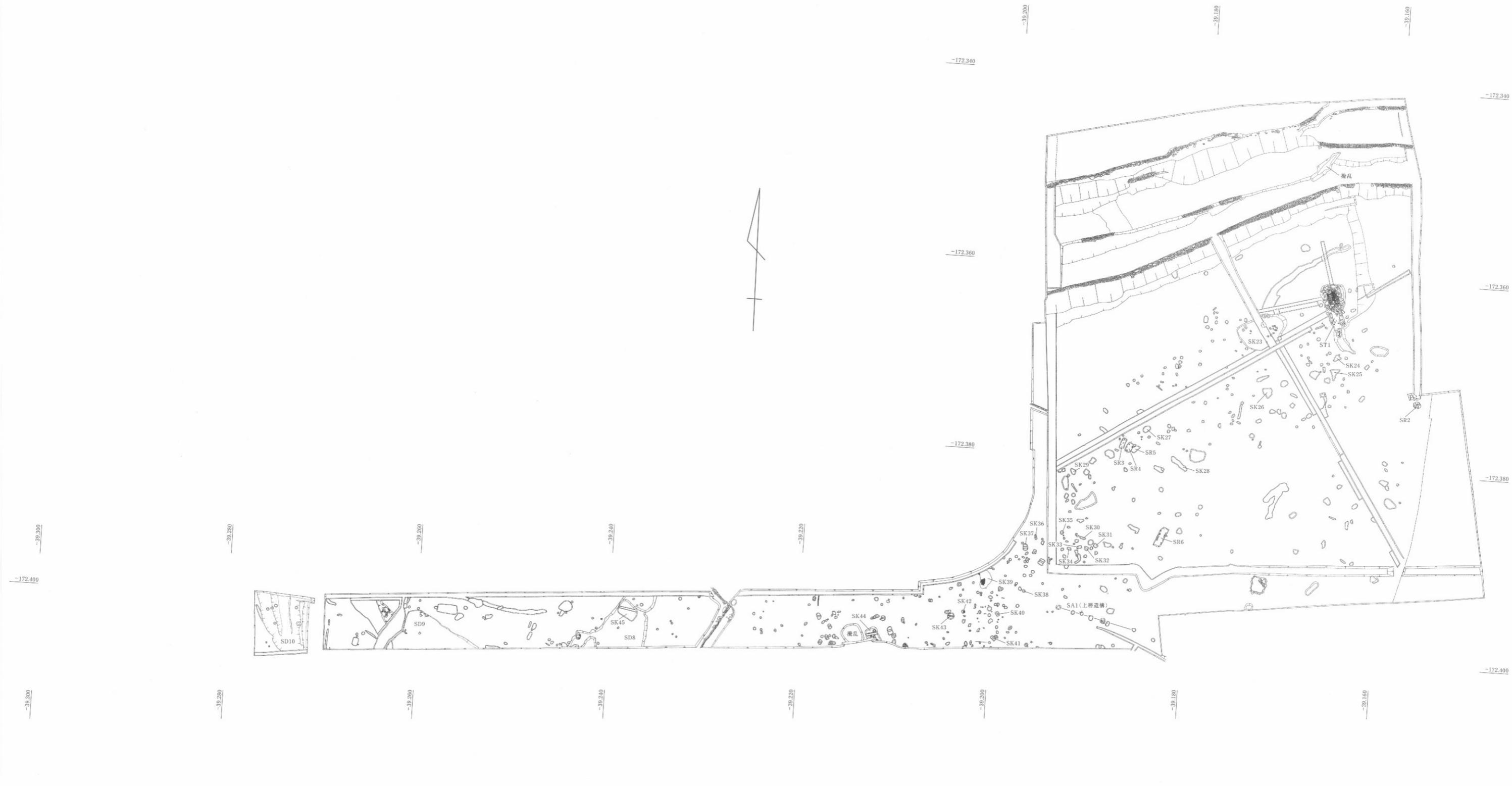
印刷 (株)大家印刷 CINCA

---





付図1 DNT99-1遺構全体図（上層遺構面）(1/200)



付図2 DNT99-1遺構全体図(下層遺構面)(1/200)

